

とーく&トーク 地域まちづくりを語る会

全国まちづくり会議 2017 in 横浜 特別編

横プラが総力戦でお届けする横浜・おもてなし講座

～地域から見えてくるハマのまちづくりクルーズ～

## 記 録 集

2017年12月

特定非営利活動法人 横浜プランナーズネットワーク



# 目次

はじめに.....	1
<b>実施概要・案内チラシ.....</b>	<b>2</b>
<b>1. 話題提供 ～横浜が先陣を切った、手本のない都市づくり～ 内海 宏.....</b>	<b>3</b>
はじめに 横浜のまち・まちづくり特性.....	4
例1：市街化調整区域の資源活用まちづくり.....	5
例2：戸建住宅地の環境保全まちづくり.....	7
例3：地域力・市民力発揮のまちづくり.....	9
<b>2. テーマトーク6連発.....</b>	<b>11</b>
① 裏横浜と呼ばれている地域が横浜の真骨頂 櫻井 淳.....	12
② 流域の視点がまちを変える 大澤 浩一.....	16
③ 静脈から発想するまちづくり 山本 耕平.....	20
④ 空き家活用はまちづくり 古居 みつ子/谷口 和豊.....	25
⑤ 障害者とともに楽しむまちづくり 桜井 悦子.....	28
⑥ 小さな拠点づくり 鈴木 智香子.....	32
<b>3. 話題整理 ～多彩な暮らしを背景として、全てはヨコツナガリで～ 山路 清貴 .....</b>	<b>37</b>
<b>4. パネルディスカッション ～横浜が目指してきたこと ちょっと失敗したことも含めて～ .....</b>	<b>41</b>
よそ者を受け入れる.....	43
大人の関係.....	44
反対運動は逃げずにとことん話し合う.....	45
行政が面倒をみてくれないので自分たちで解決する.....	49
よそ者を支援する、よそ者が支えている.....	50
トライ＆エラーの積み重ねが市民力を育ててきた.....	52
すでに若い担い手たちが色々なことをやっている.....	53
殿様がいないまち.....	54
レジェンドが隠れてしまうほどの市民力.....	54

横浜の市民はいかにして創られてきたか .....55

横プラに課せられた課題 .....56

**5. 資料編** ～当日配付資料～ ..... **59**

① 話題提供：横浜が先陣を切った、手本のない都市づくり 内海 宏 ..... 60

① 裏横浜と呼ばれている地域が横浜の真骨頂 櫻井 淳 ..... 72

② 流域の視点がまちを変える 大澤 浩一 ..... 80

③ 静脈から発想するまちづくり 山本 耕平 ..... 87

④ 空き家活用はまちづくり 古居 みつ子/谷口 和豊 ..... 97

⑤ 障害者とともに楽しむまちづくり 桜井 悦子 ..... 105

⑥ 小さな拠点づくり 鈴木 智香子 ..... 110

## はじめに

今回は全国まちづくり会議のフォーラムとして「とーく&トーク 地域まちづくりを語る会」を開催することとなりました。本日は市内外、遠方からお越しいただきまして、大変ありがとうございます。

横浜プランナーズネットワークは、20年ほど前に横浜のまちづくりをさらに推し進めていきたいという専門家が中心となり、行政の方、市民の方たちも一緒になって設立した団体です。10年ほど前にNPO法人になり、今に至っている非常に多士済々のメンバーで構成されております。

本日は、フォーラムに参加されている皆さんに、横浜のまちづくりについて普段はなかなか聞けない視点から、横浜のまちづくりの特色についてお伝えしたいと考えています。最後までおつきあってください。



特定非営利活動法人横浜プランナーズネットワーク

理事長 奥村玄

## 実施概要・案内チラシ

[全国まちづくり会議 2017 in 横浜 フォーラム #14] 主催：認定 NPO 日本都市計画家協会 共催：横浜市立大学

### 概要

日時：2017年10月8日(日) 13:00~16:30  
会場：横浜市立大学金沢八景キャンパス YCU スクエア Y204  
アクセス：京浜急行線 金沢八景駅 下車徒歩5分  
シーサイドライン 金沢八景駅 下車徒歩7分  
定員：150名  
主催：特定非営利活動法人 横浜プランナーズネットワーク  
★事前申込は不要です。

### プログラム

- 13:00 開会 進行：杉野 展子  
挨拶 理事長 奥村 玄
- 13:05 話題提供：内海 宏  
【横浜が先陣を切った、手本のない都市づくり】
- 13:35 テーマ・トーク6連発 15分×6=90分  
①【裏横浜と呼ばれている地域が横浜の真骨頂】 櫻井 淳  
②【流域の視点がまちを変える】 大澤 浩一  
③【静脈から発想するまちづくり】 山本 耕平  
④【空き家活用はまちづくり】 古居 みつ子/谷口 和豊  
⑤【障害者とともに楽しむまちづくり】 桜井 悦子  
⑥【小さな拠点づくり】 鈴木 智香子
- 15:05 休憩
- 15:15 話題の整理：山路 清貴  
【多彩な暮らしを背景として、全てはヨコソナガリで】
- 15:35 パネルディスカッション 進行：山本 耕平 FG：奥村 玄  
【横浜が目指してきたこと：ちょっと失敗したことも含めて】
- 16:30 閉会

※プログラムの内容は変更となる場合があります。

「トーク&トーク 地域まちづくりを語る会」 2017全まち会議特別編

横プラが総力戦でお届けする 横浜・おもてなし講座  
地域から見えてくる  
ハマのまちづくりクルーズ

急激な人口増加を迎えた一九六〇年代以降のまちづくりにおいて、横浜は何を目指しどのような変貌を遂げてきたのだろうか。今回のトークでは、様々な視点から現在の横浜のまちづくりを見つめ、徹底するハマ・スピリットに肉薄したい。

地域から発想すると、大きな制度からはみ出してしまふ。しかし、まちづくりは地域に軸足を置いて築き上げたい。「まちの変化にどのように対応してきたのか、ヨコプラはこのように考えている」ということについて、事例の解説ではなく、ヨコプラが実践的に関わってきたことから見えてくることを報告する。



特定非営利活動法人横浜プランナーズネットワーク  
横浜市中区山下町25番地 インベリアルビル 201号  
Tel/Fax 045-681-2922 yokopula@gmail.com

## 1. 話題提供

～横浜が先陣を切った、手本のない都市づくり～

内海 宏

私は生まれも育ちも戸塚の方で、戸塚というのはもともと相模の国で、いわゆる港町のところとは違うところで生まれ育った、そういう者でございます。今日は「横浜が先陣を切った、手本のない都市づくり」ということで、3つのテーマでお話しします。

横浜市外から来た皆さんは「港町・横浜」というイメージを持たれていると思いますが、実は山林とか農地だとか地方都市のような顔を持ったところも、横浜の大きな顔の1つです。そういう非常に多様性を持った町であると、横浜の認識を新たにさせていただきたいという想いで、今日は資料を用意しました。

## はじめに 横浜のまち・まちづくり特性

地形図を見ると、現在いる場所はこの辺り、金沢区です。中区、西区は都心といわれている部分で、いわゆる港町の顔を持ったところです。この黒々したところが稜線です。これは鶴見川、昔は暴れ川で非常に有名でした。それから横浜駅のところを流れる帷子川、市域内に源流がある市内で一番短い川です。この標高が比較的高いあたりは旭区で、昔は地元の人「横浜のチベット」と自ら呼んでいましたが、私は「横浜の軽井沢」と呼んだ方がいいのではないかと



と言っています。標高の高いところは、実際に夏の温度も2～3度低くなっています。

昔の国でいうと、この高い尾根筋の右側、つまり東側が武蔵の国、西側が相模の国になります。横浜市は市域を拡大していき、昭和14年、戦前ですね、今の横浜の市域が出来上がっています。ご覧のように東京23区と違って平坦ではなくて、起伏が非常にあり、道路整備とか鉄道を通すのも簡単ではない、障害物だらけという課題を抱えております。これが横浜の地形のもともとの姿です。

山の端のところには里山の旧集落が立地していて、川沿いの低いところに旧街道が通っているのですが、それ沿いにスプロールが始まって、徐々に丘の上に登って造成技術も発達をして大規模なニュータウン風のまちができるという形で、横浜の市街地はでき上がってきました。

これは横浜のD I D（人口集中地区）の面積がどの様に広がってきたかという図です。赤いほど古いという意味で、真っ赤なところは昭和35年（1960年）にすでに市街化していたところで、見てお分かりのように、臨海部にずっとまちが広がっていたのが古い横浜の姿です。それから相



鉄線や東海道線の沿線、それから東横線を通して東京と繋がることでまちが徐々に展開していきます。

北部の区、ここが港北ニュータウンですが、区画整理という手法でまちが作られてきました。30年位かけて少しずつまちができ続けています。住宅を取得する世代はだいたい40代前後ですが、長い間時間をかけてまちを作っていくと、その間、時間差で住宅取得世代が入り続けるので、結果的に多世代型のまちになっていきます。

南西部の郊外をみると、この薄い紫のところは市街化調整区域で、この環状2号線の外側にたくさんあります。北部に対して、金沢区や栄区では大規模な民間開発が多くあります。借金をして用地を買収しているので、出来るだけ早く宅地を造成して販売したいということで、一挙に同じ年代の人が大規模に入居することになる。40代で入った人が40年経って一斉に80歳代になる。民間開発が集中した南西部郊外や大規模団地の多い旭区などは、開発が早かった分、一気に高齢化を迎えています。当然亡くなる方も徐々に増え、若い世代の流出という問題もあって人口が減るという形になっています。

横浜全体では2019年から人口が減ると予測されていますが、すでに9区では人口減少、早いところではもう10年前位から減り始めているので、それが今後、市域全体でもすごい勢いで進展することになります。横浜は、昭和40年代の初頭から後半にかけて一気に大規模な民間開発が集中して、人口100万人から200万人を超え、300万人を超え、今は370万人という巨大都市が短期間（約66年）で出来上がったまちというのが大きな特徴です。

それによって今は様々な問題が出てきています。左近山、若葉台、光が丘など、駅からバスでも15分以上かかるような交通の便が良くない場所にできた大規模団地が多いというのも横浜の特徴ですが、高齢化が進む中で足の確保の問題が年々大きくなってきています。交通の便の問題に加え、例えば中層の団地で上層階にいる人がなかなか外に出にくくなるので、賃貸住宅が併設されているような団地だと、賃貸住宅でバリアフリー改修をすると、分譲住宅の4～5階にいる高齢者は持家を捨てて、賃貸の1～2階に移り住むということも起きています。まだ政策としてそのような対応がしっかりできている状況ではないというのが大きな特徴だと思います。

## 例1：市街化調整区域の資源活用まちづくり

横浜市域は、市街化調整区域が農地や樹林地として集団的に残っています。市街化調整区域が市域の1/4という、政令市の中では格段に多い都市です。しかも、まとまってあるというよりは、住宅地と市街化調整区域が郊外に島状に分布している形をとっています。それに伴って、横

浜のまちづくりは里山保全の活動をする団体や、農地を使った活動をするような団体が非常に多いという特徴もあります。

農業者も60歳以上の高齢者がすでに6割を超えているような状況で、後継者もおらず、担い手の高齢化はどんどん進んでいます。農業振興地域として保全策は講じられているのですが、耕しきれない農地が増えている中で、そこを市民あるいは社会福祉法人とか学校だとかが耕すという、荒れた農地を使った活動というものも非常にたくさんあります。

横浜の農地は約三千ha（市域の約7%）に及び、農産物の直売所も今は1300ヶ所位あるのですが、直売所の数が全国一多い都市という側面もあります。「市民利用型農園」と横浜市では呼んでいます。いわゆる市民農園も非常に数が多い。区画数で言うと6000区画近くあるのですが、「栽培収穫体験ファーム」と「特区農園」という2つの仕組みがあります。みんなで楽しむのが「栽培収穫体験ファーム」で、「特区農園」というのは区画貸の農園です。また、その4~5倍ぐらいの面積は市民が直接農家の方に使わせてもらっている、いわゆる「ヤミ農園」と言われている農地があります。農作業をする人は非常に多く、女性より男性の市民が多いのですが、そんな楽しみ方が郊外ではされている、横浜はそういうまちです。

農家のお宅の近くではないところ、山の上などの農地が真っ先に耕作放棄されるのですが、そのようなところで活動するグループもあります。栄区の「荒井沢緑栄塾」というグループは、平成8年からもう20年位活動していて、山の上に広がる2500㎡、2反5畝ぐらいのすごい広さの畑地を耕作しています。自分たちで作って自分たちで買って、その売上げを活動費にして肥料代などとして使うという活動です。区内の地域ケアプラザでそば打ちとかうどん打ちをしている団体としても有名で、粉代だけでボランティアでそば打ち・うどん打ちをやるという取り組みもしています。本郷台駅前に国際交流の施設がありますが、海外から来る人たちにうどん打ちとかそば打ちをやるとすごく喜んでもらえるということで、彼らは国際交流の担い手としても活躍しています。もともと里山の農地を耕すという活動を20年来やっていますけれども、それにとどまらない活動の広がりを見せているところです。

次は南区の事例です。南区は密集市街地で農地はほとんどありません。農家は確か1~2名はいるはずなのですが、六ッ川連合がやっている野外サロンの活動は市の土地2宅地分を6万5千円位で借りて行っています。引きこもりがちの男性にまちに出てもらおうと平成23年から始めた取り組みで、これがとても有効に機能しています。活動日は週1回なのですが、皆さん週1回では済まなくて、ほぼ毎日のように散歩のコースに組み入れて、入れ代わり立ち代わり活動するかたちになっています。引きこもりがちだった高齢者、特に男性がこの担い手で、今は30名位いま

す。農作業を通して皆さんだんだん元気になって、人のつながりもできて、今では地域活動の有力な担い手になって、中には町内会長に推薦された人も出ています。土を耕すのは人を耕すという事にも繋がるということで、非常に注目されている取り組みです。

市域の約 7%にも及ぶ大量の農地があって、横浜のベースの部分に市場経済の中の農業というものがしっかりと根付いています。徐々に後継者が少なくなっているとはいうものの、都市農業としての質は非常に高いものがあるので、それをベースにした上で、農家が耕せない農地を使った市民の活動で、食育とかコミュニティのつながりとか、社会的なセーフティネットをつなぐとか、あるいは社会福祉法人として雇用創出というようなところまで、かなり新しい農的空間の価値を生み出す取り組みが横浜には非常に多い。農産物というのは食べ物ですが、食べ物は人と人をつなぐ役割にとどまらず、それを売るとお金が稼げるので、エリアマネジメントとして活動費を自前で回すということもできます。また、コミュニティカフェへの食材提供といった活動が今後もっと出てくると思いますが、それによってコミュニティカフェのマネジメントもしやすい環境を作れるということで、新しい可能性もあると思っています。

## 例 2 : 戸建住宅地の環境保全まちづくり

次は戸建て住宅地の環境保全のまちづくりです。横浜はご覧のように第一種低層専用住宅と第二種を合わせると 31.4%、非常に大きな面積を占めています。当初は建ぺい率・容積率ほとんど 40%・60%でしたが、今は 50%・80%へと緩和されています。

広域での転入の流れをみると、東京都心から横浜へ転入してくるルートは横浜の北部方面や東横線沿線がメインルートになっています。この辺りに、新宿とか渋谷、池袋などに就職した若い人が住んで、東京都心へ通うという構図になっています。それから、結婚をしてここに住み始めるというカップルも非常に多くて、港北区は第一子の誕生率も西区と同じくらい高いところ です。

鶴見区は川崎に隣接し東京に一番近いところなので、人口が増えて少し赤い色になっています。青葉区、都筑区、緑区、という北部のエリアは今でも結構、人口の流動が起きているところです。

町丁別の世帯数の増減をみると、水色のところは世帯数が減少、赤いところが増えているとこ



ろですが、まだら模様で隣り合った状態で、赤と水色が存在しています。昔だと全体に真っ赤な状態で、みんな一斉に人口増加をしていましたが、今はマンションができる赤くなりますが、そうでないと真っ青というような話で、増えるのと減るのが同じ地域の中で同居している状況があります。その結果、高齢者の非常に多いところと少ないところがあったり、その間に市街化調整区域が入り交じっていたり、新しく人が入ってない団地などでは比較的旧住民が多くて高齢化率が高いとか、中には調整区域でもアパートがあるところでは子育て層がいたり、まだら模様でいろいろな事態が進んでいる状況が見てとれます。

横浜は今でも 180 件くらいの建築協定が運用されていますが、中でも「一人協定」が非常に多いです。「一人協定」がなされてから 10 年単位で見直しているところや協定期間が設定されていないところもあります。10 年ごとの見直しに私どもも派遣で行ったりするのですが、その中で結構いろいろな意見が中に出て、高齢化に伴う意見を頂くケースが非常に増えています。ちょっとした買い物をする場所が身近になくなったので何とかして欲しいというようなことや、身近なところに自分たちが入居できるような場所を作りたいと思っても、一戸建てしか認めていない建築協定では、共同住宅になるグループホームや高齢者住宅は建てられないとか。定年退職したら少し庭を広げてそこで農作業やガーデニングをやりたいが、庭が非常に狭いので屋上でできるようにフラットにしようとしたところ、建築協定でフラットな屋根はダメと規定されているところもあったりする。建築協定が老後の快適な生活を阻害しているような部分もあって、こうした議論が見直しのたびに色々出され、少しずつ建築協定の内容も変更するということが進んでいます。

栄区の庄戸のケースですが、ここは高級住宅街で風致地区もかかっているんで、建ぺい・容積が 30%・60%というとても厳しい制限になっているところなんです。ここを少し元気にして活性化したいということで、区の呼びかけで全員公募型で作られた組織が行っている交流サロンがあります。空き家を使って常設のサロンを開設して、庭木の手入れをする活動を始めたり、学校の子どもの授業を担当したり、公園でイベントをしたりということで、拠点があることで活発な活動をしています。

これは「まち普請事業」で案内サインを作った港南区美晴台の事例です。道路に名称をつけようという提案で、名前を付けるという作業に子どもたちを巻き込んで地域挙げての取り組みにした結果、名称を付けるにとどまらず、ガレージを使った野菜の直売を始めたり、子ども食堂のようなことを始めたりと、ハードの整備がきっかけとなり次から次へとソフトの活動が始まり、自治会が中心になってかなり多彩な活動をやる話に展開しています。この地域も高齢化で使われなくなったガレージが非常に増えているのですが、そこを使ってコーヒーショップのようなことを

実験的にやってみようとか、工作教室を開催するとか、まちに賑わいを生み出すようなことをもっとやっ払いこうと、いろいろな企画と準備が進められているところです。これも一低層の住宅街の事例です。

以上のように、快適な暮らしというのは、通勤を前提としたまちづくりだけではなくて、例えば在宅で出来るテレワークのような働き方だとか、趣味だとか工作教室だとか、地域の中でいろいろな交流ができる場を作るというのも、今は非常に重要になってきています。2世帯居住ができるような住宅だとか、高齢者のグループホームが住宅地の中でできるとか、シェアハウス、中には農園付きのシェアハウスのようなことも検討しているところもありますけれども。コンビニについては、横浜市はこの4月から許可制になって、一定の条件を満たせば一低層の中でもできるようにはなったのですが、なかなか条件が厳しくてハードルは高いようです。むしろ公園の一角に引き売りの車、何曜日は豆腐屋さん、何曜日は洋服屋さんとかたちで来てもらうような新しい買い物のあり方のようなこともやるべきではないかという話なども今は出始めています。都市計画の制度とか公園の使い勝手の問題だとか、まだまだバリアーになっている部分もあるので、こうしたところも少しずつ改善を進めないといけないという話がかかり出てきています。

### 例3：地域力・市民力発揮のまちづくり

横浜は自治会町内会の組織率が市域全体で75%もあり、栄区や金沢区などの高いところでは80%を超える組織率です。また、横浜はNPOの力も非常に高いところで、行政との協働で行う地域づくり、まちづくりの話がとてたくさんあります。自治会町内会の組織率が高くても、役員が輪番で毎年交代するような環境では、継続したまちづくりの地域課題の解決ができないということで、横浜は色々な工夫が行われています。あるところでは、興味・関心がある人を手上げ方式で集める仕組みを自治会の組織の中で作り出しているところもあります。住むことから、教育、たとえば学校の統廃合の問題とか、医療介護、就労、交通、買い物など、色々な問題を抱えた住宅地の中で、これからは、全体をマネジメントしていくという考え方が非常に重要で、こういうことに取り組んでいる地域組織も横浜では比較的多いと思います。

下和泉住宅自治会では「Eバス」という貸切バスを定期運行する取り組みを11年間ずっと続けてきました。1か月53万円位のお金を払い続けました。バスでは補えないようなところは送迎サービスのNPO法人を作って行って、足の確保に力を入れているグループです。

「地域緑のまちづくり事業」を活用した地域緑化を進めている旭区の白根台第九自治会。横浜は特別税の「みどり税」を徴収して、緑の保全、都市農業の振興、地域の緑化という3本建てで

補助を打っています。これまでは、緑化というと自分たちの家の中、家から眺めてみるものが緑化だったのが、この活動によって、今では家から外に開かれて、あるいは外からまちの人が見て楽しめるのが緑化だと考えるようになったくらい、まち全体の動きになった事例もあります。

横浜は基盤整備、根幹的なところを作るステージを終え、これから少しずつ自分たちのまちとして作り直すような活動があちこちで出てきています。

中には地域福祉保健計画のソフトな計画にリンクさせて、見守りとかつながりづくりを促進するようなサロンやカフェを作ろうというような動き、それが様々な身近な住環境あるいは暮らしを豊かにするためのハード整備に繋がるといったこともたくさん出始めていて、これがまち普請事業や区の助成制度などを使って実際に展開されている状況です。

ハードからソフト、プランも単なるプランでなく実現をするためのプランという意味合いを強めた動きなど、多様な地域まちづくりが非常に強まっています。横浜の特性を踏まえて、時代の最先端をいく地域まちづくりの一端を報告させていただきました。

## 2. テーマトーク6連発

- |                       |              |
|-----------------------|--------------|
| ① 裏横浜と呼ばれている地域が横浜の真骨頂 | 櫻井 淳         |
| ② 流域の視点がまちを変える】       | 大澤 浩一        |
| ③ 静脈から発想するまちづくり       | 山本 耕平        |
| ④ 空き家活用はまちづくり         | 古居 みつ子/谷口 和豊 |
| ⑤ 障害者とともに楽しむまちづくり     | 桜井 悦子        |
| ⑥ 小さな拠点づくり            | 鈴木 智香子       |

## ① 裏横浜と呼ばれている地域が横浜の真骨頂 櫻井 淳

私の横浜での最初の仕事は「中区の魅力づくり」というものでした。そのあと、元町商店街の第3期の計画・設計をして、その頃は事務所がまだ渋谷にあったのですが、今から12年くらい前に横浜へ事務所を移しまして、最近はほとんど横浜の仕事しかしていません。その中で、みなとみらいや元町、中華街、馬車道といういわゆる横浜の顔とは違った、「裏横浜」というと



ころが刺激的で非常に面白いというのを発見して、横浜に“関内を愛する会”という会があるのですが、私は自分で“関外を愛する会”というのを作って、横浜市の職員の方と少し勉強をしていた記憶があります。

これはあの北沢さんが作った横浜の歴史絵本からの昔の絵図です。ここがいわゆる「横浜」と言われた最初の浜辺で、図では今ここにペリーの艦隊が来ていて、上陸しているのがちょうどスカンディアの辺り、埠頭が象の鼻のような形になっているので象の鼻です。入り江が奥まわって湾を形成し、吉田新田として埋め立てたところです。その湾の入口に長い浜があったので「横浜」と呼ばれた訳ですけど、それがちょうど今の弁天通の辺りです。その付け根が横浜の中でも一番地盤が良いところで、ここには昔は川がなかったのですが、ここを切り拓いて堀川という運河を作りました。

これによって幕府は横浜を出島にしたのです。この出島のところが「関内」と呼ばれるところで、出島の外は「関外」と呼ばれています。元町は、堀川より先にいた横浜村の住民を移したので「元町」になりました。つまり私が言いたいのは、関内と関外を比べると、実は関外の方が横浜の面白い文化があるということです。

この地図はこれまでの絵と逆を向いているのですが、この横浜だったところに堀川を作って関内が出島になったのですが、その中に馬車道や中華街があります。この中華街は元々田んぼで、関内は横浜の海岸線に沿って道路を作ったのですが、中華街は東西南北の方角に沿って田んぼの畦ができていたので、ここだけ45度振れているのです。まるで胃袋みたいに斜めに曲がっているものですから、それでここが中華街という胃袋になったのだという話もあります。それで堀川の外側に元町ができたのですが、山手に外国人の居留地が出来きて外国人が住み始めたので、その



外国人のためのお店が出来き、下請け産業というか修理だとかで生計を立てる珍しいお店が集積し、ここに元町ができたということです。

また、馬車道の外側に「野毛」があります。これは戦後すぐに闇市が桜木町の駅の側にできたのですが周辺は進駐軍に接收され、野毛だけが賑わいがありました。「寿町」は昭和 31 年に接收が解除され簡易宿泊所ができてはじめて寄せ場となり、日雇い労働者の街になります。そこに職安も野毛から寿に移転してきた訳です。戦前は、「伊勢佐木町」の辺りが昔の一番の繁華街で、関内が外国人の街だとすると、こちらは日本人の街で、明治から大正にかけては浅草と並ぶくらいの劇場がたくさんありました。そして横浜橋商店街、ここには以前は横浜の廓（くるわ）の「真金町」があつて、戦後はいわゆる「赤線」となります。戦後は若葉町の辺りに進駐軍の飛行場があつたこともあつて、伊勢佐木町の辺りは米軍の第 8 軍にほぼ全域を占領されて、それが接收解除されたのが昭和 35 年です。横浜は時間が経ってから接收解除されたので、開発が遅れていたのです。

この写真は寿町についてで、寿は大阪のあいりん地区と東京の山谷と並んで、日本の「三大ドヤ」と言われているのですが、山谷もあいりん地区も江戸時代にできたのに対して、寿だけが戦後にできた珍しいところですよ。何が面白いかというと、ここには色々な人が集まってきて、例えば、昔の学生運動で敗れた元活動家の人とか、非常に優れた社会運動家とかがここに集まって、炊き出しをしたりするのです。私たちもやりましたが、この写真が「さなぎの食堂」で、残念ながら今年の 7 月になくなってしまったのですが、近くのローソンで余った期限切れ寸前の食べ物をもらってきて、1 食 300 円で食べさせるとかいうことをやっていました。

この図は 5 年毎に年齢構成のピークがどう遷移しているかというものなのですが、平成 20 年くらいからこの山が動かなくなってきています。セーフティネットとして 60 歳代で寿町に流入してきて、それで 65 歳から 70 歳の手前くらいでみな亡くなるという、非常に短命で 5 年間くらいしかここにはいないのです。ギャンブルやアルコール依存症で困った人が常に供給されて、そういう人たちがみんなここで亡くなっていく。昔の寄せ場が、今はまさに高齢福祉社会をどのようにして作っていくかという場所になっていて、そこに色々な人が集まってきています。

この写真が先日取り壊された寿町の労働福祉会館です。これは緒形先生という私共もよくお酒を呑んだ建築家の先生が作った建物で、それを壊した跡地に横浜トリエンナーレの 1 つの試みとして「水族館劇場」という、劇団黒テントと対抗するような人たちが、ここにテント小屋を作ったのです。これまでのトリエンナーレの中でこれが一番秀逸だったのではないかなと思うくらいの仕掛けで、ちょうど 9 月 1 日から毎日 10 何 t の水を上から降らせるのです。僕は前から 2 番目

に座っていたのですが、客席もびしょびしょになるというものでした。こうした面白い人たちもここに集まってきて、彼らも「絶対ここでやりたい」と言っていました。こういう場所が色々な人を集めてくるという、インナーシティとしての面白さのようなものが新しい文化を生んでいく場所です。

この写真は真金町の大鷲神社を見ていて、ここは元の赤線だったところで、その側に横浜橋商店街というのがあります。今は韓国系・中国系の食料品店に変わってしまっているのですが、この周辺はほとんど外国の人たちの住まいで、かなり多くの方が住んでいる。例えば、あるアパートは一棟に中国人が10人ぐらい住んでいるとか、東電がメーターを見に行くとき普通はだいたい8時間程度しか動かないのですが、24時間ぐるぐる回っているという、とても面白い人たちがこの周辺、関外には住んでいます。いわゆるジャパンファーストやアメリカンファーストではなく、外国人を受け入れる心意気があるというか、寛容性があるというのが関外の特徴ではないかと私は思っています。

この写真はちょうど黄金町で「バイバイ作戦」が始まった頃、僕らが入った時期の黄金町の界隈です。これは以前の「ちょんの間」で、入口の前に女性が2人ずつ立っていて24時間で営業していた場所、この上に1畳より少し広いくらいで布団が1つ敷いてある「ちょんの間」という部屋が2つあります。ここは「バイバイ作戦」で女性たちがいなくなった後の写真です。



この大岡川沿いに面した黄金町のまさに「ちょんの間」の場所に、私どもは12年前くらいからまちづくりに入りました。地図の左下が黄金町で右上が日ノ出町、それに並行して大岡川が流れています。この京急の高架下に100店舗くらいの「ちょんの間」があったのですが、京急が神戸の震災のあとに鉄道を耐震補強するので出て行って欲しいとお金を積んで追い出したのです。そしたらなんとそのお金を使って、周辺にドッと店が増えて250店舗くらいになってしまったのです。

それで一番大きな声を上げたのが、山の上にある東(あずま)小学校のPTAの人たちでした。ここはいわゆるパフィー通りという有名な通りなのですが、この道が子どもたちの通学路になっているので、こういう店の前を小学生が通って通学するのはたまったものじゃない、どうにかし

てくださいとPTAが立ち上がりました。その頃、僕らも警察官と一緒に酒を呑みながらまちづくりするという、不思議なまちづくりをしていました。

この写真はみかん組の曾我部さんが高架下に設計した「黄金スタジオ」というアートスペース、これは小泉さんが設計した「高架下Dスタジオ」です。それからこれは、その後の2010年の「黄金町バザール」の写真で、空き家になった「ちょんの間」をどう使うかと考えたときに、たぶんあの寂しいところに入るのはアーティストしかいないだろうという話になって、誰が言ったか僕が言ったか知らないですが。それでアーティストがどんどん入ってきて、やっとまちが変わり始めました。そしてこの写真はまち普請事業で整備した高架下の「階段広場」、市民がみんなで施工してまさにまち普請をした広場で、これは今も色々な使われ方をしています。

この写真は野毛の都橋ですが、これがとても面白いのは、野毛の闇市をクリアランスするために川橋の上に店舗を作った飲み屋です。ここも今は店主が高齢化してきていて、色々な人に店を貸して変わってきています。ところでみなさん、最近、野毛に行かれたことありますか？今、野毛に行くとおじさんたちの居場所がほとんどなくなってしまっています。まさにこの写真のような状態で、道路に椅子を出して若者たちが飲んでいる。それからファッションやフランス料理といった女性向けの店も出てきて、まちの雰囲気がとても変わってしまいました。

最後の写真は野毛の大道芸ですが、これもすごい市民力があって、東横線の廃線の時の保証金を活用し、福田さんなどが始めた大道芸のイベントです。このように、公共空間を活用したコト起こしを行っていくというのがこれからの趨勢だろうと考えています。昨日の講演会の大阪の事例でもありましたが、大阪の「水都」のように水を使うとか、そういった公共空間をどう使っていかかということを考えていく必要がある。野毛のSという餃子屋のおじさんが道路専用をどんどん勝手にやって警察に注意されて、これから別の手を考えていきますと話していました。

横浜は3日いたら横浜市民と言うくらい、他からの人を許容するというか、多様性を許容する文化がある。また、皆さん知っていると思いますが、野毛に光音座という映画館があって、そこはホモ・セクシュアル専用の映画を上映している映画館です。また野毛には会員制と看板がかかった飲み屋が多くありますが、そこはゲイバーです。リチャード・フロリダが言う、クリエイティブ都市論によれば、ゲイの数が多いほどその都市の創造性が高いと言っています。ところで映画館光音は、左側がホモ・セクシュアル映画で右側がエロ映画なのですが、みなさん、右左を間違っ入らないようにということで、これで終わりにします。ありがとうございました。

## ② 流域の視点がまちを変える 大澤 浩一

私のテーマは「流域の視点がまちを変える」ということで、横浜を流れている川に市民がどのように関わってきたのかというお話をさせていただきます。私は実際に鶴見川で市民活動をしていまして、鶴見川では「鶴見川流域ネットワーク」という市民団体のネットワークでNPO法人もできています。横浜市全体では、



小さな流域をなす川が各地域にあり、それぞれの川に関わっている市民団体同士のネットワークを作っていく活動が1998年から始まりました。当初は「よこはま川のフォーラム」という名称だったのですが、途中から「流域連携よこはま」と名称を変えています。当初は各河川・流域を軸に各地の流域活動をますます活発にしていこうと始めましたが、今は横浜全体での連携活動が停滞してしまっています。

横浜は色々な見かたがありますが、この図の緑色の陰影は地形の凸凹を表しています。先ほど内海さんから、横浜は実は丘陵地や台地がとても多いというお話がありましたが、その周辺を見ると細かい凸凹＝谷戸が多数あるのがわかります。降った雨が流れて集まってくるのが「流域」というエリアで、このオレンジ色の線はその流域を区切ったものです。横浜市域は少し太い赤い線で描かれていて、一番北に大きな鶴見川の流域があり、その源流は東京都町田市です。もう一つ西側に細長い境川の流域があります。この川は相模原市や大和市、藤沢市といった市の境をなしています。先ほど話に出ました帷子川とか大岡川の流域は全て横浜市内で完結しています。他には、入江川や滝の川などがあり、宮川と侍従川などは金沢区内で流域が完結しています。横浜市内にはそういった非常に小さな川の流域が多くあります。

次の図は先ほどからよく出ている横浜市の土地利用、用途地域の図で、これに流域を重ねたものです。青い線は区域で市内に18区あります。これを見比べると、各河川の流域のエリアと金沢区とか中区とかいう区域が違っているのが分かり、意外と面白いのですが、違うことで大変なこともあります。先ほど内海さんのお話にもありましたが、用途地域と流域を重ねてみると、海側は工業地域や商業地域で昔から人が住んできたエリア、西に行くにしたがって緑色の住宅地、白く抜けているのが市街化調整区域です。市内には丘陵地が約7割を占めていますが、逆に言うと370万もの人たちが様々な開発計画に乗って、外からこれらの土地に入ってきたということです。

この横浜は、昭和の50年代半ばから後半くらいまでは次々と人が入ってきて、特に下水とかごみなどの都市の基盤整備が後手後手に回ってしまい、まったく追いつかない状態でした。川はどんどん汚れてしまって、その一方で道路を作らなければならないので、小さな川はみんな暗渠にして道になってしまいました。人口の増加がひと段落してくる頃になっても、川にはとても近寄れる状態ではありませんでした。今はそんな面影がどこにあるのかという位きれいですが、当時の鶴見川は、通勤電車で寝ていると橋の上で目が覚めるというくらい臭ったと言われています。

そのような状況もひと段落して、少し汚いけれども川が気になる人たちが出てきて、昭和50年代後半くらいから、身近な水辺を取り戻す活動があちこちで起きてきました。少しでも川をきれいにしよう、あるいは子ども達が触れあえる身近な自然として川を考えていきたいというもので、水が汚いのできれいにしようという活動で「石けん運動」という名前を聞いたことがあると思いますが、特にお母さんたちが中心になって、日常生活に密着した水辺で様々な活動が起きてきました。面白いのは、川というのは繋がっていることで、汚いものはどこから流れてくるのかということで、川をたどっていくと源流まで辿り着き、おのずと水系・流域連携が生まれます。

ひとつ言い忘れてましたが、市内に小さな川があるということは、丘陵地で降った雨がしみ込んで湧水が出て、その湧水が侵食していった小さな谷、「谷戸（やと）」と呼ばれる地形がたくさんあります。もともと市内には3千数百くらいの谷戸がありましたが、おそらく今は湧水が出るところは数えるほどしか残っていないと思います。このような小さな水辺の周りに人が住んで、ある意味で生活と関わった水辺があった、市内にはそうした環境が一部に今でも残っています。

そのような川で活動をしている市民が「川を良くしよう」ということで集まって、行政側の支援も受けて1998年に「よこはま川のフォーラム」という川・水辺の市民団体が出会う機会を設けてもらいました。横浜じゅうで活動をしている人たちが、自分たちの活動の場所の紹介やその水を持ってきて比べるなど、結構面白いことをやりました。それがきっかけで、あそこの水辺はどういう水辺なのだろうと、みんなで訪ねてまわることとなり、1998年から大きな7つの川・水系の流域をめぐるイベントが毎年持ち回りで行われました。1年間の活動を持ち寄って、イベントが開催されるに川に行って体験すると同時に、自分たちの川での活動発表の機会ともなりました。多くの活動が子どもたちとの関わりがあるので、子どもたちもイベントに参加するケースが結構ありました。活動をパネルで紹介して、元気に活動して、その頃は本当にみんな若かったですが、大いに飲んで語りあいました。

これは違う立場で言うと、行政もそのような活動を後押しして水辺を中心に市民の活動を広げていこうという思いがあり、結果的に行政が色々な施策として後押しをしてくれたのだと思いま

す。その反面、そういった行政の支援が切れた途端に活動が厳しくなって、それでも市民の力で頑張ろうということで活動を続けたのが「流域連携よこはま」という組織です。この組織は基本的には市民が中心になって運営をしています。その中でも一番大きな川・水系の流域である鶴見川では次々と活動が進んでいきました。鶴見川は国が管理をしているということもあって、ある意味、国のバックアップがありました。

また、大岡川という川は横浜の母なる川で、源流から河口まで先ほど話をした多様な地域を含んでいます。流域連携よこはまでは、大岡川はモデルとなる川で、源流域は森として保全されており、河口はMM、関内、関外地区という横浜の歴史を代表するまちがある、あるいは横浜の裏側の世界も含まれている。そのような多様なものを川でひとまとめにして考えよう



という実践を始めました。この時はH S B Cという外国の企業による支援があり、支援があるときは元気にできるのですが、支援も途中で終わってしまい、それでも頑張っただけでも続けています。川がきれいになると、きれいになった川を前提とした新しい団体が出てきます。水辺でお祭りをしたり、カヌーやSUPをしたり、あるいはそれを目当てに商業関係の人も入ってきたりと、そういった新しい人たちと川の問題を一緒に勉強しようということで、今は色々なイベントに参加しています。河口域では川の利用についてルールを作ったりもしました。

さて、一番大きな鶴見川ですが、左下の図は流域の利用状況の変遷で、約60年前の昭和33年当時は緑色の田んぼ・畑・森ばかりで、市街地は1割くらいしかありませんでした。それが今は逆転しています。そうすると、降った雨が地面に染みこまずに一気に下流に出てくるので、河川管理者、国レベルで様々な対策が行われてきました。その施策によって活動が継続できているのですが、そこには様々な市民団体の活動があります。特に鶴見川では「鶴見川流域ネットワーキング」という鶴見川で活動する約40数団体のネットワークがあります。その中でも地域と連携している、あるいは行政や企業と連携している事例をいくつか紹介します。

この写真は下流域の鶴見区の駒岡です。その河川敷に地元の連合町内会の方々が広場を作りたいということで、ヨコハマ市民まち普請事業の助成を得て、地域の人たちが憩える広場を作る活動が始まりました。河川区域の中はいろいろとややこしいルールがあるので、そのすぐそばで活動している市民団体に、支援や協力をしてもらって一緒にやることになりました。ちょうどそ

の頃、元々はそういう話は全くなかったのですが、川に災害用に防災船着場を国が整備する話が急に出てきて、その整備と一緒にやることになりました。結果的には地域にとっても災害時に役立つということで、地域と国と市で合同防災訓練を行ったり、普段から使っていないといざという時に使えないので、毎年イベントやりましょうということで、清掃活動やハゼ釣り大会などと船着場を活用したボート試乗会を行ったりしています。

これは下流にあるキリンビールの工場です。実はここも阪神淡路大震災を経験した方が副工場長として赴任して来て、阪神淡路の復興に向けて地元のNPOと組んで色々なことをしてきたので、ここでもNPOと連携したいとの紹介依頼が区より来て、鶴見川で活動している我々が入って地域の方とも一緒に川の清掃をやっています。そのような中で、できてから20年近く経つ工場内の池を改修することになり、川のことやっているのだから協力をしてくれという話で、NPO鶴見川流域ネットワークが協力しました。ここでは環境保全の意味で鶴見川に住んでいる魚を飼うことにして、企業では工場見学とあわせて自然の恵みを感じるツアーを行っています。

他にも地域の企業との連携はいくつかありますが、イベントの開催が多いです。地元の方や関連する企業と実行委員会を作って、川でのイベントと絡めて地域の様々なことをやっています。このような持ち場をもって活動をしている団体の活動場所で、良いところも、問題のあるところもありますが、マップを作ったり、イベントをやったりしてお互いを繋いで体験しあう、流域ツアーリズムというものも進めています。

そのような中で最近、川では色々な問題が起きてきています。これは川だけの問題ではありませんが、大きくは地球温暖化の影響で雨の降り方が変わってきているので、特にフィールドを持っている活動では、洪水、環境の変化、生き物の変化など、こうした大きな変化に対応をしながら活動していかなければなりません。そして高齢化や資金不足などの問題、農地は資金が生まれてくるという話ですが、川はほとんど出ていくだけです。しかし、ひとつの手掛かりとして、横浜には「水辺愛護会」という地域組織の制度があります。活動場所も地域の中の水辺ですので、地域の方々や企業と上手く連携して、地域の川を横浜の川として見直しながら活動を続けてきたいと考えています。

### ③ 静脈から発想するまちづくり 山本 耕平

横浜プランナーズネットワークの山本です。私は横プラの中では異色でして、主に廃棄物の問題に関わってきました。昨日はポスター展示で「トイレとまちづくり」についてプレゼンさせていただきましたが、トイレは仕事という訳ではなくて、「日本トイレ協会」という組織を30年ほど前に作りまして、社会のトイレ環境を改善していこうという活動をやってきました。



実は横浜市はトイレ先進都市で、明治初期には浅野総一郎がお金を出して、日本で最初の洋風建築の公衆便所（公衆トイレ）を作りました。80年代の終わり頃から90年代にかけて、横浜市は公衆トイレの整備に力を入れまして、「さわやかトイレ」という一穴で床ごと水洗いするというようなトイレを開発したり、多機能トイレを公衆トイレに設置したのも横浜市が最初ですし、まちづくりの中で公衆トイレを位置づけて整備してきました。横浜駅西口広場や元町、関内駅前のトイレは30年くらい前につくられたトイレですが、現在でも立派に使われています。11月18日（土）にこうした「まちなかトイレを考える」というシンポジウムを旭公会堂で行いますので、ぜひ参加ください。

今回のタイトルは「静脈から発想する」ということで、横浜を「裏側」の観点から見てみます。私はずっと廃棄物に関わってきて、今日の会場でチンとやっているタイムキーパーの伊藤さんがプロデューサーをされていたテレビ東京の「未来世紀ジパング」という番組について先週、出演しまして、番組の冒頭に少し夢の島を紹介しました、10秒くらいですが（笑）。

まずは横浜のごみの問題です。他の方の話にもあったように、1960年代70年代の高度成長時代に横浜は急激に発展しましたが、この当時は全国的にごみの問題が大変深刻でした。一番有名なのは「東京ごみ戦争」で、昭和46年に東京都の美濃部知事が議会でそう宣言して、「ごみ戦争」という言葉はその後、ずっと使われました。先ほど話をした夢の島は、今の新木場駅があるところで駅の裏側が当時のごみの埋立地です。新木場駅の海側の若洲というところは15号埋立地と呼ばれて、夢の島の後にこちらへもごみが埋められて、若洲ゴルフ場にはまだメタンガスを抜くパイプがあると思いますが、そのような場所です。

横浜はこれだけ急激に発展したのだから、ごみに関しても大きな問題がたくさん起きたのでは



ないかと思って古い方に聞いてみたのですが、東京ほど大きな問題にはならなかったということでした。横浜は比較的先手、先手を打って、清掃工場も昭和44年に磯子工場、昭和48年に旭工場を建設して、この当時にはすでに廃熱を利用した温水プールを併設したり、発電をしたりしてとても先進的な焼却施設を作っています。処分場も神明台処分地がありまして、これは昭和48年に稼働を始めたのですが、ずっと古くからその周辺を使ってきたこともあって、設置自体はそれほど大きな問題にはならなかった。むしろ、近年に約束通り閉鎖しろということの方に住民との軋轢があったらしいですが、他都市に比べて住民との対話は進んでいたのだと思います。横浜のごみの先進的な取り組みというと、後でお話します「G30」です、これは横浜の人はみんな知っているのですが、横浜市民以外の人は誰も知らないという不思議な言葉です(笑)。

この図は50年間の全国のごみ量をグラフにしたものですが、高度成長時代の飛鳥田市政の頃の横浜のごみの増え方はもっと急激で、当時の経済成長率は10%くらいですが、ごみは数年間で倍々ゲームで増えるという状態でした。当時の横浜市には6大事業というものがありましたが、その裏側でごみとか公害とか水の供給の問題や土地の問題、そして自動車渋滞の問題といった「5大戦争」というものもありまして、このようなことを政策の重要課題として取り組んでいました。横浜市はどちらかというと技術が優れている役所で、問題を技術的に解決しようと金沢の埋立地に、当時「スターダスト80」という国家プロジェクトの実証プラントを作りました。これはごみをそのまま機械に入れると、紙ができたり、熱分解してガスができたり、色々なものに生まれ変わるという夢のようなシステムの実証プラントでした。結局、全部失敗してしまってほとんど何も残っていないというのが一般的な評価でしたが(笑)、そのときの要素技術はその後に生きているものもあるかも知れません。

この時にごみは燃やすだけではなくて「リサイクル」をしようということで、これを技術でやるのか人手でやるのか、コミュニティ派か技術派かという論争がずいぶんありました。混合でごみを集めて技術で選別をしてもろくな資源はとれないのだから、市民が自分で分別するというのがコミュニティ派の考えです。日本はどちらかというとコミュニティ派が勝ちまして、技術派はほとんどいなくなってしまうました。ドイツなどではすごいソーティング(選別)の技術があって、例えばプラスチックなどは一括に集めてそれを素材ごとに分別するということが機械的に行われていますが、日本はまだ手作業でやっている、そのようなことでソーティング技術が遅れているということがあります。それから、みなとみらいには管路輸送というごみの空気輸送システムが導入されたのですが、これは確か今年度中に運用終了と聞いています。このようなものが、つくばとか多摩ニュータウンとか大阪の南港ニュータウン、千葉ニュータウンなど、当時は様々

な場所に導入されたのですが、やはりごみは分別しないとイケないということで、混合してパイプで集めるものは全て失敗してしまいました。

他方、民間では様々な活動がありまして、横浜の発展を裏から、陰から支えてきたのが「静脈産業」です。もう1つが「肝腎産業」で、静脈という流れに対して、血液で言うと肝臓や腎臓の役割をする産業が横浜にはいくつもあります。特に大きなものと言えば製鉄業です。高炉が再編される中でJFEは鶴見の高炉を止めませんでした。その理由を都市ごみ処理という機能を維持しておく必要があるからだと言っています。R&Dセンターでは都市ごみ処理に関する研究開発をいろいろ行って、JFEの製鉄所では横浜市内で出る容器包装プラスチックをコークスの代替原料として使っています。製鉄所はそういうまさに肝腎要の産業になっているのですが、都市で出る様々なものを活用する多数の工場が臨海部に位置しています。ビール工場があるのでガラス瓶をリユースするとか、ガラスメーカーではガラスくずを再利用するとか、もう1つウエスという「ぼろ（故繊維）」を扱うぼろ屋さんというものもあります。人口が多いと古紙やぼろなどの資源の発生が多いので、これを回収する商売が発展します。横浜港は再生資源の輸出入にも関わってまして、例えばかつて日本は段ボールなども輸入をしていました、今はもう輸出ですが。それから「ぼろ」は基本的に輸出です、ヨーロッパは羊毛ですが日本人は木綿を着ます、工場でする雑巾だとか大砲を磨くとか銃器を磨くのは毛物ではだめなのです。だから日本の「ぼろ」というのはたくさん輸出されていて、ものすごく儲けたので「ぼろ儲け」というふうに言われるようになったのです(笑)。

横浜にはこういう静脈産業がたくさんあります。集団回収もすごく盛んで、市内で200社くらいが集団回収業者として登録されています。ぼろ屋さん和市民がタイアップして「ファイバーリサイクル」という、古着やぼろを回収するシステムがあります。もともと「ぼろ」というのは紙の原料として扱われたので、ぼろだけを回収するシステムは持っていないのです。古紙と一緒に集まってくるというのが「ぼろ」の流れで、つまり静脈を持ってないのがぼろ屋さんの世界だったのですが、市民から直接集めるという仕組みを「ファイバーリサイクルネットワーク」という名前をつけて行ったのが横浜のぼろ屋さんでした。

非常にエポックメイキングな出来事というのが「G30」です。これは当時の中田市長がつけた名前ですが、2010年度におけるごみ排出量を30%削減しようということです。中田さんという人は学生時代からごみを勉強していて、松下政経塾に入ってから実は私たちの勉強会によく来ていました。のちに国会議員を経て市長になってから会った時に、私はごみをやるために市長になりましたなんて言っていましたから、ごみにはとても思い入れがあった。そこで何をしたかで

すが、この当時のごみに関する色々な法律ができて始めていた時で、横浜は少し立ち遅れていました。そこで、先ほどのコミュニティ派の立場で市民と一緒に協働で様々な取り組みをやりました。資源分別収集を始めたり、集団回収を拡大したり、色々なキャンペーンをやったりとか、それに「横浜G30」というスローガンを掲げて官民を挙げて努力した結果、2009年度実



績でゴミが40%も削減されたということで、清掃工場も2つ廃止するなどの成果が上がりました。本当かなと思って全国の政令指定都市の1人1日当たりのごみ排出量のグラフを作ってみたのですが、横浜市は少ない方から2番目でした。1番少ないのは広島市でその次が横浜、次いで川崎、京都と並んでいます。2000年前後に藤前干潟をごみの処分場にしようという計画に市民が反対したことをきっかけに、徹底的にごみ減量に取り組んだ名古屋市がほぼ中央くらいです。1番多いのは北九州市でして、環境に1番熱心な市だと思っているので統計の取り方が少し違うのかも知れませんが、横浜はごみの減量にとっても成功したということと言えます。今は「G30」の次の「横浜3R夢（スリム）プラン」というものを横浜らしく格好よくやっています。

また、他の都市ではやっていない例として農業との連携があります。横浜は養豚が盛んで、市内に10くらいの養豚場があって毎年1万5000頭～2万頭くらい出荷されています。ここで平成11年度から16年度くらいまで私たちが関わって、食品残渣を飼料にするプロジェクトを行いました。学校給食だとか高島屋だとか、まとまった量が出てくるものを餌にする技術の開発や検証、実験をやって、豚に食べさせて肉質の検査をしたりしました。横浜の農家は非常に優秀で技術力もとても高くて、どれくらい与えるとどういう結果になるというレシピを作って、今は「はまぼーく」というブランドになっています。私たちは「食品循環養豚」、農水省は「エコフィード」と言っていますがそのようなことをやっています。

最後の1つ、横浜には資源回収業者が150社くらい加盟している組合（横浜市資源リサイクル事業協同組合）があります。古紙やぼろ、鉄くず、非鉄くず、ガラスびん、ガラス屑など、扱い品目は多岐にわたる組合で、こういう組織は全国的に非常に珍しいです。組合のミッションとして循環型社会をデザインしていこうという趣旨で「リサイクルデザイン」という愛称をつけています。集団回収や分別収集への協力、リサイクルセンターの運営の受託など行政との関わりも深いのですが、設立当初から市民と一緒に活動するというスタンスで、キャラクターをつくったり、

市民や子ども向けの講座や環境教育に取り組んだり、色々な社会貢献事業をやっています。全国でもとても珍しいくず屋さんの集まりです。この写真は「リサイクルポート」という中央卸売市場の先の埠頭にある施設です。国が「リサイクルポート構想」というのを始めたのですが、それより先んじて「エコリサイクルポート構想」というのを独自に作って港湾局に働きかけをしたら、たまたま港湾局に運輸省から出向していた方がいて、とんとん拍子で話が進んでこの「山之内埠頭」を組合で借りることができました。この事業に関する調査や提案は私に関わったものですが、古紙を選別するための設備や輸出のためのスチックヤードを設置しています。また「りくみビジョン 2020」という社会貢献型の回収業界を作ろうと取り組んでいて、「リサイクルデザインタウン」という構想を掲げて色々な社会貢献活動を行っています。中でも「環境絵日記」の取り組みは、横浜の小学校の約 20%にあたる 2 万 3000 枚もの作品が集まります。とてもすごい数で、つい数日前が最終審査会で私は選考委員長しているのですが、環境教育には相当大きな役割を果たしている。このような活動をしている民間団体もあるということで、横浜は行政も一生懸命やっていますが、民間が色々なところで頑張っていて市民と一緒に協働してごみ問題に取り組んでいる、ということを紹介しました。

#### ④ 空き家活用はまちづくり 古居 みつ子/谷口 和豊

古居と申します。横浜プランナーズネットワークは自主事業として「空き家活用相談」に取り組んできました。谷口さんが窓口を一手に引き受けてくださり、この事例にはこの人の能力やネットワークが必要だと思うメンバーに谷口さんが声をかけながら、横プラが総体として取り組んできて今年で10年になりました。その相談内容から見えてきたことを、データをもとにプレゼンテーションさせていただきます。



「空き家活用相談」の実績は2015年までの8年間で約120件ですので、年間10数件程度ですが、実際に空き家の利活用が実現したのは6件、その他、横プラのメンバーが個人として関与した2件を入れても8件で、実現したものは非常に少ないです。空き家を活用したい人と、空き家を提供して地域貢献型の施設として使ってもらいたいという人をマッチングするのはとても難しいということがわかりいただければと思います。

その8件のうちの1件は私が関わったもので、3階建ての鉄筋コンクリート造の12室のワンルームマンションでした。オーナーの方が高齢化してきたので、新しい人は入れない状態で持っていました。そこで地域の社会福祉法人に声をかけて、結果的に障害者のグループホームとして活用していただくことができました。戸建て住宅だけではなくて、このような空きビル、空き店舗の活用も含めても8件の実績です。

用途地域別に空き家数の動向を試算したデータを見ると、戸建住宅や共同住宅、中には空き店舗もありますが、市内の空き家の2割強が第一種低層住居専用地域いわゆる「一低専」の住宅の空き家です。そもそも横浜市は住環境を保全していくという視点から、一低専内の住宅がとても多いのが特徴で、しかも一低専では折れ線グラフの勾配が急な右肩上がりとなっていて、増加傾向が大きいということがわかります。開発時に環境保全のためにとられた措置が、空き家が増えたときにどう影響していくのか、成熟した住宅地のまちづくりのあり方が、これから問われているのではないかと推測されます。

空き家を地域の資産として活用していくことが問われているのですが、都市計画上は用途地域が住宅専用と狭い範囲で決められているので、その転用にブレーキがかかって前に進まないこと

が結構あります。住宅需要はこれから減少していくのは明らかで、しかも空き家は一低専において右肩上がりが増えていく状況の中で、このような空き家をどのように使っていくのか、その住宅地をどういうまちにしていきたいのかが、空き家の利活用における課題だという意識で取り組んでいます。

では、具体的にどんな形のものが実現しているのか、先駆的な例を2つご紹介させていただきます。

まず、一低専の中の戸建住宅の取り組みです。これは横プラが関与したものではないのですが、戸建て住宅だからこそ、地域密着型でアットホームな小規模な事業を入れられたという例です。6人の高齢者向け介護保険事業のデイサービスと、定員6人の地域密着型の小規模な保育所で、本当に気軽に利用できるサービスになっています。高齢者向けのサービス事業と



子育て支援の事業とを一緒にすることで、自主事業として誰でも使えるサロンとして運営している複合型の取り組みで、幼児から高齢者までが利用できる地域の拠点として整備されたものです。

2つ目は、金沢区にある「ジュピの縁側」という施設です。駄菓子屋にみんなが使えるサロンを一緒にして空き家を利活用している事例で、これも平家の建物です。家賃を捻出するために1回300円の利用料がかかりますが、これには飲み物がついています。駄菓子屋が併設されているので、遊びに来る子どもたちとサロンに集まっている大人たちとで自然な形の交流が生まれます。そんな空き家の利活用を地域のグループが運営しています。

全国調査によると、持ち主が空き家をしているのは「特に困ってないから」という理由が圧倒的に多いです。全国の割合は24%ですけれども、神奈川県の場合は38.2%。いずれも筆頭の理由ではないのですが、市場には出回っていないですし、皆さんの噂になるようなことでもないで、空き家を見つけることはとても難しいです。

これまでの10年の実績で、相談から見えてきたことを整理して図にしました。活用できる空き家を見つけることも、そしてそれを活用する担い手を見つけることも非常に難しい、そしてマッチングも容易ではない。それからもう一つ、実際にそれが活用できる方向で検討が進んでも、既存の制度フレームが現状に合っていないのでハードルが高く、実現に結びつくのは容易ではないということです。

制度フレームの課題はハードの視点で捉えると3つあります。まずは耐震性、つまり建物が安全かどうかということ。2つ目は用途規制への適合性、冒頭に内海さんも話していたとおり、一低専でお店を作るには建築基準法48条の許可が必要で、やっとコンビニエンスストアの建設についての許可基準ができましたが、この用途規制のハードルはとても高いです。それから3つ目は用途変更によって固定資産税の評価が見直されることによって、持ち主の税金の負担がとて高くなる点です。一般的には6倍になると言われているのですが、そのハードルをどのように越えていくのか、これは活用する側の担い手の負担として、事業手法が問われる部分です。

空き家の利活用は「成熟社会におけるまちづくり」だと捉えています。このフォーラムの冒頭でも、それからこの全国まちづくり会議の基調講演の話の中でもありましたが、まちづくりの主体は地域の住民で、都市計画法3条の見直しも考えた方がいいのではないかというお話もありました。40年前、団地開発で整備されていた時代の住宅地の整備時の居住者のありようと、現在住まわれている居住者の構成は大きく変わってきています。もちろん少子高齢化や世帯規模の縮小ということもありますが、中高年齢者の昼間人口がとて増えていて地域の生活ニーズは大きく変わってきています。強い生活ニーズに応えるような形で住宅地を変えていくことが、当然、望まれています。

私たちはその推進のためのポイントとして「①『住み開き』『空き庭活用』も利活用の一つと捉える」「②地域の情報は地域が持っている＝自治組織や見守り団体等と緩かに連携する」「③担い手は人つながりで個別に働きかける＝この指止まれ方式、興味の持てる入り口準備」の3つを挙げます。特に2つ目の自治組織や見守り団体等と緩やかに連携をしながら空き家活用をしていくことが重要だと思います。

今、横プラは活動を神奈川県域に広めていまして、7つの地域で空き家の利活用の取組みを進めています。住宅地のエリアマネジメントを推進する取組みの1つとして3年間の事業で進めていまして、まずは県内の5か所でモデル事業に着手しています。

今後も皆様のご支援とご協力をいただきたいと思いますので、よろしく申し上げます。

## ⑤ 障害者とともに楽しむまちづくり 桜井 悦子

桜井と申します、よろしくお願ひいたします。私も横浜プランナーズネットワークのメンバーで、まちづくりを専門に20年くらい横浜で活動しています。今日テーマに掲げている「障害者と一緒を楽しむまちづくり」は、後で説明する「福祉のまちづくり重点推進地区事業」にコンサルティングの仕事で関わったのがきっかけで私が事務局をしている、「横浜ジェントルタウン倶楽部」という市民団体の活動のテーマの一つだと考えています。



テーマに掲げている障害者ですが、障害者手帳を持っている人だけで国民の6%になります。つまり、17人に1人が障害者なのですが、周りを見回してもそんなに頻繁に障害者には出会えない。そういう状況から見ても、障害者が社会の中に溶け込んでいると言うにはまだ程遠いと思います。ただ活動を始めた20年前から比べると、かなり障害のある方をまちで見かけるようになってきたので、その間の様々な取り組みの成果が表れてきているようにも思います。

障害者とともに生きる社会、ノーマライゼーションというのは世界的取り組みとして、最初はマイノリティの人たち自身が声を上げて権利を戦い取るようなところから始まり、そのような活動が効果を少しずつあげてきた流れがあります。自分たちの権利を強く訴えないと真剣に取り上げてもらえないというやむを得ない面もあるので、要望型の障害者団体というものもまだ多くありますが、最近は当事者である障害者自身が少し変わり始めていて、要望型ではなく一緒に考えていこうという人々が出てきているように思います。このように考え方が変わってきた背景には、法制度が充実し、バリアフリー化が進んできた流れがあります。

日本ではまず、地方自治体の要綱というかたちで福祉のまちづくりが始まり、1970年代から福祉のまちづくり条例をつくる動きが広まってきました。横浜でも条例を作ろうということで1996年に条例制定に向けた「福祉のまちづくり市民フォーラム」というものを開催しました。福祉のまちづくり条例は全国で多々ありますが、横浜での取り組みは多様な市民参加をきめ細かく実施しながら作ってきたのが特徴です。これは横浜市の調査季報からお借りしたワークショップの時の写真ですが、一つ一つのテーブルを囲む10数名には様々な障害のある人が一緒に入っています。耳が不自由な人、目が不自由な人、それから言語障害…。私もテーブルの進行役の一人とし



て参加したのですが、20年ぐらい前は身近に障害者があまりいなかったので、このように様々な障害を持った方たちが、一緒にワークショップをやり、コミュニケーションをとることができるということに、大きな衝撃を受けた記憶があります。障害がある人もこの様にすれば話ができるんだと気づかされた体験でした。

そこに集まった人たちの有志が「福祉のまちづくり市民フォーラムその後の集い」という長い名前の団体を作って、その後も自由に自分たちで集まって情報交換や福祉のまちづくりに関する活動の事例調査などの活動をつづけてきた、これは市が仕掛けた協働の取り組みがその後もつながった1つの事例です。

このようにしてできた横浜市福祉のまちづくり条例に「福祉のまちづくり重点推進地区事業」が位置づけられています。これも協働の取り組みの1つで、特定の地区で市民・行政・事業者の3者が一緒に協働して福祉のまちづくりを推進するというものです。実際に事業が行われたのは6地区だけなのですが、その中の「関内駅周辺福祉のまちづくり重点推進地区」は私が関わった地区で、その時活動に参加した人達の有志がその後の「横濱ジェントルタウン倶楽部」を立ち上げました。6地区のうちの「鶴見区寺尾地区」はここにいる山路さんが仕掛け人として関わっていた地区で、ここでも地域で「ふくまち」という活動がいまも続いています。これも行政が仕掛けた協働の仕組みの中で生まれた団体がその後も連携して活動を続けている例で、そういう活動を生み出してきた取り組みだったのだと思っています。

この関内駅周辺地区の事業期間は2011年度から2015年度までの5年間でした。この間、ハードについては皆の意見を反映して行政が歩道のバリアフリー化などに取り組んでいたのですが、それと並行してソフトの流れ、すなわちハードとソフトの一体の活動としての「調査・計画」や「協議会主体の活動」が行われ、次第にそれに影響されて「商店街・市民主体の活動」が出てきました。

関内駅周辺ですから、協議会には都心部の商店街や鉄道事業者、バス事業者、そして市民NPO、障害者団体、ボランティア、あるいはまちづくり専門家など本当に様々な人が参加して、まち歩きや商店街に障害者の絵を飾るアート展、ガイドマップづくりなど、色々な活動をしました。また、それを通して多様な主体の関わりもできてきました。協議会の委員長が都心部の活性化の事業等に色々関わっていた北澤先生だったこともあり、福祉のまちづくりといっても障害者が活動しやすいというだけでなく、まちの魅力を引き出して障害者を含めたみんなと一緒に楽しむという目標が掲げられたことが大きな特徴で、商店街等の事業者もそれに賛同して一緒に活動し、地区としてとても盛り上がった5年間でした。

「横濱ジェントルタウン倶楽部」はその協議会の5年間の活動が終わったあとに誕生しました。協議会のメンバーを受け継いで、多様な団体が集まるネットワーク型、協働型の団体というのが特徴で、魅力的なまちづくりを目標に掲げました。団体ができて最初に取り組んだのが「横浜市協働事業提案制度モデル事業」という、これも期間限定でその後は続かなかった仕組みなのですが、市民から提案を募集して採用されたものに予算をつけて、行政も一緒に取り組むという事業でした。その中で横濱ジェントルタウン倶楽部では「触る地図」というものを作りました。3カ年のモデル事業の最初の年にこの触る地図を作って、その後も触る地図から派生した様々な活動に取り組みました。

それまでも視覚障害者用の触る地図というものは、公園とかディズニーランドとかの観光施設では作成されていたのですが、非常に簡単なゾーニングだけが触ってわかるという程度のものでした。横濱ジェントルタウン倶楽部の触る地図は「共用マップ」というコンセプトで作っていて、見えない人のためには重要な情報



だけ浮き出し印刷をして触ってわかるようにする一方、細かい情報はカラー印刷を重ねて、見える人が見えない人に伝えることで、見えない人も豊かな情報を得ることができるというものになっています。見えない人のためだけのものではなくて、一般の人が見て便利な観光情報や車いすの人に便利な情報など、様々な視点からの情報を盛り込んでいます。今、手元に持ってこなかったのですが、会場のポスター展示ブースに置いてあるものが残っていれば、後で実際に手にとってご覧いただければと思います。

その協働事業で開発した触る地図はその後、口コミで色々なところに伝わって、横浜駅の乗換案内の触る地図や、羽田空港に国際ターミナルができたときに作った手を見るフロアマップなど、色々な企業や行政から注文がくるようになりました。ここですべては紹介できないのですが、現在に至るまで毎年1件は仕事が舞い込んできて、ジェントルタウン倶楽部の貴重な収入源にもなっています。

ここからはジェントルタウン倶楽部の全般的な活動を紹介します。これまで話した触る地図は1つの柱になっていますが、協働事業の時に版下を作った「心のバリアフリー」という絵本、これは困った人に出会ったら声をかけて手助けしましょうという内容のもので、このような精神について学校での出前教室や企業での研修などを行っています。これも事業の柱の1つとなってい

ます。

協議会時代から商店街がメンバーにいますので、商店街でのイベントも柱の1つです。それまで障害者と話をした事が無かった商店街の人たちが、最初は障害者とはどんな人だろうと思っていただけ、出会って話をしてみると「なんだ普通の人じゃないか」ということで意気投合をして、色々と話し込むうちに商店街で自分たちもお祭りに参加したいという話になって、車いす神輿が始まりました。また、商店街でのスタンプラリーも毎年行っています。なかなかお店に出かけられない障害者が、こうしたイベントを通して行きやすい自分のお気に入りのお店を見つけたり、お店の側の人も障害者への対応の仕方を学んだりしていく取り組みとなっています。それから「まち歩き」もあります。バリアフリー観光やバリアフリー散策と言っていますが、一緒に出掛けて横浜のまちの魅力を楽しみ、交流をする中で障害者との付き合い方を学ぶという事業です。

このような事業全体の中で私たちが重視をしているのは障害当事者の参画です。障害当事者でないと本当には分からないことはたくさんあり、バリアフリーや建築に関わっている方ならいろいろな基準をご存知でしょうし想像もできると思いますが、私自身も、いつも車いすの人と一緒に歩いているながら「あそこの建物の入口に段差はあったっけ？」と思いつけないこともあります。まちづくりをリードするのは当事者であるべきだし、当事者の意見を取り入れたものは、結果的に他の人にも役立つということだと思っています。そして、当事者が積極的にまちに出ていくこと、それによってごく自然に、みんな1人1人違うけれどもみんな普通の人なんだということがわかるので、色々なかたちで一緒に楽しむ機会をつくるのが大切なのだと思っています。

## ⑥ 小さな拠点づくり 鈴木 智香子

私は 2010 年より港北区の大倉山というところでコミュニティカフェを運営しています。もともと建築の設計をしていたので、カフェなど縁がなかったのですが、突然、話が降ってきて、それから 7 年間続けています。今回はカフェのような小さい拠点が、実際にどのように立ち上がって、どのように地域と繋がっているのかについて、大倉山という小さい地域の中での事例を紹介させていただきます。



この写真は私たちが発行をしている「みんながみえる通信」です。今回の表紙はカフェの前に週に 1 回野菜を売りに来る方と、その方をボランティアで支えている親子さん、その野菜を使って子ども食堂を運営している方です。

ここに来られている方の中には、大倉山と聞くと 30 年前に「小売商業等商店街近代化事業」という商店街の活性化のための国の制度を使って作られた、ギリシャ風の街並みを思い出す方もいると思います。渋谷と横浜を結ぶ東横線の沿線にある大倉山は、最初に内海さんから話があったように、核家族が多いマンション銀座、神奈川都民の街になります。ただ、私たちより少し上の世代だと専業主婦層も多く、その人たちは 20-30 年前から「生活クラブ運動」を作って地域に根差した活動をしていたり、またもう少し若い世代は「びーのびーの」のように、自分たちが必要なものは自分たちで作るという発想で子育て支援の広場を作ったりと、市民活動の地盤のようなものが元々あった土地でもあります。

この写真には「2010 年大倉山文化村」と書いてありますが、その頃に私たち 5 人の主婦が「大倉山で何かやってみたい」とサークル的な活動を立ち上げたものです。この地区には高学歴の主婦が結構多くて、そのような人たちは「家庭にいても何かやりたい」と、子育てだけではなくお小遣い程度を稼ぎながら、まちのためになる何かができたら面白いと考えていました。みんなで一緒にカフェをやってみたら？という話がきて、「やります、やります」と手を挙げて、結構すんなり実現しました。その時は家賃 14 万円を払っていくことがどういうことなのかをよく分かっていなくて、その先 3 年半は大変苦勞しました。そこではただのカフェではなく「コミュニティカフェ」として、先ほどお見せしたような地域情報誌を発行したり、同じような活動同士をつなぐ

活動をしたりしてきました。

そのようなカフェを常設で開いていると、日々、様々な「コト」が持ち込まれてきます。カフェを運営している私たちが「やりましょう」というものよりも、「こんなことやりたい」「あんなことやりたい」という人が次々と訪れてきて、「歌声サロン」や「英会話サロン」が始まりました。カフェを運営していると「鈴木さんはいろんな所に顔を出しているね」とよく言われます。また、「鈴木さんは何人いるんですか」と言われることもあります、カフェという場を作るといろいろな事が全方位につながっていきます。また、横浜市の例を出すと「子ども食堂」をすれば子ども青少年局とつながるし、「認知症カフェ」をすれば健康福祉局とつながります。そのようにして市民局や経済局や横浜市の人が次々とカフェにやってきます…別に私は呼んでないですけど（笑）。私たちは普通にカフェで地域と一緒に様々なことをやっているだけなのだけれど、行政の側は縦割りなのが、こうした側面からも垣間見えます。

これが先ほどの「みんながみえる通信」を開いたところに載せているマップですが、小地域に散らばる「小さな拠点」の事例ということで、地域の中でこんな活動をしている人や、こんな活動があるということを紹介しています。半径1kmぐらいの歩ける範囲で、私はいつも自転車に乗ってあっちこっちに行っているのですが、実はこういうマップがあるようではなかったそ



うで、手にした皆さんはとても喜んでくれます。他の地域でこのマップを見た方が「うちでもこういうマップが欲しい」と言ってくれたり、隣のまちでもこういうマップを作ろうという話も出ていたりします。このマップも実は、今は子育て中で家にいるデザイナーさんにプロボノ的に手伝ってもらっていて、ライターさんもそうで、そうしたママたちが専門性を生かして作っているのです。

先ほどのマップで具体的に紹介しているものを挙げると、最初は「どろっぷ」という横浜市で最初にできた「地域子育て支援拠点」で、先ほどお話しした「びーのびーの」さんが始めたものです。2番目は「大倉山おへそ」で、これは商店会と地域住民と一緒に拠点を作ろうと始めた場所で、横浜市の「市民まち普請事業」を使って整備しました。3番目は「かれん」という地域で障害のある方たちの居場所を作る活動で、30年前からずっと活動を続けていて、最近グループホームや学童なども運営しています。4番目は「菊名お出かけバス」で、先ほども横浜は山坂が

多い場所だという話がありましたが、そういう山坂で出かけづらい高齢者の方たちの移動支援をボランティアでしています。5番目の「みんなの食堂」は、ワンコインで食べられる夕飯をみんながボランティアで作って食べながら、同時に近くにある支援家庭の方たちの寄り添い型学習支援の場におむすびを届けるということをしています。また、「すきま食堂」というのは、中学生くらいの子供たちのお母さんたちが、塾の行き帰りに子供がご飯を食べられる場所が欲しいということで、お店の定休日に自分たちで食堂を開いています。

「縦割りを自由に横刺しする地域の活動」と書きましたが、私たちは「これはどこのセクターだから」ということは関係なく、自分たちの都合でいろいろな人がいろいろなことを一緒になってやっています。例えば「商店街を活性化したい」という人たちと「自分たちの居場所、自分たちが活動する場が欲しい」という子育てママがいて、それを掛け合わせて「大倉山おへそ」ができあがりしました。2番目は「環境」と書いていますが、3・11以降に立ち上がった「自然エネルギーによる市民共同発電所を作りたい」という人たちと、「子どもの居場所や高齢者の居場所が欲しい」という人たち、そして「自分の畑が荒れ放題になっているから何とかしたい」という地主さんの3者が掛け合わさって、「熊野の森もろおかスタイル」というエコステーションができました。こちらも先ほどの市民まち普請事業を使っています。先ほど紹介した「菊名お出かけバス」も、「高齢者をお出かけさせてあげたい」と思いながら、「お出かけする先も作りたい」「そう考えている人たちが集まる場も作りたい」ということで、お出かけバスの人たちとコミュニティカフェをやりたい人たちが一緒になって、多世代の交流拠点を立ち上げていく話し合いを進めています。ここでは、介護保険制度の新しい総合事業の「サービスB」を使っていこうと考えていて、地域包括支援センターや、社協、区役所の方たちとの連携にもつながっています。

元は小さい地域での活動ですが、それが発端で今はこちらの横浜プランナーズネットワークや横浜コミュニティカフェネットワークなどに参加しています。前者はご覧の通りですが、後者はカフェ型中間支援機能の創出・強化・普及という事業軸に3年前に立ち上げたNPOで、参加している人たちが新たなカフェの立ち上げの伴走支援をしたり、調査研究をしたり様々な事例を教えてくださいました。活動の拠点は大倉山という小さいエリアだったり、小さなカフェだったりするのですが、外とのつながりを持つことで「井の中の蛙」にならない機会に恵まれていると思います。

この写真は、「大倉山おへそ」でお母さんたちが「ああでもない、こうでもない」といって商店街と一緒に企画を練っている様子です。10月の終わりに商店街でハロウィンのイベントがあるのですが、その企画や運営を地域のお母さんたちが担っています。商店街の中を300組くらいの親

子が練り歩くのですが、場所や資金は商店街さんが出すというかたちで6年続いています。次の写真は古居さんから紹介があった「ボランティア基金 21」での活動ですが、地域にこういう場所があって、こういう人たちがいるという情報がつながることで、私自身が地域の中でとても動きやすくなりました。

まとめとして、最近、「施設間連携」という話が役所の人から聞こえてくるようになって、やっとこれでコミュニティカフェも公のつながりとして動きやすくなると思っていたのですが、市の方の話では、指定管理者同士は実は競合他社なので、お互いの情報があまり連携できていないという話を聞きました。公の人たちがそんなこと言わないで「わたし達も含めてちゃんと連携させてよ」と思うのですが…。私たちは日々、困っているおじいちゃんやおばあちゃんや、ご飯食べる場所がないとあちこち探して歩いているひとり暮らしの男性などを地域で直に見ているので、下から、草の根からの居場所づくりを行っていきたいと考えています。





### 3. 話題整理

～多彩な暮らしを背景として、全てはヨコツナガリで～

山路 清貴

パネルディスカッションの前に議論を整理する経験はあまりないのですが、今日は全国のいろいろな所から横浜という都市に来ていただいていますので、土地勘が無い方にも見取図になればくらいの気持ちでおります。フォーラムのタイトルに「クルーズ」とありますが、横浜は関内やみなとみらいといった表の顔だけではないということ、370万人が暮らしている



巨大都市は、より多くのテーマを処理しなければ成立しないということを申し上げます。その辺りを感じてもらえる話を、何の前説明もなく立て続けに行ってきました。ここでは、大きく3つの着眼点についてお話をしながら、議論のキーワードを提示します。

1つ目は光のあたる表の部分ばかりが横浜ではない、それを支えている地域がたくさんあって、初めて都市として成立しているということを理解して頂きたいということです。後ろ側から支えるとか、横から支えるとか、いろいろあると思います。先日、嶋田昌子さんという、「横浜シティガイド協会」を作られて「横浜文化賞」も受賞された横浜のまちづくりに欠かせない方と話をしていたら、「横浜の開国・開港時の関内の居留地部分には、横丁とか裏町というものが少ないよね」という話になりました。表のまちがずっと繋がっている雰囲気があって、それがまた地区毎に多様で面白いのも関内なのですが。今日は櫻井さんが関外地区を「裏横浜」と呼びました。もしかすると横浜の横丁や裏町というのは関外が担当していて、関外のサポートによって関内が活きているという捉え方もあると思いました。そのような支える関係によって、横浜というまちの奥行きがより深くなっているということを捉えて頂きたいと思います。

2つ目は、本日は6つのトークテーマがありましたが、どれにも行政施策的な言葉はあまり並んでいません。「裏横浜」にしても、「流域」にしても、「静脈」にしても、いくつかのテーマを横に串刺ししたようなイメージが湧くトークテーマです。つまり、横浜のまちづくりは行政的な縦割りの中でコトが進んでいるだけではない、ということを説明したいのです。そこに共通してあるキーワードは「市民力」です。市民が入り込んでいる様々なまちづくりの取り組みがそれぞれに幅を広げていって、ほかの活動と自然に繋がっていく。行政の各局・課という縦割り毎の役割の中だけでは収まらないような活動が、実は地域にはたくさんあって、そういうものが横浜のまちづくりを支えているということが伝われば、というのが2つ目の視点です。

3つ目は、かなりピンポイントに、住民の方が身近な生活圏で発想しているところに、ポンと

入り込んでいく取り組みを後半のトークテーマとしていくつか紹介しました。これはつまり、横浜の地域コミュニティをどう捉えていくかという話です。横浜には、最初に内海さんから紹介があったように、18の区があります。横浜の人口を区の数で割れば平均20万ほどという単位になり、これは地方に行ったらそれだけで中核的な都市になるようなスケールです。それは、とても「身近な地域社会」と言えるスケールではないのです。次にその中に連合町内会という単位が300ほど、各区で割り戻すと15ずつくらいあります。そして1連合町内会には、370万を300で割れば、1万数千人ずついるわけで、歩いて回るには、これでも広すぎるぐらいの単位になります。横浜の人たちは、その連合町内会の広がりが自分のまちだとは思っていない、連合町内会長の名前も顔も知らないということがよくあります。その下のスケールになると、単位の自治会・町内会というのが3,000近くあります。つまり一つ1,000人ちょっとくらいですので、歩き回れる広がり、自分が知っているあの丘からこの谷あい回りくらいの感じになってくるので、そこで初めて「自分のまちというのはここだよ」という感覚になってきます。ところが3,000もの数の地域を行政、横浜市だけに対応するというのはさすがに大変なのです。その場合に我々のような中間支援団体が色々な地域の中に入って行って対応しているということ、感覚として理解してもらえればと思います。つまり、横浜全体が1つのマニュアル、1つの制度だけで動いている訳ではないということもお伝えしたいと思います。

最後の3,000という数は、実は大澤さんが話していた谷戸の数と似た数です。横浜には元々、谷戸が3,000から4,000くらいあったのですが、造成でかなりなくなってしまったので今は3,000くらい。偶然なのでしょうが、その谷戸の数と地域の町内会の数というのはほぼ同じような数になる。もちろん単一のマンションにも自治会があったりしますから、



そのままイコールに移行している訳ではないのですが、横浜の場合には地形のまとまりが、身近な地域コミュニティのまとまりの背景の一つの要因になっているという仮説を示唆していると思います。

加えて、共通するキーワードとしてあったのは「浜っ子」という言葉です。江戸っ子は「三代住んでやっと江戸っ子」と呼ばれるらしいですが、浜っ子は「3日住めば浜っ子」だと言われています。そもそも浜っ子ってどのような気質を持った、どういう人たちのことを言うのだろうか、

というのはよく分かっていない。初代まで遡っても 150 年ですから、皆が紹介したような取り組みをずっと続けていく中で、どういう気質が蓄積されてきて、どういう人たちが今の横浜を作っているのかということ、もう一度考えるべき時代に来ている気がします。この時代の変わり目で、今日、我々が説明したような、ちょっと視点を変えてみた横浜でのまちづくりの方法が、次の時代においてはもう少し地域まちづくりの真ん中に出てくるかもしれないという期待や可能性を感じながら申しあげておきます。

## 4. パネルディスカッション

～横浜が目指してきたこと ちょっと失敗したことも含めて～

司会進行：山本 耕平

登壇者：内海 宏、櫻井 淳、大澤 浩一、古居 みつ子、谷口 和豊、

桜井 悦子、鈴木 智香子、山路 清貴

ファシリテーショングラフィック：奥村 玄

**【司会】（横プラ、山本さん）**

それでは、ここからは全体で進めさせていただきます。後ろで奥村理事長が腕を振るっていますが、いつもファシリテーショングラフィックの見本のよ  
うな仕事をしています。このと一く&ト  
ークはこれまで何回か行っていますが、いつも私が  
いい加減に進行をして、それを奥村さんがきっちり  
まとめるという進行でやっています(笑)



また今日は、この後ここで閉会式があるので「16:30までに絶対終われ」という話がありまし  
て、客席のみなさんも色々な話を伺っていて、ご質問もあろうかと思いますが、山路さんが個別  
の質問を受けると時間がかかるから質問は受けるなど言っているのです。

**【山路】（登壇者、横プラ）**

それは違うでしょ、私は会場から質問を受けると一般的に話がどんどん細かくなってしま  
うので、こちらから会場に投げかけよう。

**【司会】**

そうですね。それを今から言おうと思っていたのですが、想定ではこの会場だけではなくて  
全体で超満員の予定だったので、質問を受けていたら進めにくいなと思っていたのですが、結果  
的にそうでもなさそうなので、この議論に参加したいという人は挙手をして発言していただき  
たいと思います。前に座っている人と顔見知りの方もいると思いますので、こちらから指名をし  
たら逃げないと、一応そういうルールでやりたいと思います。

まずは山路さんのまとめというか問題提起を受けて、それぞれのテーマを横につなぐと、横浜  
の「市民力」という言葉があって、みなさんそれぞれの報告の中でそのような考え方を示してい  
ただきました。今回、私はごみの話をしましたけれど、自治会・町内会やコミュニティの関係と  
か公民協働のあり方論や指針策定などもやっております、これらを包括した話として「自治基  
本条例」の策定に4つ5つくらい関わってきました。地域に入り込んで…というのとはちょっと  
違う立場、違う立ち位置で仕事をしてきました。要するに、横浜以外での仕事の方が多かったので、横浜のことはあんまりよく知らないということでもあります。私自身のそのような経験から皆  
さんに聞きたいことですが、私は横浜の市民、コミュニティというのは非常に変わっているの  
ではないかなと感じているのですがいかがでしょうか。たぶん横浜の地域まちづくりは一般解では

ないような気がするのです。お隣の東京に行っても…隣は川崎か、川崎もちょっと違うし、ましてや 23 区に行くとは行政と市民、あるいは自治会・町内会との関係というのは全然違ってきます。70 年代にコミュニティ行政にスポットが当たり、コミュニティに関して色々な論争があり、色々な政策、取り組みがありました。先進都市として知られていたのは三鷹とか中野、武蔵野とか、西の方だと神戸とかで様々な取り組みがあったのですが、現在はずいぶん変わってしまって、あの時代は斬新だった政策や取り組みはほとんどみんな消えてなくなってしまうました。

その時代から各自治体それぞれ違う道を 30~40 年近く歩んできて、「市民力」や市民と行政の関係の違いが、まちづくりの多様性に現れているということを感じるのですが、その流れの非常に特徴的な 1 つが横浜なのではないかなという気がします。そのような意味で、皆さんが横浜で仕事をされてきた経緯の中で横浜の地域社会はどう変貌してきたのか、どういうことがその背景にあったのかというようなことについて、お話していただきたいと思うのですが、まずは櫻井さんどうでしょうか。

## よそ者を受け入れる

### 【櫻井-淳】（登壇者、横プラ）

私は市民力ということでは、元町と長く付き合い合ってきたのですが、元町の人自分たちのことを「町方、町方」と言うのです。町方という意味は、行政に対して商人（あきんど）がかなり自立的にやってきたことで、私は地方の色々な商店街とも付き合い合ってきましたが、元町というのは相当市民力があるというか知恵がある。カード事業だけで自分たちで年間 3 千万円も稼いでいるし、駐車事業でも稼いでいる。建物をセットバックしたのも自らの行動で、一般的に都市計画道路でセットバックするのは意味が違う、自らセットバックすることで道路を広げる、行政には頼らないという発想が彼らにはあった。開港時に外国人が来て、彼らと対等に付き合い合うことで自分たちの力を蓄えていった、という点では商店街のモデルというのは他にないと考えています。



彼らは「補助金は麻薬だ」とよく言っています。現実にはライフタウン事業は国・県・市のお金を 3/4 もらってやったのですが、あの当時は国も市もバブルだったからできたのであって

今は全くできない、でも彼らは今でもチャージングセールも含めて見事に自立的にやっている。そういう意味では市民力があるなと思う。

それから野毛で付き合い合った人たちもしたたかで、東横線廃止の時に東急からしっかりお金を確保して「野毛大道芸」というイベントを始めた。Fさんっていう元電通の餃子屋のオヤジですけども、こういう市民力の高い人がスキルを持ってポンポンとでてきて仕掛けていく、そういう力はあるなと思いました。

#### 【司会】

でもそれはよそ者…、「3日住んだらハマっ子」という言葉がありますけど、つまり面白いことやる人はみんな外から来た人がやっているのですか。

## 大人の関係

#### 【櫻井-淳】

やっぱりそれだけの許容力があるというか、いろいろなものを何でも受け入れてしまう。私の事務所はつい最近、ベイスターズのスクリーンのある飲み屋の2階に引っ越したので、そこのおばさんと今日話したのですけれど、ベイスターズ気質とタイガース気質というのが全然違って、色々な人が来てもベイスターズファンは受け入れてくれる、中日ファンも受け入れてくれる、「とても心優しいよ」と言っていました。

#### 【司会】

なるほど、タイガースファンじゃないと入れないという排除の論理はないわけですね。今の話に続けて大澤さんはいかがでしょう、横浜の市民力はどう培われてきたのか。横浜はかなり特殊解のような気がしているのですけれども、「よそ者を受け入れる気質」というのはいま出た1つの話だと思いますが。

#### 【大澤】（登壇者、横プラ）

私もよそ者なのでその辺りはよく分からないのですが、付き合いの長い鶴見の話をします。鶴見区は今年で90周年ですが3つの大きなイベントがずっと前から続いていて、丘の手の「三ツ池公園フェスティバル」と川の「鶴見川サマーフェスティバル」、それか





ら、海の方の「臨海フェスティバル」というものがあります。10年くらい前に区の予算がなくなったので1つにまとめようという話になって、アンケートをとったのですが1つにまとまらず、結果的に3つを各地域が主体となってずっと続けてきています。

それだけ区の中でも地域的なまとまりがあって、かといってその人たちが張り合っているかというところも無い。自分たちのまとまり、つまり地域のコミュニティを維持しつつも協力するところはしている関係が見えてきて、なかなか面白いと感じています。その中の地域をさらに見ていくと、生麦のような元漁村だった特徴のある場所はそこでまとまっていて、必ずしも横浜全体がそうとは言いきれませんが、地域的なまとまりがずっと維持されているところが面白いと思います。

#### 【司会】

ということは「横浜市民は大人」だと、大人の対応ができる人が多いということでしょうか。

#### 【大澤】

もうひとつ気になることは、地域のリーダーシップをとっている方がずっと継続していること、つまり高齢化して次への世代交代が進んでいない。我々のようにフィールドを持って活動している人たちはそろそろ体力に限界がきているので、どうやって世代交代をするかというのがこれからまちづくりの上でも大きな課題だと考えています。その時に同じ組織の中に新しい人を入れるのではなくて、そこが横浜市民的なのかもしれないですが、それぞれのテーマとか趣旨とかあるいはフィールドとかを「良い環境で維持しようね」というぐらいで共有ができれば、他の団体であっても次の人たちに受け渡していく。そういうおらかな感覚で世代交代をしていくというのが必要なのではないかと感じています。

## 反対運動は逃げずにとことん話し合う

#### 【司会】

ありがとうございました。横プラも世代交代が必要というような気がしますが(笑)

どなたかご存じでしたら教えていただきたいのですが、私はごみ処理施設の反対運動・合意形成の仕事に関わってきて、しっかり話をすればどこかで合意形成できるという信念で今までやってきているのですが、当然ながら相当変な方が出てくることもある。

一例を挙げると長野県に、これはオフレコですけど(笑)、Tさんという知事「やっしー」と呼

ばれた方がいたのですが、この人が前の知事の時代に決まっていた埋立最終処分場の建設の話を白紙に戻したのです。車座会議のようなことをして、一部の市民から反対をされた、「それはもっともだ、それではもう一度考え直す」ということで、これまで時間をかけて色々やってきたことを全部白紙に戻してしまって、そこからまたもう一度検討し直すということになりました。

これはこれでよかったのですが、私はそこから事務局として関わったのです。それからも様々な手続きをして、例えばすべての会議を公開するとか、資料も全部オープンにするとか、ケーブルテレビで流すとかをしてきました。それから、原科先生というアセスメントの日本で権威のある先生を座長にして、その下で膨大な作業をしました。ある程度までまとめたので、知事のところへ持って行って「どうでしょう」と意見を聞くと、当然その中でまた反対の人がいるから、また手直しをして知事のところに話を持っていく訳です。話が元に戻るばかりでなかなか決断していただけない。政治的なことが背景にあったのかもしれませんが、どこかでトップが決断しないと物事は進捗しない。



何が言いたいのかというと、横浜でも同じようなことがあるのだろうか、それともこれは田舎だけの話なのかということ。絶対反対だったらどんなことをやってでも結論を覆そうという非常に粘り強い運動をする、こういう出来事はこれまで横浜でもあったのでしょうか。今議論している市民力というのは割と前向きなことを創り上げる話なので、私が提起しているのは市民力とは対極の話なのかも知れませんが、こういう意見が割れる問題に対する行政のスタンスとして、トップがどこを見るかということも非常に重要ではないかということです。つまり、市民力を非常に前向きに捉えるのであれば、市民の自治の範囲である程度のところまでは解決できるだろう、きちんと手順を踏んできたのだったら、それは尊重するのが行政だというのは普通の首長さんの考え方だと思う。だけれども、そうでない人がいた時に声が大きいところにすり寄っていく、非常にポピュリズムな判断してしまうのは市民の力をあまり信用していないということと関係しているような気がしています。私はこのようなことを過去に何ヶ所かで経験してきたのですが、私の知っている範囲では横浜にはそのような問題はあまり聞こえてこない。こういう話については実際どうなのでしょう、内海さんいかがですか。

## 【内海】（登壇者、横プラ）

先ほどの山本さんのパワーポイントにも栄工場を廃止する話がありましたが、私も栄区の先頭になって動いていた人を知っていたので、やり取りにかなり時間をかけたと思います。それから、南部斎場の計画の時に大揉めにもめて、結局あれは予定地の下にある自治会との対立構造が訴訟にまで発展しました。



私はそのあと北部にもうひとつ斎場をつくることに関わる仕事をしていました。行政主導で進めるとなかなか上手くいかないとの考え方で、7年間くらいかけて丁寧に候補地を絞り込んだ。挙げた候補地でも斎場をつくることとまちづくりをセットにして、どうすれば斎場を受け入れてもらえるかという検討をたくさんしました。結局、作るまでに8年間くらいかけて、最後は市長も参加する委員会でオーソライズしましたが、こういう話は選定するときに逃げ回って仕方なくやるという形だと絶対にうまくいかない。作るときはこういう斎場を作るのでこういう要件を満たしたところを選定しました、というのをきちんと住民とやり取りするプロセスがとても重要だと思います。

それから、先ほど山本さんが話した神明台処分場の暫定利用、あれも緑園都市の自治会が訴訟を起こしました。暫定利用を検討する委員会をつくる時に当事者の声も聞く必要があるということで、訴訟中の緑園都市連合からも代表が選ばれて、訴訟の先頭に立っている弁護士の方が委員になった。委員会は既に利用できる状態になっているところをどう暫定利用するのがよいかということを検討するのが目的で、発言を制限することはしないので、自分の持論だけで独占するような発言はできるだけ控えてほしいということにしました。あくまでも話し合いをすることが前提なので、他の方の委員にも発言の自由があることも考えて進めてくださいとしっかり伝えて、とにかく話し合うしかないという場をつくった覚えがあります。あとは墓地の問題もありますけれど…。

## 【司会】

ありがとうございました。要するに良いことばかりではなくて迷惑施設のようなマイナスの話もあって、今の話で例えると保育園や公園を作るのにも反対が起きるような状況のときに、それを市民の力でどう解決できるのかということが、私は市民力だと思うのです。よいもの作るのだ

ったらみんな「そうだそうだ」と言って参加してくれるのは間違いないのですが、それには様々な弊害もあって当然反対の人もいる訳です。

まち普請事業とか地域みどりのまちづくりでも「俺は知らない」と言われて、それでも周りの合意を取ってこいという話が昨日もありました。周りの合意を取るのが結構大変で、カサコの話では隣に住んでいる人が階段を歩く音がただけでも「うるせえ」というような強面の人で大変だったという話もありました。このようなことも含めて市民力というものがあるって、横浜がどうなのかをお聞きしたいのですが、このようなことに関して谷口さんは経験上何かないでしょうか。「横浜の市民力というものは何なのか」ということや、「横浜の市民力はどう培われたのか」ということについて聞かせてください。

#### 【谷口】（登壇者、横プラ）

少し話がずれるかもしれませんが、横浜の市民力がすごいのは量的活動が多く色々なことを活発にやっているからだということですが、以前まとめた私の感想を言うと、行政の特殊であることへのこだわりのような、自治体のみなさんは「我がまちは」とか「我が都市は」と考えられるのですが、横浜は東京というかなり先進的な一番先頭を走っている都市に近かった



こともあって、いかにして独自の特徴を出すかといったことにかかなりこだわってきた感じがします。その中で市民力を引き出すような工夫もいくつもありましたし、自治体、行政としても、市民よりのかなり特徴のある施策をとってきたとこともあると思います。

#### 【司会】

なるほど、東京とは違うことをやろうという、官民挙げてそうしようという文化。そこがユニークな活動につながっているというコメントですね。古居さんはどうですか、以前務めていた名古屋と比べてみて。

#### 【古居】（登壇者、横プラ）

空き家活用で、一低専で地域のサロンのような活動をしようとする、周りがそれこそ迷惑施設のような感覚で受け止めて、反対の動きがあったという事例を谷口さんから聞いたことがあります。その地域の人たちが結構市民力があるなと思ったのは、反対している側も当然圧力として動いた

のですが、運営する側がどうしてもここでこういう活動に取り組みたいということ、熱心にそれなりのアクションを起こしながら説得させるような活動をしてきた。その結果、今もサロンとしての利活用が進んでいるという事例があります。横浜にはこのような活動を受け入れる土壌があると思えました。そういう意味での社会性を持った市民力を持った方が多いのではないかなという気がしました。



#### 【司会】

それがなぜ多いのかということを知りたいのですが。

#### 【古居】

多いと感じたのは、名古屋と比べると変な意味でのしがらみがないという気がしました。ただ、古い地盤の地権者の方が多く住んでいるところと、新興住宅地で開発されたところで住んでいる方と比較すると、市民力はずいぶん違うと思います。

#### 【司会】

名古屋を比べると、元愛知県職員がそういっているのですから、しがらみがないのかも知れませんね。ありがとうございます。悦子さんもいかがでしょうか。

## 行政が面倒をみてくれないので自分たちで解決する

#### 【桜井-悦】（登壇者、横プラ）

なぜということをお答えするのは難しいですけども、1つには横浜は大都市過ぎるといえるか、地域と密着したきめ細かい行政サービスが行き届かなかったため、市民として自分たちが困ったことは自分たちで解決する力を出さざるを得なかったということはあると思います。よく取り上げられるのがドリームハイツのような郊外の大規模団地で、行政サービス



から遠い場所で周りに保育園もないなら自分たちで保育園を作ってしまうとか、必要なニーズに

応じて次々と様々な活動を生み出されてきたこともあります。他の都市を知っている訳ではないのですけれども、比較的小さい小都市だと地域の需要に応じて行政サービスをきめ細かくできるのに対して、横浜はそこが違うのかなと思います。

#### 【司会】

なるほど、それは最も重要なことかもしれないですね。横浜市はあまり住民の面倒をみないから市民の自助力がついたということですね(笑) 鈴木さんも何かございますか。今までの話に引っ張られずに好きにお話してください。

### よそ者を支援する、よそ者が支えている

#### 【鈴木】(登壇者、横プラ)

私はよそ者で、港北区に引っ越してきたのは20年前ですが、その間も途中5年ほど転勤で北海道に行っていたりして、ずっと居るのはここ10年くらいです。地元で昔から活動している人たちがいまだに脈々として、横浜新貨物線反対運動とかいうものを未だに総括していたりしています。先ほど話のあった港北区で「地域のチカラ応援事業」の報告会などに



行くと活動している方たちと繋がる機会があって、昔はこんなことがあったんだよといった話を聞いたりする。逆にそういう方たちが私たちのような新参者の活動を応援してくれたりするところ面白いと私は思っています。

#### 【司会】

これも面白い発見ですね、要するに古い活動家がいる。横浜は臨海工業地帯なので、労働組合の経験者の方は地域にたくさんいて、声の大きい人は組合の幹部だった人といった話はよく聞く話ですね。なるほど、横浜にもそういう方がいて、そういう方が実はよそ者の活動を支援しているという、だんだん面白いことがわかってきました。

ちなみに私もよそ者ですけれども、どこからどこまでがよそ者で、内海さんは土地の人ですけれども、横浜によそ者ではない人はいるのでしょうか、横浜で生まれて育ったということでしょうか。よそ者というのはどういう感じで使っていますか、鈴木さん。

**【鈴木】**

地元の方とは、地主のおばあちゃんとか、でもそういう人はすごい少数です。

**【司会】**

要するに横浜で生まれて育ったということですね。ではどれぐらい住んでいれば、おばあちゃんの代ということは、3代ぐらい住めばということでしょうか。京都なんか100年住んでもよそ者ですからね。

**【鈴木】**

おばあちゃんぐらいから住んでいたら、もう地の人かなっていう。

**【司会】**

やはり3代くらい、江戸っ子と同じですね。3代といふとなかなか難しいですが、その定義を外して、自分がよそ者だという人は手を挙げてもらえますか。みんな地元の人でしょうか、よそ者だと思う人は。ほとんどの方がよそ者ですね。つまり横浜はよそ者で構成されている(笑)というのは正しいということで、20年くらい住んでいてもよそ者だという認識でしょうか。ところで古い地主さんはどうですか。

**【内海】**

私の家は鎌倉時代かららしいのですけれども(笑)、僕はあまり関係ないと思っているけれども、町内会長は元々の地の人でないとなれないというのは、なんとなくみんな感じているようなことはありますね、俣野だからということはあるんですが(笑)。だけれども、自治会運営だとか、神社の世話人などはよそ者だらけです。逆に言うと、よそから来た人でも頑張ってくれる人がいれば、どんどん世話人にもなってもらうし、あまりよそ者だからという意識はない。

**【司会】**

当然ですね、370万人もいるのですから、ほとんどよそ者ですね。

**【内海】**

圧倒的によそ者ばかり、もともとの地元民はある意味少数民族ですね(笑)

**【司会】**

少数民族、インディアンですね。

## トライ＆エラーの積み重ねが市民力を育ててきた

### 【内海】

インディアンです。だから、よそ者と地元民という関係はあまりないと思いますが、横浜の市民力とか地域力がついてきたのは幾つかのステップの積み重ねだと思っています。昔は地区センターを1つ作るのにも地元出身の連長さんが入った建設委員会を作って、施設を作った後の維持管理も運営委員会にそのまま移行していた。ちょうど平成に入る頃までは自治会や連合町内会の力を借りないと市政の様々な事が回らなかった。学校建設や道路建設をするのにも、地元の説明会をする前に事前に連長さんに根回しのようなことをしていた。行政は短期間に様々な公共施設の建設をしなければならなかったの、結局は行政だけではできなかった。これは私の仮説ですけど、連合組織を非常に重宝するのは短期間の都市化による頼りの構造という点が非常に大きかったと思います。

昭和年代はそれがずっと続いていて、平成3年から5年くらいにコミュニティ行政研究会が、今の地域のコミュニティの力がどうなっているのかをモデル的に6か所ぐらいで調べてみて分かったのは、もう地域の力だけではなくて、テーマ型で活動する人たちが増えているということでした。あるいは平成に入ったあたりから、地区センターも利用者として



の観点で意見を言う場が全然ないという声次第に大きくなって、横浜は平成5年で初めてパートナーシップ推進という概念が出てきた。地域コミュニティとテーマコミュニティが協働をしないといいまちは作れないという意識が広がってきた。

平成8年からパートナーシップ推進モデル事業ができたのが次の時代で、それまでこども文庫の活動だとか、お母さん方のPTAの中でも仲間活動するNPO活動の萌芽のようなものが出始めていた。その人たちが地区センターのような施設を作る場に出した意見が反映されないということが明らかになった。それはあまりに一方的すぎるという話になって、そのような人たちも入れた形で議論をすべきだということで、仕組みを少しずつ変えてきた。そのような経緯の中でNPO的な市民力も少しずつついてきたのではないかと思います。

### 【司会】

パートナーシップ推進、世の中に「協働」というような言葉で色々な動きが出てきた。横浜は



多くのモデル事業をやってきて、そのトライ&エラーでやってきたことの積み重ねが市民力を育ててきた背景にあるのではないかという仮説ですね。今のようなお話に対して一言ご意見のある方はいますでしょうか？横浜の市民力といえば…杉浦さん、ひとことお願いします。横浜の市民力はいかにして培われたかという点で話を聞かせてください。

## すでに若い担い手たちが色々なことをやっている

【杉浦さん】（観客、横浜コミュニティデザイン・ラボ）

はい、ありがとうございます。横浜コミュニティデザイン・ラボというNPOの代表をしております杉浦と申します。僕が始めたのは、2002年にワールドポーターズにNPOスクエアという施設ができた時でした。まだ、高秀市長の最後の頃だったのですが、その年に中田市長に代わって、そこから何だかんだ15年もやっているなあという感じです。



さて、どうなのでしょう。先ほど別のセッションでも都市デザインのレジェンドと呼ばれるような方々が出ていましたが、ここにいる横プラの皆さんも本当にここ10年・20年・30年くらい、現場を引き受けてやってこられた、その話はとても面白いなと思いました。

しかしここ数年、担い手がだいぶ変わってきているのを感じています。僕たちは2010年に関内に今の泰生ビルというところを借りて、翌年からコワーキング・スペースを運営しています。そういうところに集まる人、また関内の周辺を見ているだけでも、今30代くらいの新たなプレイヤーの人たちが見受けられます。あとはIT・ICTといった、いわゆるインターネットとかに長けて、かつ横浜にプライドや想いがあるという人たちが今までの流れや系譜とは全然違うところですごく頑張っています。

今は、そういう色々な文脈を持った人たちと、地域の人たちとの信頼関係、Know Whoのようなものを持っている人たちとが繋がって、それこそ新しい市民力を発揮できるような場や仕組みが作れたらいいなあと思っています。

【司会】

はい、ありがとうございます。別の方から担い手がいないのではないかという発言がありましたけれど、あなた達の知らないところで、すでに若い人たちが色々なことをやっているのだとい

う話で、山路さんがマイクを持ちましたので、ではお願いします。

## 殿様がいないまち

### 【山路】

自分の話じゃないのですが、先ほど言ったように先日、嶋田さんと掛け合い漫才をしたときに、横浜市民意識のルーツのような面白い話を彼女から聞いたので、簡単に申し上げます。横浜というまちは殿様がいないまちだということで、全国 47 都道府県のうち城下町ではない県庁所在地というのはそれほどなくて、40 近くはみな城下町なのに対して、横浜は開港都市を中心として、つまり封建的な関係がないところに突然まちが出来た。それから全国から山師のような人も含めて色々な人が集まってきてできたまちなので、割とみんなイーブンというか、そういう文化が作られたのではないかという話です。

そこで一番力を発揮したのが、さきほど櫻井さんが言った商人たちなのですが、商人の動きもよく見ると、旦那が偉かった人もいるけども実は奥さんが偉かった。横浜の特徴というのは割と古い時代から女性で作ってきた価値観だと、福祉の問題とか教育の問題とか、全てやってきたのは商人の奥さんたちだったという話です。

ここからが私と彼女の違いで、だから横浜の人たちは女性に感謝をしなくてはいけないのだというのが彼女の主張で、いやそれを許した男性が優しかったのではないですかというのが私の主張でかみ合わなかったのですけれども(笑)。

そういう女性が活躍できる都市、あるいはそういう価値観が今もある都市というのが、ここいるFさんもそうかも知れないのですが、ある時代を超えてルーツとして、専門を含めて女性で作ってきた価値観のようなものが、割とフラットな関係の中で作られたのではないかなというのがその時の話でした。

## レジェンドが隠れてしまうほどの市民力

### 【司会】

なるほど、もっと続けたいのですが、16:30からは閉会式があるということなので、もう10分も時間がないのですが、何かもう1人くらい、どなたかいらっしゃいますか？レジェンドの伊達さん、登壇者から指名されたら断つたらいけないという冒頭にルールを決めまして、すみませんがお願いします。

### 【伊達】（観客、都市プランナー）

すみません、聞いていなかったもので(笑)。単なる市民の伊達と申します。本当に単なる市民になってみて今日の話を知っているのですが、まちづくりのサプライヤーであり、調整役であり、説得役でもあった仕事をしてきた自分ですが、単なる市民になってみると一度もそういう場面に出会わないのです。誰かに説得されることもないし、まちづくりの現場に出会うこともないし、調整するために横プラの人が私のところにやってくるような事件もない。つまり、まちづくりというものは一体どこでやっているのかという感覚を単なる市民になってみるととても思います。



ついでに横プラの人にはお世話になったのでここでお礼を言っておきますが、一介の市民として都市計画に文句をつけられるというので、都市計画審議会の市民委員に2年間、自分から手を挙げてなったことがありました。これはたぶん都市計画審議会としては大迷惑だったと思います(笑)。議事録を読んでも、全体のうちの半分以上を私が発言しているというようなもので、それを2年間やりましたが何の成果もありませんでした。

ということで、一市民としてはまちづくりというものは一体何の役に立っているのか、皆さんがやってくれているから市民力が無い一市民でもこうやって生きていけるのだろうと、感謝をしています。ありがとうございました。

### 【司会】

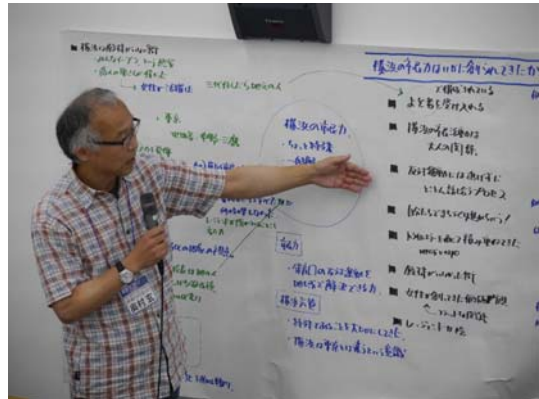
はい、どうもありがとうございました。伊達さんのようなレジェンドが隠れていることが市民力かもしれないという感じもしますけれども。もう時間がないのですが、もしひと言、喋りたいという方がいましたら、それで終わりますが、登壇されている方でいかがですか？それでは、奥村さんにこれまでの話を整理していただきます。奥村さん、5分以内でお願いします。

## 横浜の市民はいかにして創られてきたか

### 【奥村】

はい、皆さんからいただいた、たくさんの例を右側に書いてあります。それから左側は概念的なお話が出たことについて書いてあります。「横浜の市民力はいかに作られてきたか」というのを

bn 煎じ詰めて、いくつかのセンテンスにまとめると  
8つぐらい出ました。1つ目は「よそ者を受け入れる」あるいは「よそ者で構成されている」、それが横浜の市民力につながっている。2つ目は「横浜の市民活動は大人の関係」である、それぞれの市民団体はまとまりがあるがお互いに縄張り争いが無い。3つ目は「反対運動には逃げずにとことん話し合う」プロセスを重視してきた、これは主に行政がと主語をつけたら良いのでしょうか。4つ目は前と逆の話になりますが、行政があまりかまってくれないので「市民が自分たちでまちづくりを進めてきた」。



#### 【司会】

「行政があまりかまってくれない」という前提をしっかりと書いておかないと。

#### 【奥村さん】

そうですね、これが重要ですね。それから5つ目、担い手やプレイヤーが次々と交代しながらも、「柔軟にトライ&エラーを通じて色んなノウハウを積み重ねてきた」ということ、これが地域住民やNPOが力を発揮するような仕組みに今繋がっているということ。これは今、「協働」と言われていることの真骨頂だと思います。6つ目は歴史的に見てみると「殿様がいなかったまち」、これは「みんながイーブン」な関係というキーワードも出されました。7番目は「女性で作ってきた価値観を非常に大切にする」、すなわち男性も女性もイーブンな関係、これが創造的な価値観を創り上げてきたということ。最後の8番目は山本さんから「レジェンドが隠れてしまうほどの市民力がある」(笑)というようなお話もいただきました。拙いまとめですが以上です。

## 横プラに課せられた課題

#### 【司会】

どうもありがとうございました。全体をまとめていただいたので、もう時間がなくなっていました(笑)。横プラメンバーの皆さんは地域で色々な仕事をしてきて、その経験を持っているのですが、私さっき杉浦さんに発言していただいて良かったなと思うのですが、「若い人もたくさんいる」ということ、若い人というか別のスキルをもっている人がいろいろな活動をしているということ。我々はそれを知らないけど、情報のネットワークが発達しているのです。すでに新たな交

流というかネットワークが動いている。そういう意味ではオールド世代も情報のネットワークの中に入って、「せめて Facebook くらいやれよ」という話ですね。仲間が何やっているか全然わからなかったらダメだろうという、そういう話かもしれないと。我々年寄りには飲まないと話ができないというのが多いですけど、そういった色々な情報通信を使いこなして別に集まらなくても飲まなくても話ができるといった新しい世代の人たちがいる。かつて自治会・町内会の活動にNPOが関わっていったという地域社会の担い手の話がありますが、さらにその次の世代の新しい担い手の人たちが登場してきているので、この新たな市民力の担い手とどのように関わっていくか、付き合っていくかっていうこと、これが我々に課せられた課題なのではないかと思います。

それではこれで、横プラのプログラムは終了させていただきます。皆様、どうもありがとうございました。






## 5. 資料編

～当日配付資料～

**全国まちづくり会議2017in横浜**

# 横浜が先陣を切った、 手本のないまちづくり


はじめに 横浜のまち・まちづくり特性  
例1; 調整区域の資源活用まちづくり  
例2; 戸建住宅地の環境保全まちづくり  
例3; 地域力・市民力発揮のまちづくり




NPO法人横浜プランナーズネットワーク 内海 宏  
2017.10.8

## はじめに 横浜のまち・まちづくり特性


① 起伏のあるまち  
～高齢化で不便になる移動  
2つの国からなるまち  
～武蔵国と相模国



◆時代の地域環境の構成 (断面模式)



◆現在の地域環境の構成 (断面模式)



海抜(m)  
高: 158.5m  
低: -11.0m

0 1 2 4km

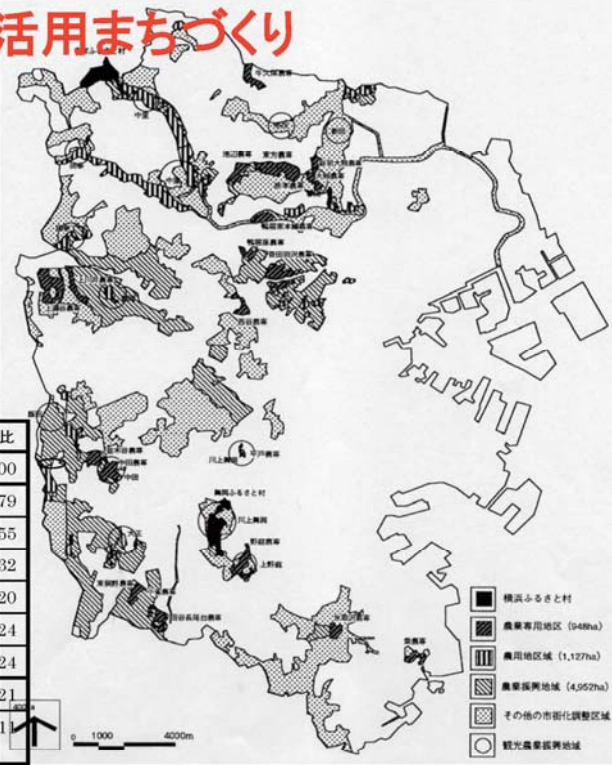




# 例1; 調整区域の資源活用まちづくり

## 調整区域は市域の1/4

- ・農業専用地区(港北NTで創設、市独自)
  - ・農用地区域
  - ・農振白地(農振内農用地外)
  - ・調整白地(農振外)
- に分けられるが、調整白地にも優良集団農地がある。市街化区域内にも、生産緑地、その他の農地がある



区域区別農地面積 (平成21年1月1日現在、単位: ha,%)

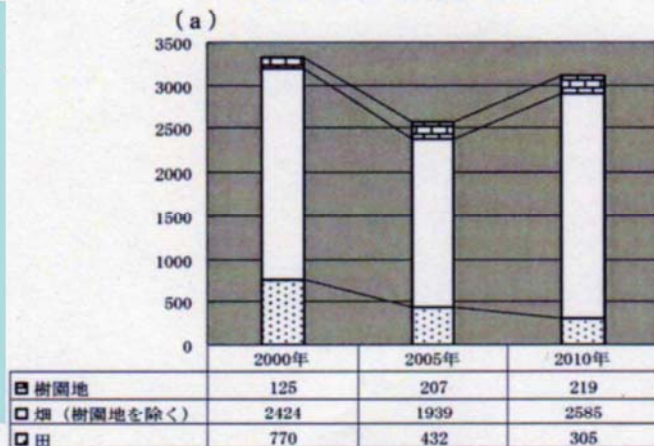
区域区分	区域面積	農地面積	市域構成比
市域全域	43,580	3,192	100
市街化調整区域	10,480	2,536	79
うち農業振興地域	4,915	1,774	55
農用地区域	1,045	1,021	32
農業専用地区	1,033	633	20
農振白地	3,870	753	24
調整白地	5,565	762	24
市街化区域	33,100	656	21
うち生産緑地地区	340	338	1

(注1) 農地面積及び生産緑地地区(固定資産概要調査等で集計)  
 (注2) 農振関係平成22年3月31日現在、都市計画区分同22年4月1日現在

## ① 農家の高齢化と耕作放棄地の増加

- ・60歳以上の農業就業者は、35年前の30%から徐々に高齢化し、2010年には61%になり、後継者難、担い手不足が深刻化。
- ・こうした後継者難や担い手不足を反映し、耕作放棄地が増加に転じ、今後も増加は避けられない見通し。
- ・社会福祉団体・地域団体・NPO法人等による農活動で、空き地・耕作放棄地の利活用が進展。

耕作放棄地面積の推移



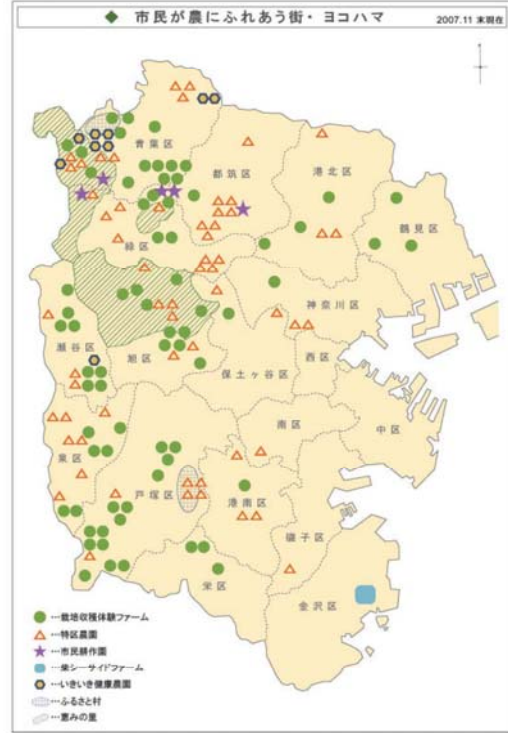
年齢別の農業就業人口比率

西暦年	1975	1980	1985	1990	1995	2000	2005	2010
農業就業人口(人)	17,130	15,472	13,710	9,834	8,023	7,502	6,577	5,416
15-29歳	11%	9%	7%	8%	7%	6%	6%	4%
30-49歳	37%	31%	26%	26%	23%	23%	21%	18%
50-59歳	22%	25%	26%	23%	19%	16%	17%	17%
60歳以上	30%	35%	41%	43%	51%	55%	56%	61%

■約1,000か所を越す農産物直売所  
(市場出荷は約48%、直売は約40%)



■市民利用型農園(約220か所、約30ha、約5700区画。栽培収穫体験ファームと特区農園)



② 典型的な取組事例

■ 荒井沢緑栄塾楽農とんぼの会

～栄区、休耕農地を開墾、週末営農。平成8年結成

- 活動日は主に日曜日
- 皆で一緒に開墾・農作・収穫など
- 障害児・こども会・大学生も農作業体験
- 地域ケアプラザや地区センターで  
そば打ち・うどん打ちなど
- 市や区の行事に参加、他団体との交流
- 会内外での講演や実習

- イベント 年10数回
- 畑は約 2,500㎡(5軒の農家の農地)



## ■ 男性高齢者の見守りをねらった野外サロン(南区六ッ川連合)

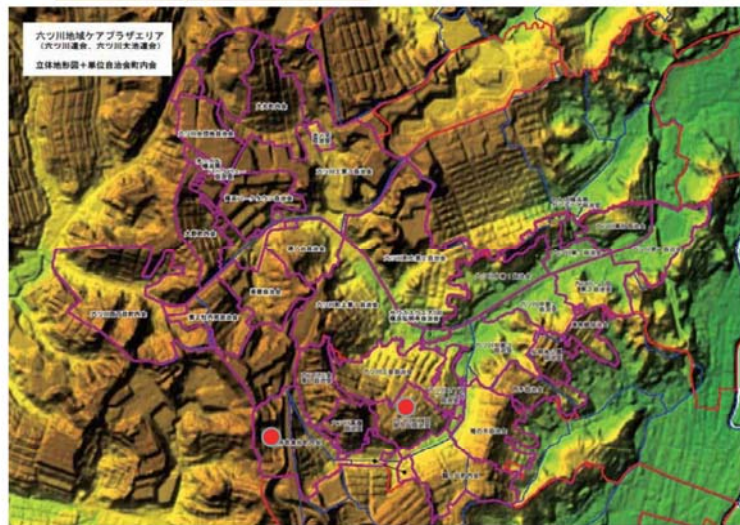


### 《地域の概況》

○5,300戸の連合自治会で、起伏の激しい戸建住宅地に高齢者、子育て層が混住

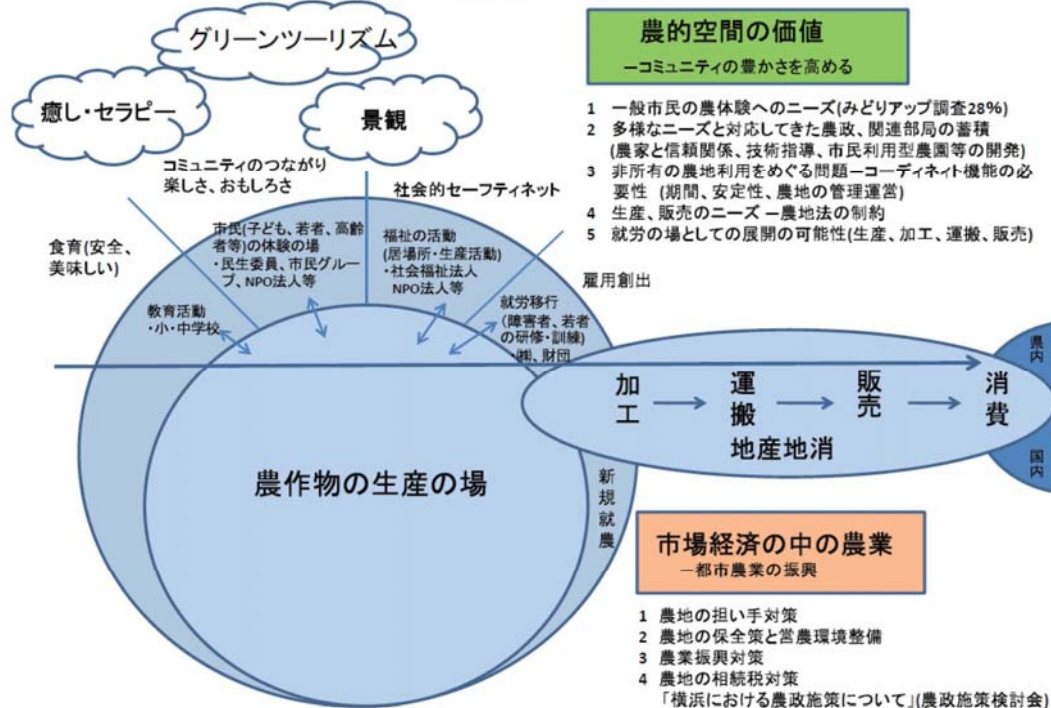
○東は京急弘明寺駅から西は横浜横須賀道路・別所インターまで、平戸桜木道路を中心とする地域

○高齢化率約25%(約2,700人)の一方、6~18歳の学齢人口も約7,500人)



## ③ 市民団体等が農に取り組む意義やねらい

「農的空間と市民の暮らし」-まとめにに向けて



## ■ コミュニティ経済の実施

### ■ 農業に関わる所得等の現状

〈農業所得〉10aあたり

・トマト・きゅうり等果菜類	約74万円	・野菜直売	約74万円
・小松菜・ほうれん草葉物	約86万円	・なし直売	約36万円
・施設野菜	約130万円	・市民農園	約75万円

〈資産運用〉10aあたり

・アパート経営	約1100万円	・資材置場	約400～800万円
・コンテナボックス	約1400万円		

### ■ 市民農園等の事業スキーム

- ・栽培収穫体験ファーム、特区農園(単価は700～1500円/㎡)
- ・マイファーム(株) レンタルファーム(単価は3000～6000円/㎡)
- ・アグリメディア(株) シェア畑(単価は7000～8500円/㎡)
- ・(NPO)市民農園を拓げる会(特定農地貸付法による市民農園と農業経営基盤強化促進法、90㎡で約15000円なので、170円/㎡)
- ・メサ・グランデ(野菜直売・食事・ミニライブ等の食を通じた出会いの場、ワンデイシェフ・コミュニティカフェ講座・CB相談・コンサルティング)  
※センター南駅近くの「みんなのキッチン」

### ■ 民間企業の農園事業への参入

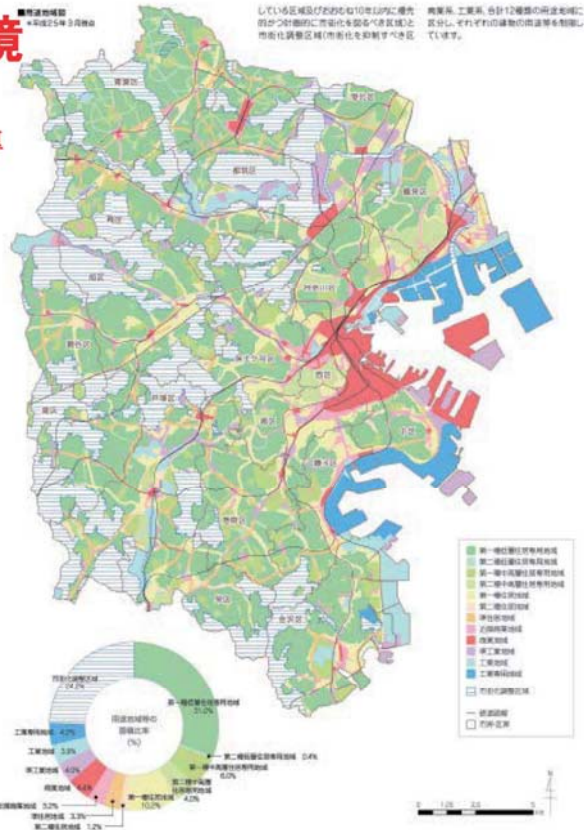
- ・イオンアグリ創造(株)～北関東の耕作放棄地中心に7か所の農場運営(30億円を実現)
- ・吉野家ファーム神奈川(株)～鉄地区の農業者と一緒に農業生産法人を設立し、地域農業の活性化、地産地消、社員研修
- ・ヨコハマテクノス(株)～経営の多角化、地域貢献、社内教育、労働力の有効活用

### 地域での経済循環～コミュニティ経済、六次産業化

- ・生産一流通ー加工ー販売
- ・高付加価値を実現
- ・直売ー農園レストランー観光農園ー農産物加工
- ・個別の六次産業化の取組(横濱花菜屋、よこはまグリーンピース等)
- ・地域の六次産業化など多様な展開可能性
- ・地産地消ビジネス支援事業
- ・コミュニティカフェの増加と食材提供の連携
- ・障害施設での就労支援、農園・飲食事業等との一体経営 など

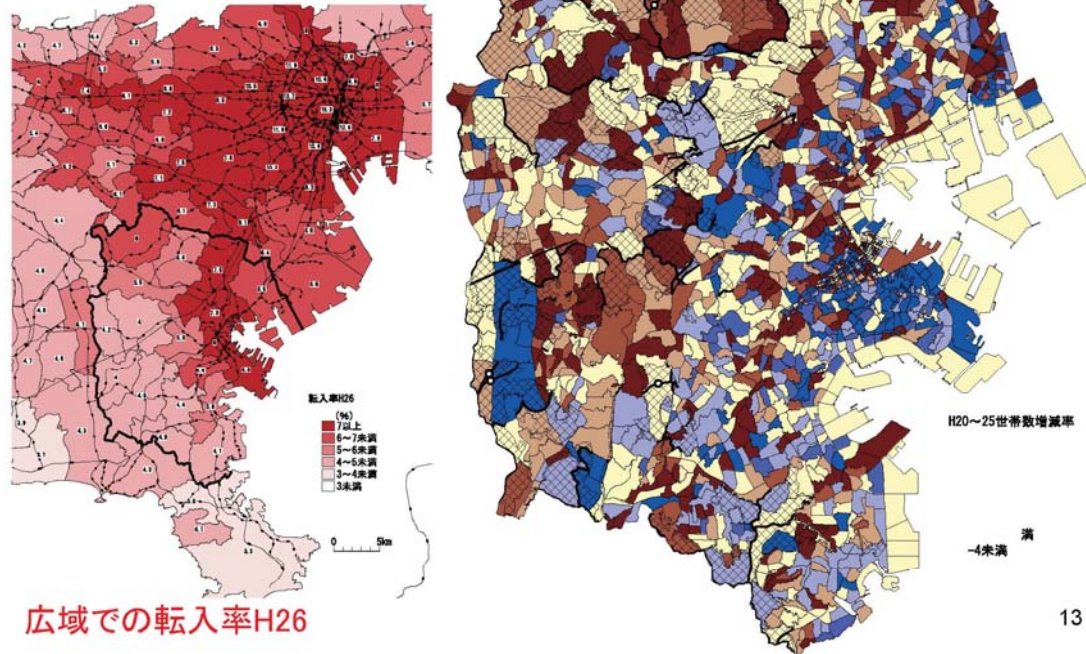
## 例2; 戸建住宅地の環境保全まちづくり

■市街化区域の一低専は31.0%、二低専0.4%で、合計31.4%



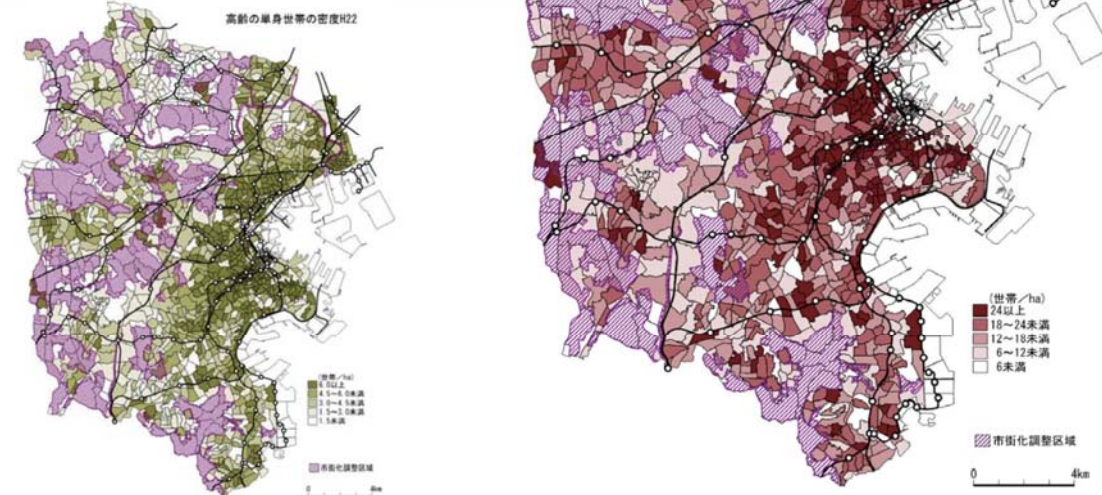
## ① 人口・世帯増減はまだら模様で進展

～町丁別世帯数動向(平成20～25年)



## ② 高齢者がいる世帯密度(H22)

・高齢者のいる世帯は、合計で487,666世帯(一般世帯数の31.0%を占める)。  
 ・高齢者のいる世帯の密度は、平均で11.2世帯/ha。なお、市域面積あたり一般世帯数の密度は36.2世帯/ha。  
 ・高齢者のいる世帯の密度は、都心周辺や鶴見臨海部の他、郊外の団地や計画開発された住宅地等で高くなっている。



### ③ 建築協定改定時に出される要望・意見

#### 《建築協定更新時の新しいニーズ》

- ・戸建だけでなく、二世帯住宅、併用住宅、兼用住宅も建てられるように
- ・コンビニ、パン屋、惣菜店、趣味の教室、ミニ喫茶等がほしい
- ・グループホームや高齢者住宅、介護事業所も何とかしたい
- ・屋上庭園や庭を広げたいので、陸屋根、擁壁変更したい
- ・車いす利用のためのスロープ整備したい
- ・空き家・空き地問題への対処を

#### 《ルールづくりは合意形成がカギ》

- ・まちは時の経過、住まい手の変化で変わるので、絶対はない
- ・建築協定から地区計画や地域まちづくりルールなどへの転換も有効
- ・自治会と連携して協定運営した方が合意形成や活動助成面で有効
- ・ルール作りだけでなく、まち普請、プラン作り、活動助成などを視野に入れた取り組みも大切

まちのルール比較表

	建築協定	景観協定	地域まちづくりルール	地区計画	景観計画
策定・締結主体	地権者	地権者	地域まちづくり組織	横浜市	横浜市
必要な合意	地権者全員の合意	地域住民等の多数の支持	地権者の多数の賛同	地権者の多数の賛同	地権者の多数の賛同
地区の大きさの目安	1街区以上	1街区以上	1街区以上	1ha以上	0.5ha以上
効力の及ぶ範囲	合意した地権者の敷地のみ	地区全体	地区全体	地区全体	地区全体
ルールの運営主体	地域でつくる協定運営委員会	地域まちづくり組織と横浜市	横浜市	横浜市	
ルールに変わらなかった場合※必要に応じて行う	地域で要請・訴訟(協定書の定めによる)	市長が要請・勧告	市長が勧告	市長が勧告	市長が勧告または命令
有効期間	定める	6年おきに協定の延長	なし	なし	
定められるルール	建築物の用途 ○ 敷地の面積 ○ 敷地分譲・容積率 ○ 建築物の高さ ○ 建築物の高さ ○ 外壁の後退距離 ○ 軒・庇の長さなど ○ 建築物のデザイン・色 ○ 建築物の構造・材料 ○ 設備 ○ 緑化率 ○	建築物の用途 ○ 敷地の面積 ○ 敷地分譲・容積率 ○ 建築物の高さ ○ 建築物の高さ ○ 外壁の後退距離 ○ 軒・庇の長さなど ○ 建築物のデザイン・色 ○ 建築物の構造・材料 ○ 設備 ○ 緑化率 ○	建築物の用途 ○ 敷地の面積 ○ 敷地分譲・容積率 ○ 建築物の高さ ○ 建築物の高さ ○ 外壁の後退距離 ○ 軒・庇の長さなど ○ 建築物のデザイン・色 ○ 建築物の構造・材料 ○ 設備 ○ 緑化率 ○	建築物の用途 ○ 敷地の面積 ○ 敷地分譲・容積率 ○ 建築物の高さ ○ 建築物の高さ ○ 外壁の後退距離 ○ 軒・庇の長さなど ○ 建築物のデザイン・色 △(※2) 建築物の構造・材料 △(※2) 設備 ○ 緑化率 ○	建築物の用途 × 敷地の面積 ○ 敷地分譲・容積率 ○ 建築物の高さ ○ 建築物の高さ ○ 外壁の後退距離 ○ 軒・庇の長さなど ○ 建築物のデザイン・色 ○ 建築物の構造・材料 ○ 設備 ○ 緑化率 ○
その他	工作物 × 緑地のルール × 土地利用のルール(商業物の確保など) ×	工作物 ○ 緑地のルール ○ 土地利用のルール(商業物の確保など) ○	工作物 ○ 緑地のルール ○ 土地利用のルール(商業物の確保など) ○	工作物 ○ 緑地のルール ○ 土地利用のルール(商業物の確保など) ○	工作物 ○ 緑地のルール ○ 土地利用のルール(商業物の確保など) ○
道路・公園などの位置づけ	×	×	○	○	○
根拠法令	建築基準法	景観法	地域まちづくり推進条例	都市計画法 建築基準法 都市緑地法 景観法	景観法
地域で検討にかかる期間の目安	0.5~2年	0.5~2年	0.5~2年	2~5年	2~5年
市の手続きにかかる期間の目安	4ヶ月	4ヶ月	4ヶ月	8ヶ月~1年	1~2年

※1 景観協定・景観計画は良好な景観形成を図るものに限る。 ※2 デザインのルールとして定める場合に限る

### ④ 典型的な取組事例

#### ■ 交流サロン設置・運営で元気づくりが広がる庄戸地区

##### 《開発経過》

- ・開発区域面積約74.5 ha。総武都市開発(三井不動産)
- ・1970~1974年(昭和45~49年)に開発。
- ・宅地分譲約1,296区画。1区画当り面積 平均265㎡

##### 《用途地域など》

- ・「庄戸一丁目・四丁目建築協定」
- ・「庄戸第一地区建築協定」
- ・建ぺい率30%、容積率60%
  - \* 第1種低層住居専用地域
  - \* 風致地区(第2種)



##### 《居住者特性》

- ・5つの自治会があり、1年交代の輪番制で運営
- ・世帯数は合計で1,350戸
- ・高齢化率は約50%で栄区内でも高いほう
- ・一人暮らし高齢者は約90人

## ■ サインづくりから始まる美晴台自治会(港南区永野地区)

～上永谷駅から徒歩圏の一低専50%、  
80%のまち(約700戸)



## ⑤ 安心・安全、快適に暮らし続けられる戸建住宅地へ

～閑静⇄にぎわい・活気／一人暮らし⇄多世代交流／孤立・さびしき⇄見守り合い

### A 快適な暮らしの実現

- ・空き家・空き店舗を使った交流サロン
- ・農園・コミュニティガーデン
- ・民有地・公共用地での地域緑化
- ・地域の歴史資源の活用
- ・テレワーク、職住近接の実現
- ・趣味のお店、工作教室、バザー など

### B 安全・安心の確保

- ・二世帯居住のできる住宅
- ・高齢者グループホーム
- ・特色あるシェアハウス
- ・在宅医療・介護サービス
- ・健康スポーツジム
- ・買物の場(コンビニ等)
- ・地域交通の向上(通勤、買物、病院等)

### C 都市計画・整備助成制度の見直し

- ・道路・公園等の公共スペースの地域利用
- ・一低専へのコンビニ許可制
- ・生産緑地地区への直売所、農家レストラン
- ・田園住居地域の創設 など

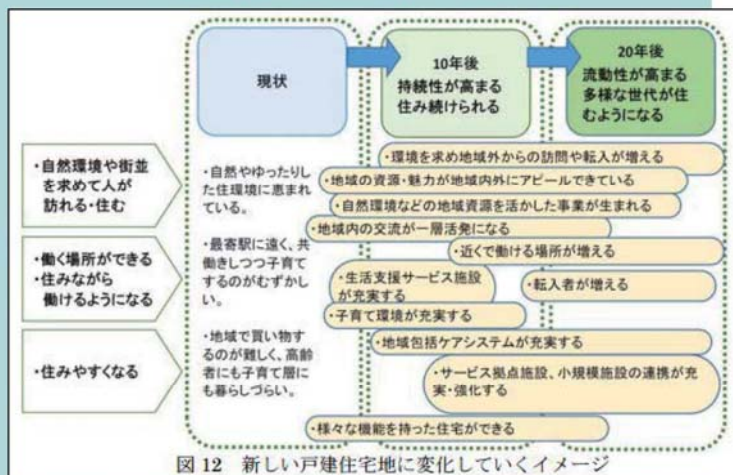


図 12 新しい戸建住宅地に変化していくイメージ

出典: 上郷東地区まちづくり構想案H29.3(意見募集中)



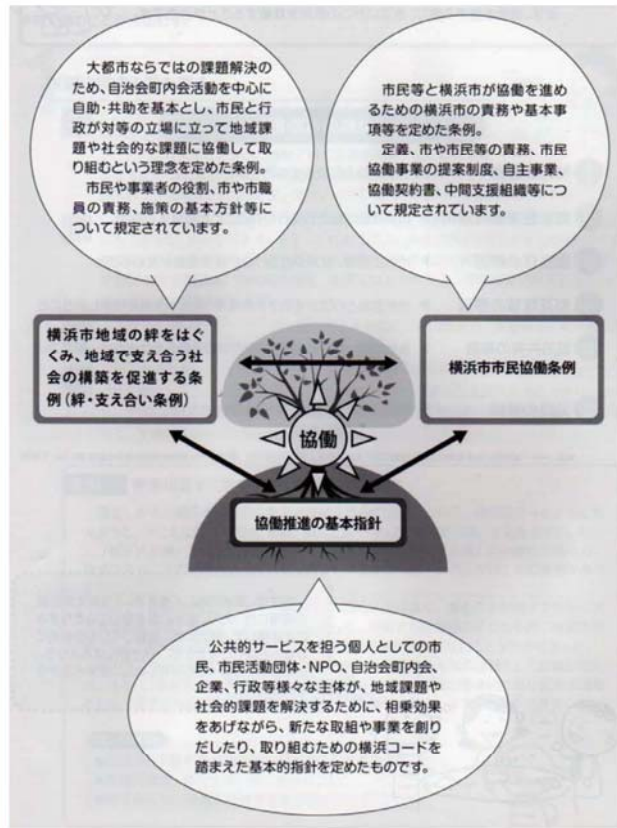
## 例3; 地域力・市民力発揮のまちづくり

《横浜市の協働の仕組みは次の3本柱》

- ① 協働推進の基本指針
- ② 市民協働条例
- ③ 絆・支え合い条例

《仕組みづくりの主な経過概要》

- 平成3年度～; 市民まちづくり活動の支援
- 平成8～10年度; パートナーシップ推進モデル事業
- 平成9～10年度; 市民活動推進検討委員会
- 平成12年3月; 市民活動推進条例制定
- 平成15～22年; 環境まちづくり協働事業
- 平成16年3月; 協働推進の基本指針策定
- 平成16～18年度; 協働事業提案制度
- 平成16年度～; 横浜会議(政策提案)
- 平成17年度～; 地域福祉保健計画策定
- 平成17年2月; 地域まちづくり推進条例
- 平成17年度～; ヨコハマ市民まち普請事業
- 平成23年3月; 絆・支え合い条例
- 平成24年6月; 市民協働条例
- 平成24年10月; 協働推進の基本指針改訂



## ① 政令市の中では特段に高い自治会町内会の組織率

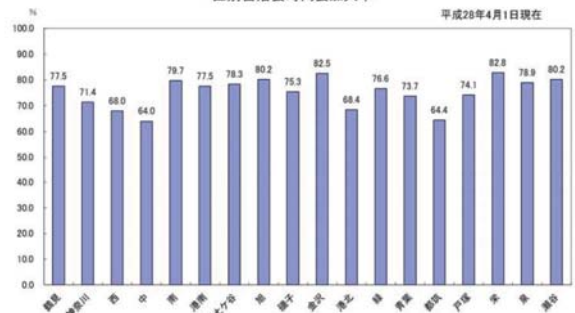
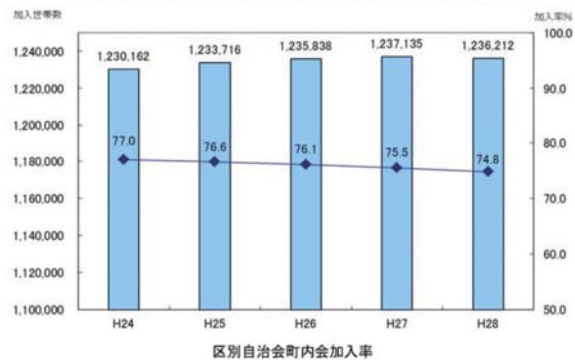
市平均の組織率は74.8%と政令市の中では高い。18区のうち高いのは栄区82.8%、金沢区82.5%、低いのは中区64.0%、都筑区64.4%である。

少子高齢化や人口減少に伴い、ソフト・ハードに関わらない地域課題が発生、担い手が重要な課題になっている

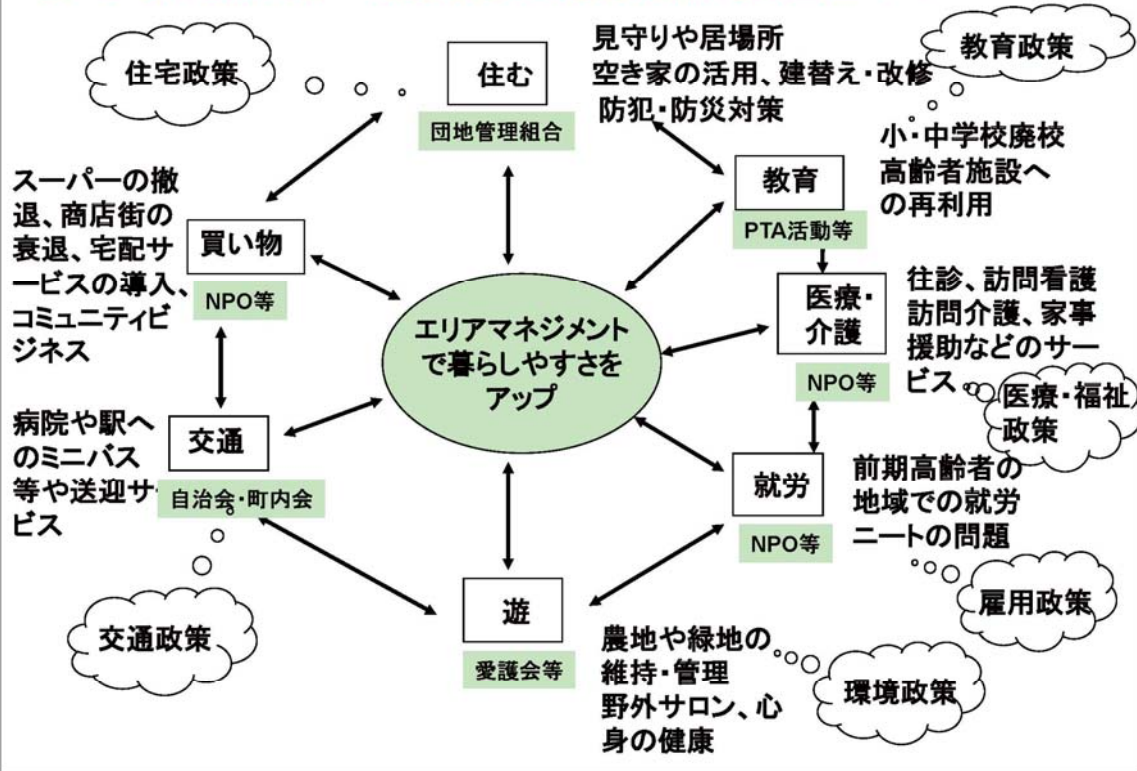
- ・ 役員のなり手がいない
- ・ 役員の高齢化で活動が低調に
- ・ 輪番制による弊害など

↓  
意欲的な担い手が登場しやすい環境づくりがますます重要に！

自治会町内会加入世帯数及び加入率の推移(各年4月1日現在)



## ② 少子高齢社会の課題解決は分野横断的な仕組みで



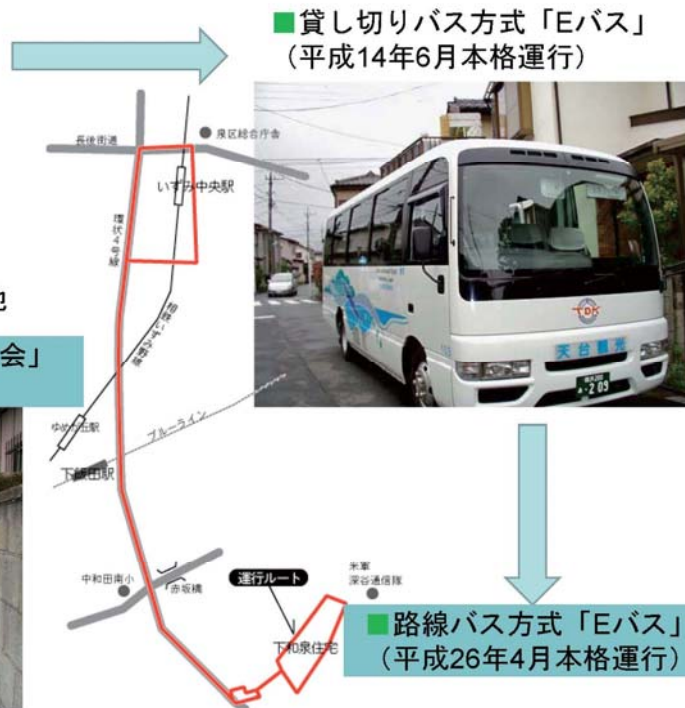
## ③ 典型的な取組事例

### ■ 地域交通サポート事業(泉区下和泉地区、約1,000戸)



昭和37年宅地造成  
約1,000戸の戸建団地

■ 送迎ボランティア「あやめ会」  
(平成14年発足)



## ■ 地域緑のまちづくり(H23-27年度)の白根台第九自治会

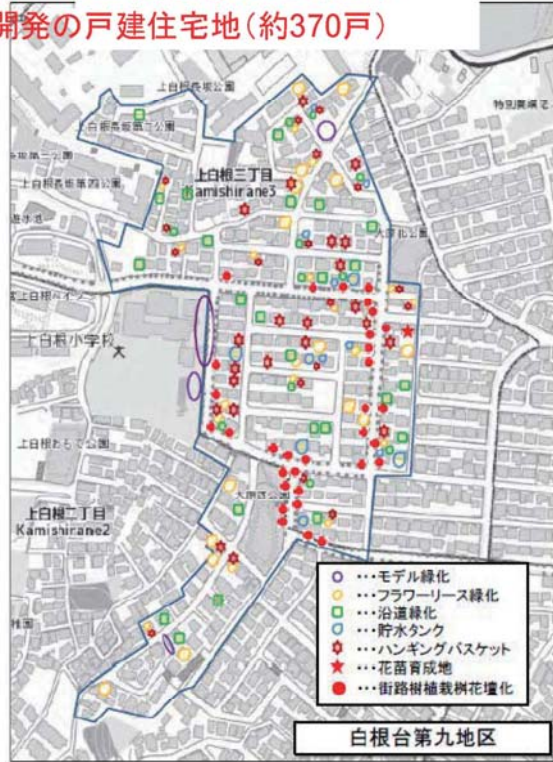
～一低専で50%、80%の計画開発の戸建住宅地(約370戸)



上白根小学校前の花壇植え替え

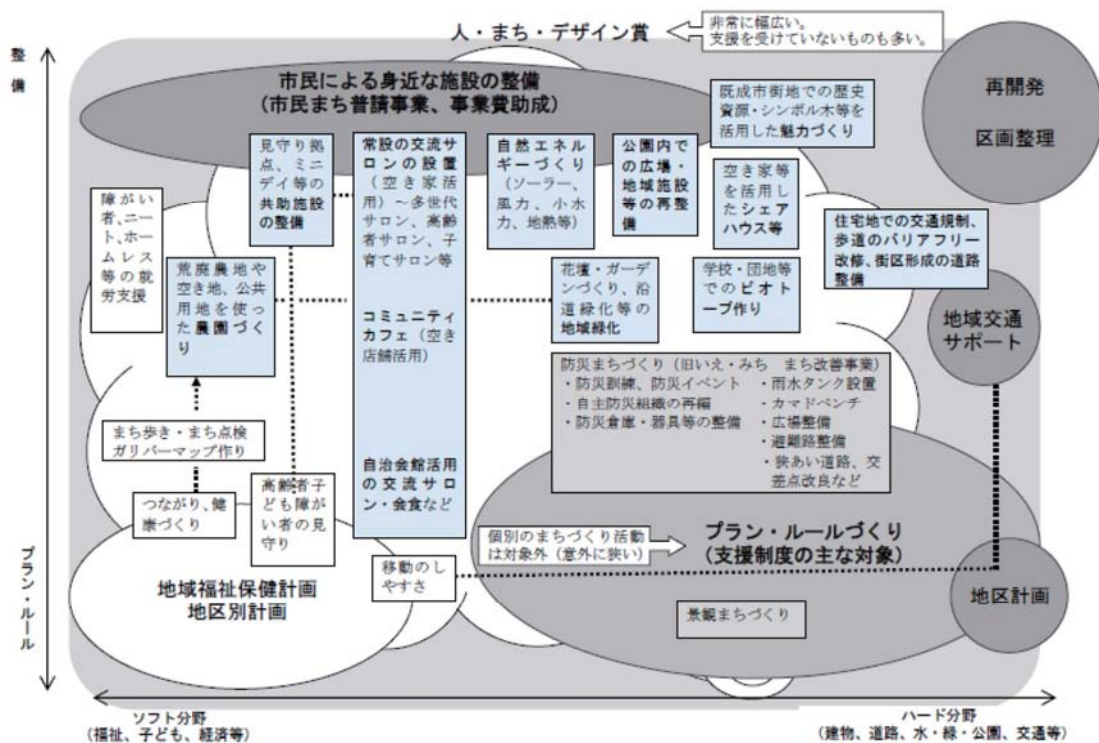


住宅地のゲートの擁壁緑化



白根台第九地区

## ④ 地域まちづくりのこれまでとこれから



① 裏横浜と呼ばれている地域が横浜の真骨頂 櫻井 淳

## 全国まちづくり会議

裏横浜と呼ばれている地域  
が横浜の真骨頂


横浜プランナーズネットワーク 櫻井淳





### 関内と関外

1



**A** 馬車道  
婦人服  
文具店  
専門店

**B** 野毛  
小規模  
庶民的

**C** 伊勢佐木  
イセセ  
面して  
業種で  
大型店

**D** 中華街  
中華街  
立並ぶ

**E** 元町  
ファッ  
業種を  
店舗が

— 中心的  
— 整備済  
— 特殊な

◇ 観光地  
■ 文化・  
■ 官公庁  
■ 公園

2

伊勢佐木接收当時

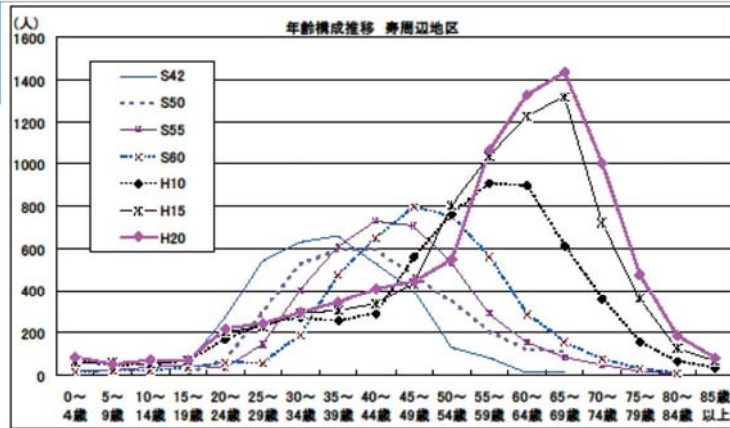
昭和25年福富町から



接收解除のあゆみ より

3

寿町





寿町総合労働福祉会館  
緒形昭義の設計(1974)

水族館劇場  
2017.9. 1～17



5

## 横浜橋商店街



真金町から大鳥居神社を見る  
(旧赤線地区)

6

# 黄金町



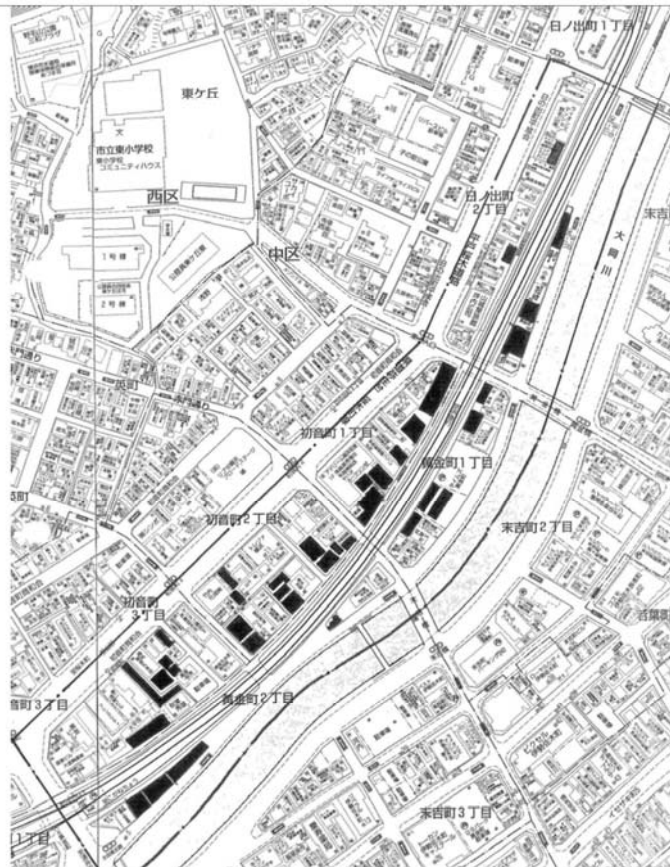
バイバイ作戦後の閑散とした黄金町界限



7

## 特殊飲食店分布図

最盛期には図中の黒い部分に約250店舗まで特殊飲食店が拡散・拡大



8



10



## 2010黄金町バザール



### 高架下 階段広場(ヨコハマまち普請事業)



12

# 野毛



13





15



16

# 流域の視点がまちを変える

大澤 浩一

(株)ニデア 代表  
流域連携よこはま 代表  
NPO法人 鶴見川流域ネットワークング 理事  
連携・鶴見川流域ネットワークング 副代表  
下流ネット・鶴見、鶴見川を楽しくする会



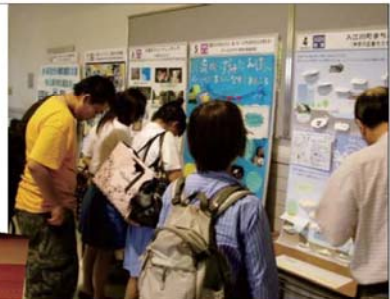
# 横浜のまち・流域の特徴



## よこはま川のフォーラムの活動

よこはま川のフォーラム'98 がきっかけ

- 河川法改正「河川環境の保全と整備」(H9)により水辺で活動している市民団体等で設立(H10)
- 互いの活動の紹介や意見交換を行う水系・流域のネットワーク
- 各流域ごとに連携を深める交流イベント、活動を実施
- よこはま流域の旅1998～2007  
7つの流域をめぐる交流活動



17 河川法改正  
平作川いかりワークショップと鶴見川いかりフェスティバル参加  
～鶴見川流域サミット交流2003～  
[鶴見川流域こども交流実行委員会]



# 流域連携よこはま

横浜の7つの河川流域  
平成20年(2008)～

## ヨコハマ・水環境都市再生プロジェクト

- 流域ごとに「流域活動拠点」の設置
- 流域ごとに「流域ビジョン」の作成

●モデル流域●  
大岡川流域で実践

河川水域利用者安全講習会へ参加



エコキッズ水辺安全講習・体験支援



光のぷろむなあと参加



Eボートで大岡川・堀割川魅力めぐり



大岡川流域バスツアー  
(円海山～関内)



大岡川桜まつりにEボートで参加

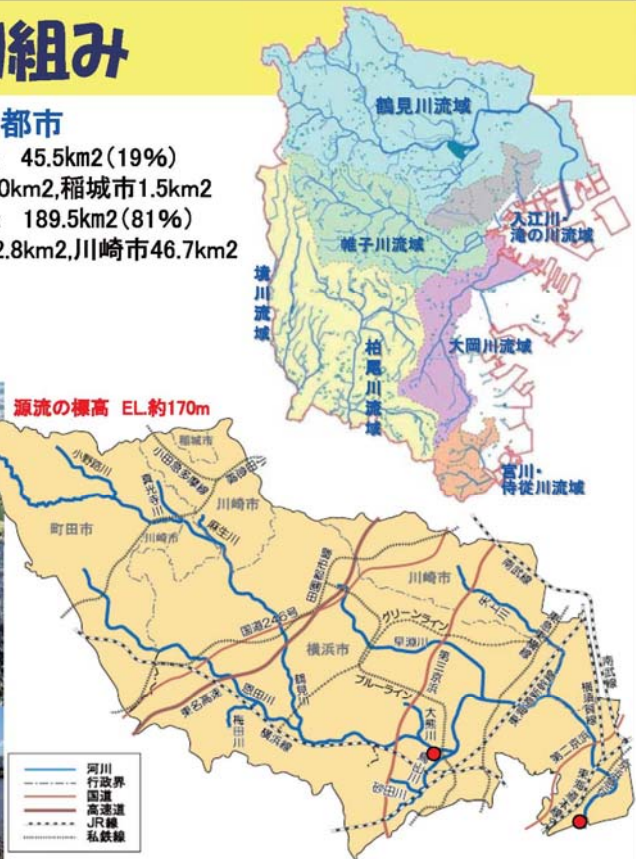
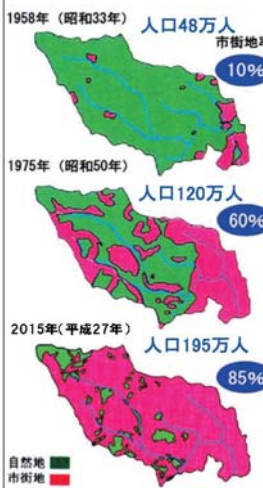
# 鶴見川流域の取り組み

## ■流域諸元

流域面積 : 235km<sup>2</sup>  
 幹川流路延長 : 42.5km  
 流域内人口 : 196万人  
 流域内人口密度 : 8200人/km<sup>2</sup>  
 (全国第1位)

## ■流域の都市

東京都 : 45.5km<sup>2</sup>(19%)  
 町田市44.0km<sup>2</sup>, 稲城市1.5km<sup>2</sup>  
 神奈川県 : 189.5km<sup>2</sup>(81%)  
 横浜市142.8km<sup>2</sup>, 川崎市46.7km<sup>2</sup>



## 大曲広場整備による地域と流域の交流



駒岡住民による花畑の植栽・手入れ

下流ネット・鶴見による水辺活動



クリーンアップ

Eボート体験

防災訓練

釣り大会

大曲広場と駒岡防災船着場を一体的に使った川辺イベント、防災訓練

## 流域企業による環境貢献・流域貢献

TRネットの支援によるキリンビール横浜工場の  
鶴見川クリーンアップ



河口干潟での生きもの観察



クルーズイベント協力

工場ビオトープでの生きもの保全と「自然の恵みを感じるツアー」

## TRネットによる 持ち場や水辺拠点で地域と連携した川のイベント



いかだで遊ぼう谷本川(上流)

子ども風のまつり(中流)

河口生きもの観察とカッパになってEポート体験(河口)

鶴見川サマーフェスティバル(下流)

## 流域で暮らし直す 流域ツーリズムのすすめ



市民提案で流域共通サインの設置、流域自治体へ展開

あなたの身近な街を、川や谷・尾根の道など自然が創り出した大地の凸凹にそって楽しみ、歩き、感動と再発見の旅に出る、それが**バクの流域ツーリズム**



流域ウォーキング

宝島 2009  
つるみ川新春ウォーク



流域ウォーキングMAP

持ち場の活動への参加



## 竹山池の景観・生物多様性の回復、団地再生



## 流域まちづくりのこれからの課題

### ●環境の変化

外的：地球温暖化（大雨・雷、外来生物等）  
流域環境の変化  
内的：市民団体の高齢化

### ●課題

- ①活動場所の継続、維持管理
- ②組織の継続
  - ・高齢化 担い手の確保
  - ・活動資金の確保

### ●今後の対応

- ・環境変化への対応
- ・市民活動の見える化
- ・世代交代の在り方  
組織内での世代交代  
他団体との協働、ネットワーク
- ・地域組織、企業等との連携  
(水辺愛護会等)

# 鶴見川流域ツーリズムと流域キャンペーン

**流域産業育成**  
 栽培収穫体験ファーム等による営農支援  
 雨水浸透ます  
 水辺体験・交流イベント  
 流域共通サイン  
 流域ウォーキングMAP  
 流域ウォーキング

**流域交流促進**  
 流域ふれあいセミナー  
 流域センターで環境学習

**流域緑地保全・活用**  
 源流緑地の保全  
 河川整備  
 自然環境保全・回復  
 河川敷保全活用プログラム  
 樹木の維持管理  
 多自然川づくり  
 川の遊上調査

**流域学習推進**  
 企業の流域貢献  
 企業支援による環境イベント・保全活動

**防災まちづくり**  
 鶴見川多目的遊水地  
 防災調整池・ピオトープ  
 流域企業のクリーンアップ

# 鶴見川流域センターでの環境・防災学習

市民団体からの提案で実現した鶴見川流域センター。鶴見川流域の環境や自然、歴史などの体験学習や情報交換。水害や震災等の災害時の防災活動拠点。

**屋上から遊水地見学**  
 流域水族館で生きもの学習  
 航空写真で流域・防災学習  
 川での生きもの観察  
 市民団体・企業・行政による防災イベント

③ 静脈から発想するまちづくり 山本 耕平

for sustainable society and community

# 静脈から発想するまちづくり

山本 耕平

株式会社 **ダイナックス** 都市環境研究所

www.dynax-eco.com 株式会社 **ダイナックス** 都市環境研究所

for sustainable society and community

## 1. 裏側から見たヨコハマ

1954年 (昭和29年). オート三輪車による穴開処分地への搬入の様子。

1956年 (昭和31年). 手車 (籠車) によるごみ運搬の様子。

1958年 (昭和33年). 鶴見区矢向処理場に大型車からごみを搬入。このあと、石炭ガラによる覆土作業を行う。

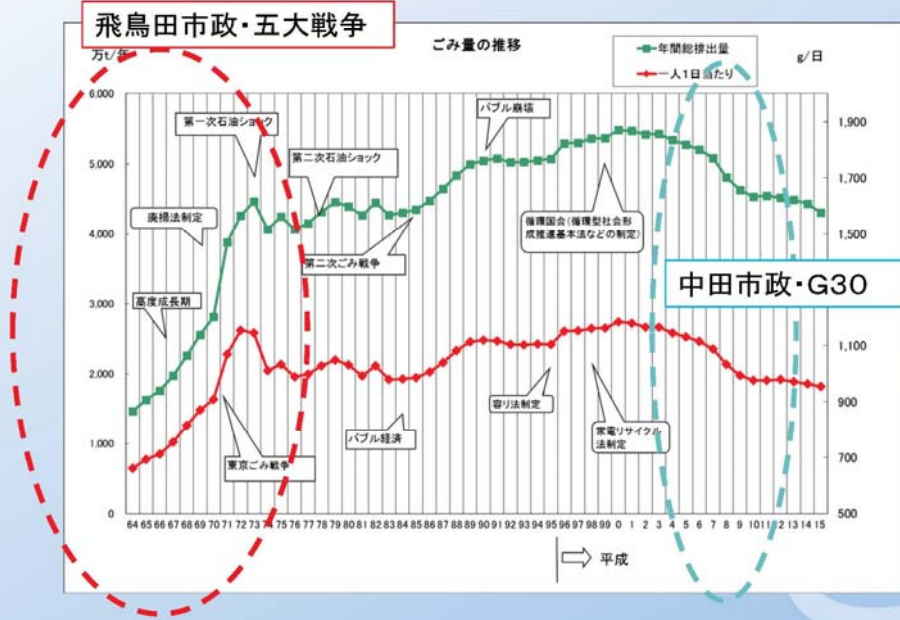
1972年 (昭和47年). 昭和35年に比べてごみ量は6倍となり、常に処分地不足問題に直面するようになる。

1973年 (昭和48年). 余熱を利用した温水プールや老人福祉施設を併設した最新式焼却場の旭工場が完成。

焼却工場	竣工・稼働	廃止・休止
磯子工場	昭和44年	昭和59年3月廃止
港南工場	昭和49年	平成18年1月休止
栄工場	昭和51年	平成17年10月廃止
保土ヶ谷工場	昭和55年	平成22年焼却休止
都筑工場	昭和59年	
鶴見工場	平成7年	
旭工場	平成11年	
金沢工場	平成13年	

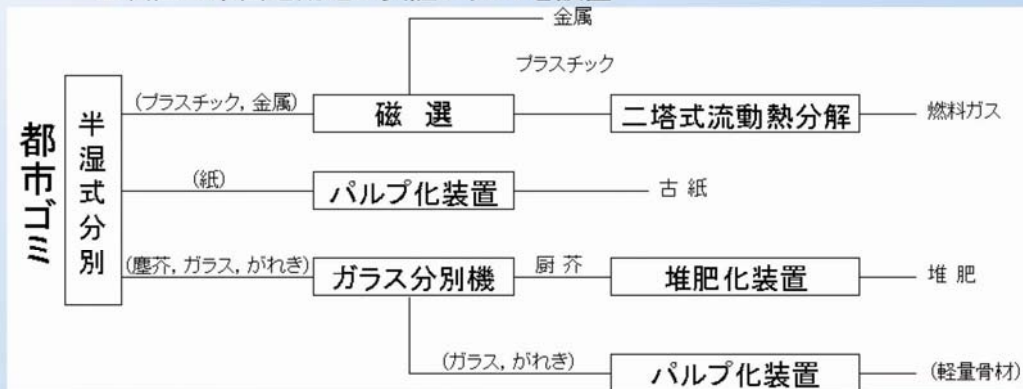
www.dynax-eco.com 株式会社 **ダイナックス** 都市環境研究所

ごみ量の推移(全国)



## スターダスト80計画

- ・通産省工業技術院による、ごみからの物質回収・エネルギー回収を目的とした大型プロジェクト(1974~1982)
- ・金沢区工業団地用地に実証プラントを設置

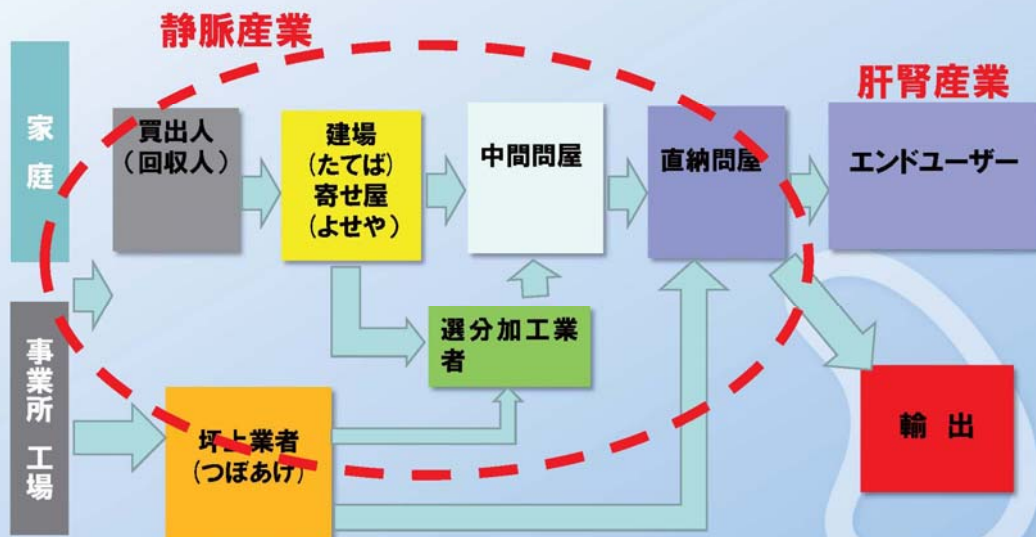


⇒ コミュニティ派(排出時に分別)か技術派(混合ごみを技術で選別)か

## ヨコハマの発展を支えてきた静脈産業

- ・臨海工業地帯に「肝腎作業」立地
  - ⇒ 製鉄 ↔ 鉄くず
  - ⇒ ガラス ↔ ガラスくず(カレット)
  - ⇒ ビール会社 ↔ 空きびん回収
  - ⇒ 工場で使うウエス(工業用雑巾)の需要
- ・住宅地の開発・人口の増加
  - ⇒ 資源回収業の発展
- ・横浜港
  - ⇒ 再生資源の輸出入
  - ⇒ 大正～昭和初期はウエス(工業用雑巾)の輸出(ボロ儲け)

## 伝統的な静脈産業



## 2. G30プランーヨコハマはG30

横浜市一般廃棄物処理基本計画(横浜G30プラン)2003年策定

2010年度におけるごみ排出量を30%削減(2001年度比)

【何をしたか】

- 容器包装、資源物の分別収集の拡大
- 協働による取り組み  
    集団回収の拡充、フリマの開催、消費者団体との連携
- 各区G30推進本部/地域G30活動委員会設置
- 事業ごみ対策の強化(搬入規制など)
- 「ヨコハマはG30」のスローガンの普及(ヨコハマ市民は誰でも知っている)

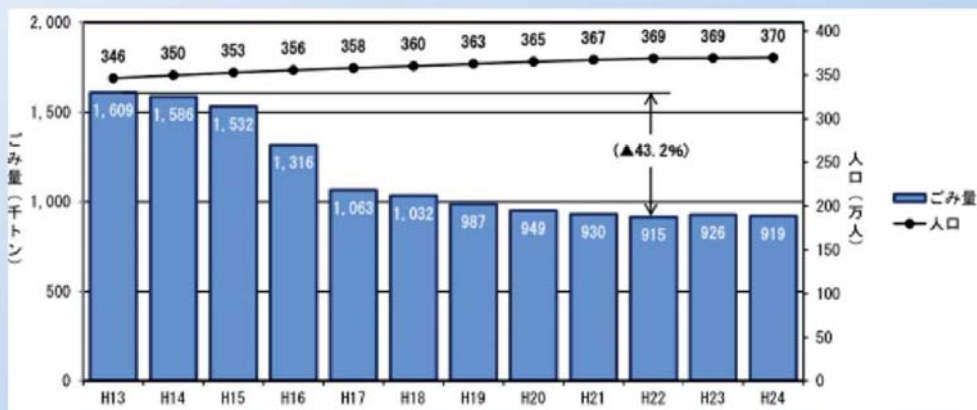


中田宏市長命名

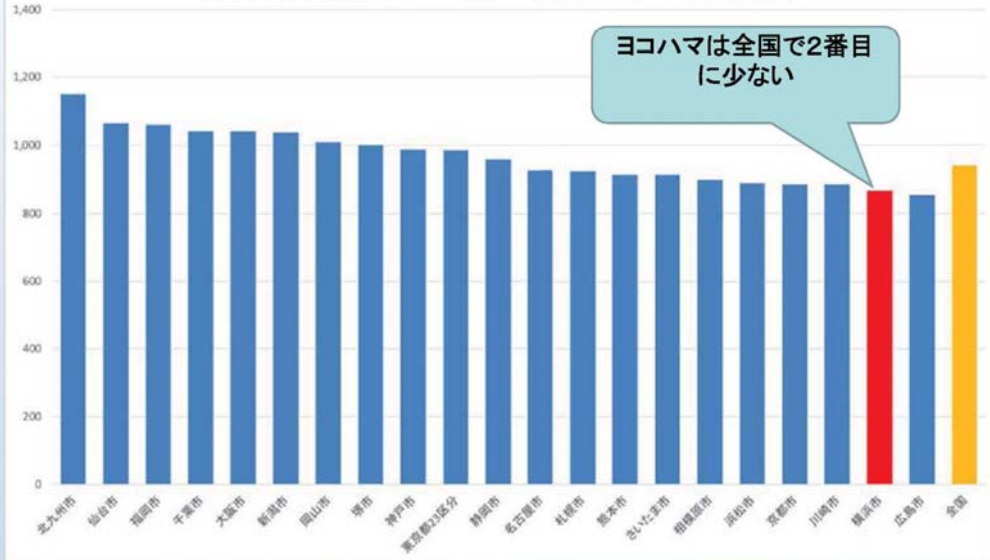
## G30の成果

目標5年前倒しで達成 2009年度実績で約40%削減

- 2つの清掃工場廃止
- 建替費用 1,100億円削減/運営経費 30億円削減



### 政令指定都市の一人一日当たりゴミ排出量



ヨコハマは全国で2番目に少ない

平成27年度実績

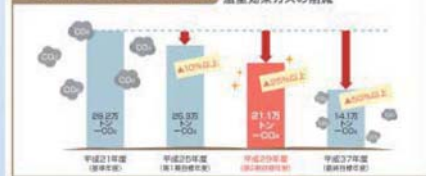
山本作成

### 横浜市一般廃棄物処理基本計画 スリム ヨコハマ3R夢プラン

#### ①もっとチャレンジ・ザ・3R ごみと資源の総量の削減



#### ②ごみ減量から始めよう脱温暖化 ごみ処理に伴い排出される温室効果ガスの削減



横浜らしく、  
かっこよく、  
「もったいない」  
を楽しもう。

**家庭での食品ロス**をストップしよう!!

何も手が付けられずに廃棄されている「手つかず食品」は、年間約2万トン!!  
買い物をするときは冷蔵庫の中身を事前にチェックし、必要なだけ買いましょう。

生ごみを出すときは、しっかりと**水切り**しよう!!

生ごみの水切りをすることで、ごみの量を約10%削減できます。「濡らさない乾かす・ひとしぼり」を合言葉に水切りにご協力ください。

家庭ごみをより一層**分別**しよう!!

燃やさないごみの中には、リサイクル可能な「古紙」や「プラスチック製容器包装」などが多く含まれています。引き分け、分別・リサイクルにご協力ください。

**マイバック**でレジ袋を削減しよう!!

ごみ袋として使用されます。ごみや資源に出されているレジ袋は、1世帯あたり年間約200枚!! 日ごろから、不要なレジ袋や薄紙包装は断るようしましょう。

**せん定紙・刈草は乾燥**させよう!!

せん定紙や刈草を2日間乾燥させると、量を約40%削減できます。袋に入れて口を縛らず乾燥させてから出しましょう。

**食べきり協力店**で「食べ残し」を削減しよう!!

飲食店等での食べ残しを削減するため、「リユアメニューの導入」や「食べ残しの呼びかけ」などを行っている「食べきり協力店」を拡大しています。積極的にご利用ください。

みんなで1年経つくと、廃棄工場での廃棄量を「約1万1千トンが1日に使用する分」削減させるよ。

### 3. 「農」との連携ーはまぼーく

平成 11年度	食品循環資源飼料化研究会の発足 横浜市の、ごみ減量・リサイクル事業として検討が始まる(調査・研究の実施)
13年度	モデル実験として3農家での飼育試験を実施
14年度	モデル事業を開始し、5農家での飼育試験を実施
15年度	8農家での飼育試験を実施
16年度	横浜市の事業が終了し、以降は関係者主体となった事業として実施(11農家が参加) 横浜農協食品循環型はまぼーく出荷グループを設立 市内で「はまぼーく」の販売を開始
17年度	ホームページの開設、「はまぼーく通信」の発行 各種イベントへの参加、小学校・消費者との交流会 実施等により普及・PR活動を展開

#### 食品循環資源の飼料化



#### 普及・PR活動(地域の小学校との交流)





## 4. リサイクルデザインの活動

横浜市資源リサイクル事業協同組合



平成4年10月 75社にて設立（現在121社）

平成5年4月 緑資源選別センター選別作業受託

平成7年11月 第1回リサイクルデザインフォーラム「古紙回収10万トン大作戦」

平成12年10月 第1回環境絵日記発表会 子ども環境会議開催

平成13年 リサイクルデザインサポーターの募集開始

平成15年2月 「横浜エコ・リサイクルポート構想」発表

5月 リサイクルポート山ノ内 稼働開始

平成20年3月 「横浜型地域貢献企業最上位認定」取得

平成9年11月 月刊リサイクルデザイン 第13回「NTTタウン誌大賞特別賞」を受

賞  
平成19年10月 NPO 横浜市集団回収推進部会設立

平成21年2月 「りくみビジョン2020」を策定



## 環境絵日記コンクール

- ・横浜市内の全小学生の約12%が応募
- ・環境学習の手法として秀逸
- ・全国に展開、海外からも参加
- ・横浜市との連携
- ・市内企業を環境でつなぐ

日本全国に広がる環境絵日記の“輝”！



◆ 「環境絵日記」応募数と来場者数の推移



過去最高の  
22,306 作品

今年  
23,057

「環境絵日記」は累計で14万人を突破しました！

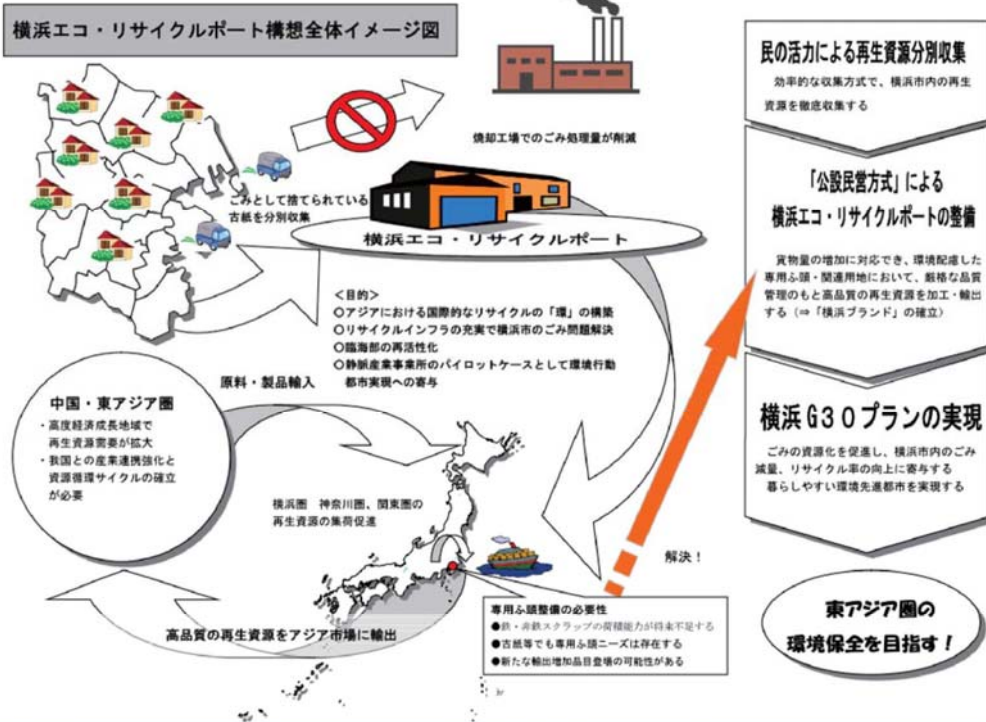
for su...  
and o...



国の「リサイクルポート(総合静脈物流拠点港)」に先駆けて、組合で構想策定し、横浜市港湾局の協力で実現した。

www.dynax-eco.com

株式会社 ダイナックス都市環境研究所



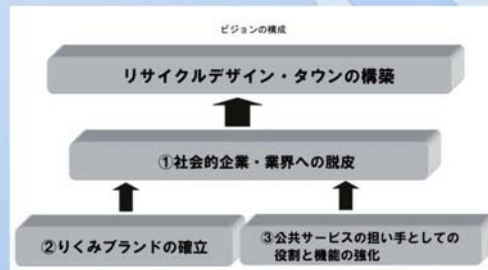
www.dynax-eco.com

株式会社 ダイナックス都市環境研究所

# リサイクル・デザインタウン



循環型社会に向けた社会の変革をふまえ、社会的企業としての組合・リサイクル業界が中心となり、市民や事業者、行政と連携・協力し合って循環型社会を担っていく地域社会の姿を「リサイクルデザイン・タウン」と名付け、将来ビジョンとして掲げる。



## 横浜市資源リサイクル事業協同組合「りくみビジョン2020」概要版

私達は、社会的課題に取り組むリサイクル業界のトップランナーをめざします。CSR戦略ビジョン「りくみビジョン2020」を掲げ、リサイクルデザインタウンの構築に向けて、新たな社会貢献ビジネスを展開してまいります。

**「りくみビジョン2020」とは？**

**リサイクルデザインタウンの構築をめざす**

循環型社会に向けた社会の変革をふまえ、社会的企業としての組合・リサイクル業界が中心となり、市民や事業者、行政と連携・協力し合って循環型社会を担っていく地域社会の姿を「リサイクルデザインタウン」と名付け、将来ビジョンとして掲げます。

リサイクルデザインタウンの実現のためには、CSR（企業の社会的責任）を経営上の最も重要な戦略として位置付け、社会的企業・業界への脱皮が必要となります。（戦略的CSR活動）

そのためには「りくみブランド」を確立し市民に選ばれた企業・業界となること、公共サービスを提供する社会貢献ビジネスとして、循環型社会をめざす行政や市民、事業者の多様なニーズに対応できる仕組みや体制の整備を図ることを目指します。

**「りくみビジョン2020」の構成**

リサイクルデザインタウンの構築

①社会的企業・業界への脱皮

②りくみブランドの確立

③公共サービスの担い手としての役割と機能の強化

**「りくみブランド」の8原則**

- 原則1 環境貢献・事業、サービスを行う中で、環境問題にいかに関与しているか
- 原則2 庶民的・市民の目線、ニーズに合っているか
- 原則3 便利（利便性）：ステークホルダーが利便性を感じる存在になっているか
- 原則4 社会との接点：事業そのものあるいはそのサービスによって社会的な接点を持つことができるか
- 原則5 楽しい・ステークホルダーに楽しさ、エンターテインメント性を与えることができるか
- 原則6 お財布にやさしい・経済合理性を追求しながらも市民にとって高品質なサービスになっているか
- 原則7 わかりやすい・ステークホルダーにわかりやすいサービスができているか
- 原則8 市民の味方・市民優先のサービスができているか



## 空き家活用は まちづくり

市内自主事業→県域への試行（基金21事業）

1. 10年間の「空き家活用相談」から見えてきたこと
2. 空き家利活用の取組は「成熟社会」のまちづくり
3. 県域への検証と普及の試み

NPO法人横浜プランナーズネットワーク  
谷口 和豊、古居 みつ子

1

### 「空き家活用相談」の実績 (2007～2015)

- 電話、メールなどによる相談 約120件
- 内 現地物件確認 約60件
- 内 活用が実現したもの 6件
  
- 横プラのメンバーがコーディネーターとして参加するなどの形で実現したもの 2件

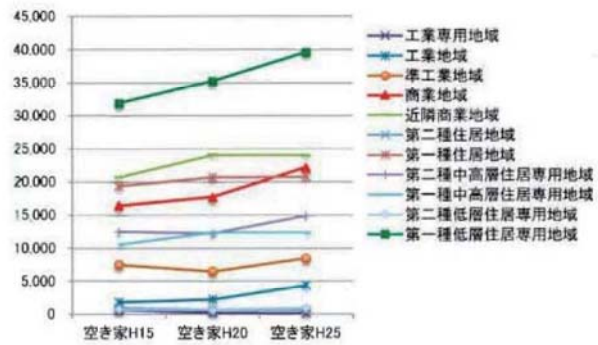
2

## 用途地域別の空き家数の動向（試算）

○市内空き家の 約22.6%  
が第一種低層住居専用地域内  
にあり、最も多い。

○第一種低層住居専用地域内  
の空き家は、増加の傾向が大  
きい。

○建物用途が制限されている  
ことから、空き家利活用の転  
用策にもブレーキがかかる。



資料：横浜市 空き家の活用促進・市場流通に関する検討及び空き家等対策計画策定業務報告書H28.3  
※住宅・土地統計調査結果により作成

3

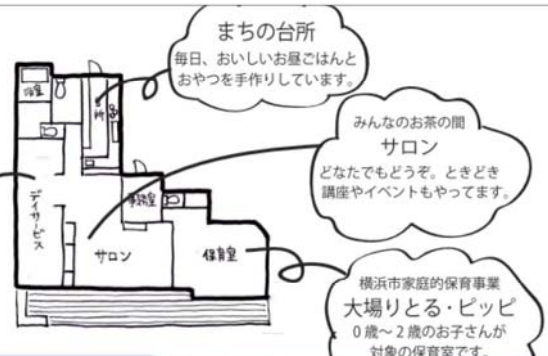
## 小規模事業複合型＋サロン ：わたせハウス



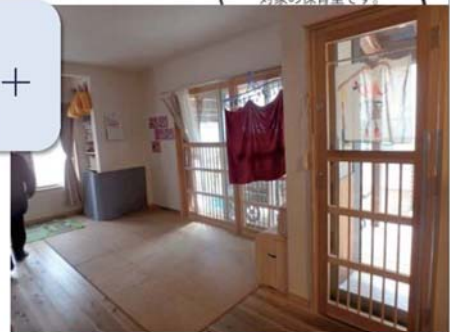
- 平屋の戸建て住宅を活用して、地域密着型のデイサービス+保育所、サロンを開設。
- 平成25年4月オープン
- 改修費の助成あり。



介護保険対応  
 デイサービスさくら  
 定員6人のアットホームな  
 デイサービスです。



サロン & デイサービス+小規模保育所



店舗+サロン  
 : ジュピの縁側



- 平屋の戸建て住宅を活用して、駄菓子屋とサロンを開設。
- 平成28年3月オープン
- 改修費の助成あり。

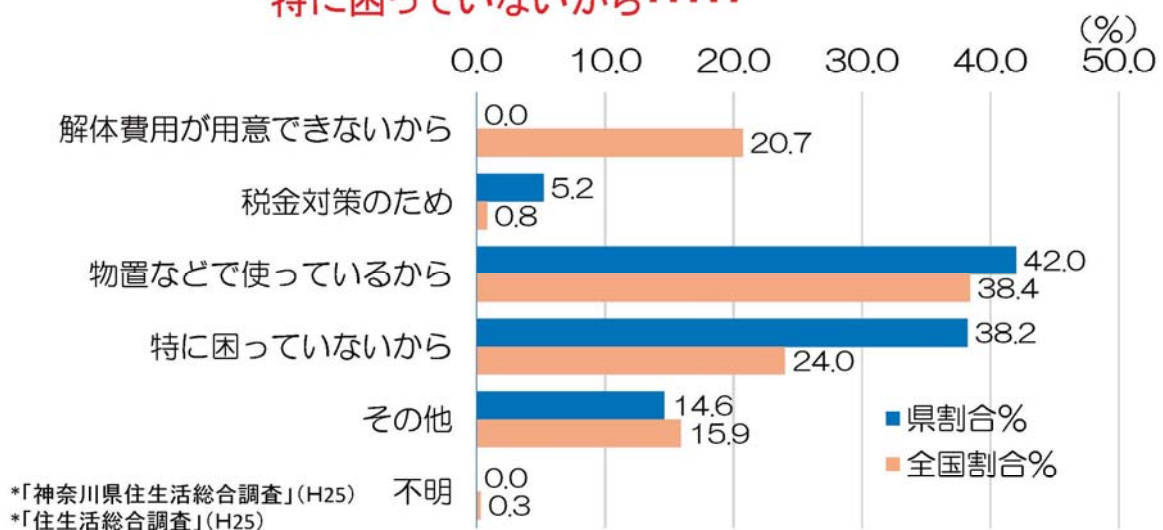


サロン & 駄菓子屋



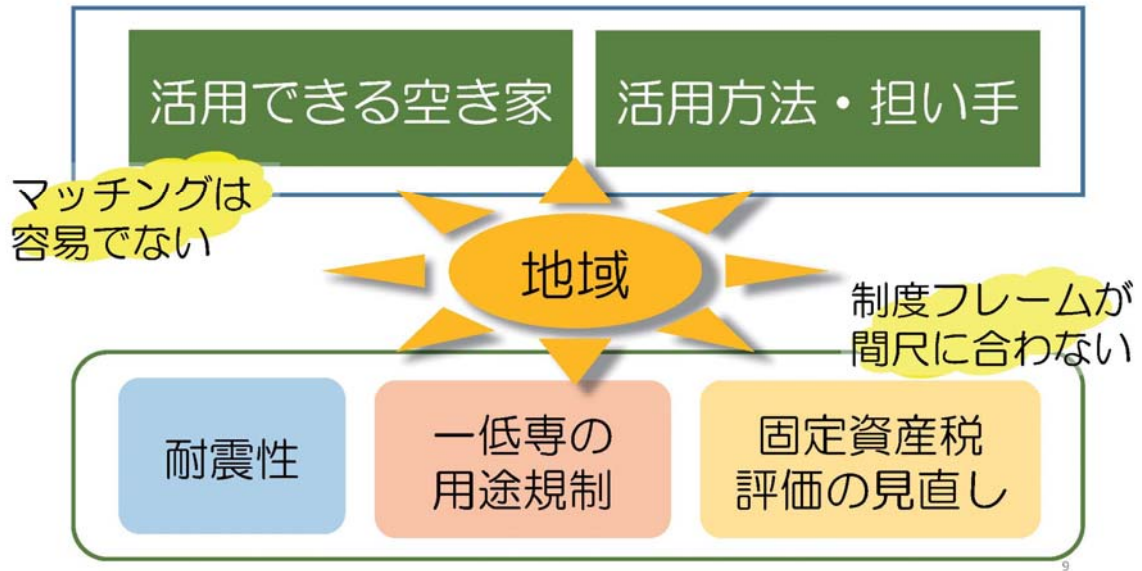
## 空き家にしておく理由

特に困っていないから……





## 1. 「相談」から見えてきたこと



## 2. 空き家の利活用は「成熟社会」のまちづくり

### 1 地域のニーズに応える資産

強い地域ニーズがある  
・気軽に利用できる場  
・生活支援サービス拠点

生活ニーズの変化

居住者構成の変化  
(少子高齢化・世帯規模の縮小)

### 2 推進のポイント

①「住み開き」「空き庭活用」も利活用の一つと捉える。

②地域の情報は地域が持っている。自治組織や見守り団体等と緩やかに連携する。

③担い手は人つながりで、個別に働きかける。

- ・この指止まれ方式
- ・興味の持てる入り口準備

10

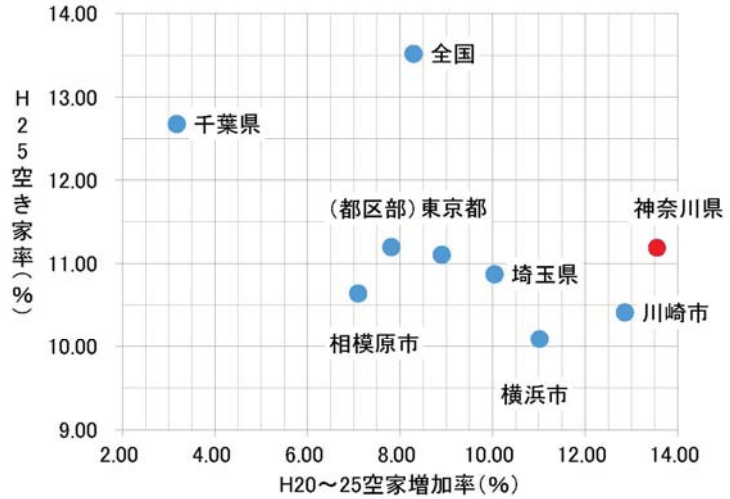
## 神奈川県空き家率と空き家の増加率

○神奈川県の空き家率は平成25年時点で11.2%。

○空き家の総数は49万戸（全国3番目）。

○空き家の増加率（平成20～25年）が13.6%と高いことが特徴。

○平成20～25年の5年間で58,100戸増加した。



\*平成20,25年住宅・土地統計調査結果による

11

## 空き家率 H25



\*住宅・土地統計調査結果による

### 3. 県域への検証・普及の試み

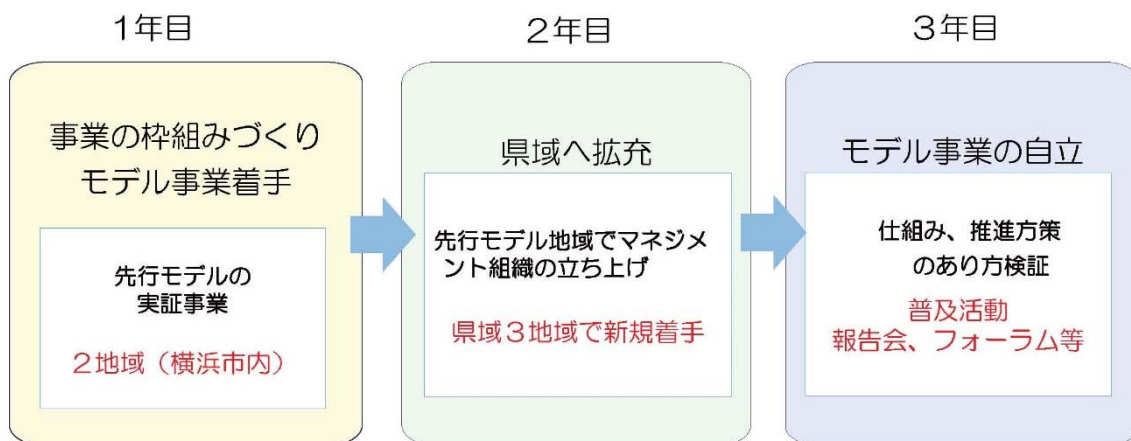
かながわボランティア活動推進基金 21 協働事業

<事業名> **空き家等の利活用による地域の魅力アップ事業**

- ・小地域に自立したマネジメント組織を立ち上げる地域住民の取組を、初動期から伴走しながらお手伝いする。
- ・普及するための実践的な推進方策を提案する。

13

#### 事業の全体イメージ（当初）



14

## 取組みの状況

7地域で検討中

※空き家等の特定ができています。

横浜市内		県北西・県央・湘南地域等
戸建て住宅地	共同住宅団地	戸建て住宅地
①菊名駅西口地域 (港北区)	③UR南永田団地 (南区) ※	④愛甲原住宅 ※ (伊勢原・厚木市)
②本牧満坂地域 (中区) ※		⑤山北町
		⑥茅ヶ崎市
		⑦川崎市

15

# 障害者とともに楽しむ まちづくり

NPO法人横濱ジェントルタウン倶楽部  
桜井 悦子

## 身近にいるはず--の障害者

- ・21世紀は超高齢社会。
- ・国民の6%(約17人に一人)が障害を持つ。

## 障害者も共に生きる社会こそノーマルである

- ・1960年代に北欧で始まった「ノーマライゼーション」
- ・1981年「国際障害者年」「完全参加と平等」「障害者の移動の自由の確保。」
- ・1990年アメリカでADA法(障害をもつアメリカ人法)成立
- ・2006年 国連における障害者権利条約が採択  
(当事者参加の原則・合理的配慮)(日本では2014年批准)
- ・2016年 障害者差別解消法施行
  
- ・1970年代、自治体の要綱による「福祉のまちづくり整備指針」等
- ・1990年代以降、各自治体が条例化へ。
- ・1994年「ハートビル法」
- ・2000年「交通バリアフリー法」
- ・2006年 両者を統合した「バリアフリー新法」

## ・福祉のまちづくり市民フォーラム

- 1996(H8)年、横浜市福祉のまちづくり条例に向けて
- フォーラムの企画・運営主体としての**市民スタッフ会議**
- 200人のワークショップ**(テーマ:条例制定に向けて、市民・事業者・行政がお互いに理解しあい話し合う**協働のまちづくり**)
- 市民スタッフによる寸劇等のプレゼン

■ フォーラム会議風景 (調査季報133号・1998.3より)



## ・福祉のまちづくり市民フォーラムその後の集い

- 市民スタッフやフォーラム当日の参加者等による、**市民運動グループ**へ。

横浜市福祉のまちづくり条例に基づく

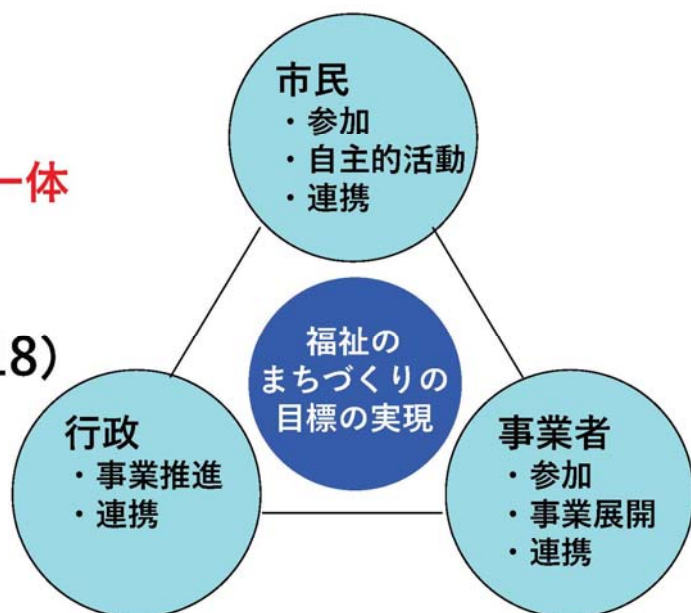
## 福祉のまちづくり重点推進地区事業

### ■事業の枠組み

- **三者協働**
- **ハードとソフト一体**
- 期間限定

### ■6地区(H11~18)

- 関内駅周辺
- 鶴見区寺尾
- 磯子駅周辺
- 青葉台駅周辺
- 金沢文庫駅周辺
- 中川駅周辺



## 関内駅周辺重点推進地区協議会

### ■目標

横浜らしい魅力的な環境を誰もが享受できるまちにしていくこと。

### ■多様な主体の関わり

商店街、事業者、市民活動NPO、障害当事者、まちづくり専門家、行政

### ■ソフト活動一次第に商店街・市民主体の活動へ

#### 5年間の主な活動の流れ（ソフト）

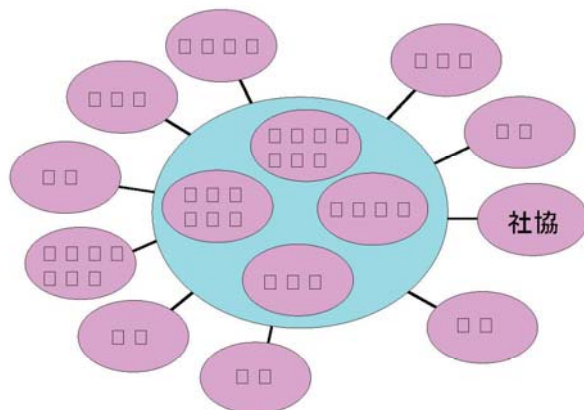
	調査・計画策定	協議会主体の活動	商店街・市民主体の活動
11年度	●地区指定 ●現況調査	●視察体験まち歩き 『初めの一步』	
12年度	●障害者意識調査 ●福祉のまちづくり宣言・活動指針の策定	●人にやさしいまち歩き ●市民フォーラム	●市民フォーラムプレイイベント（イセザキフォーラム2000）
13年度	●環境整備の目標設定	●福祉のまちづくりとアート展 ●ガイドマップ作成	●イセザキフォーラム2001・車いす御輿 ●接客勉強会
14年度	●行動計画の策定	●人にやさしい商店街シンポジウム ●ガイドブック作成	●イセプラ・プレシンポジウム・車いす御輿 ●第2回アート展 ●接客マニュアル作成
15年度	●地区指定終了後の組織・拠点づくりの検討	●ぬくもりピンゴラリー	●第3回アート展 ●車いす御輿等 ●接客勉強会

今後は、民間主体で活動の継続・発展に向けた取り組みを行います。

## ■横濱ジェントルタウン倶楽部の誕生

- 民間の自由な発想や行動力を存分に発揮し、人にやさしいまち（ジェントルタウン）づくりの活動を推進する。
- 障がい者のためだけでなく全ての人にとって魅力的なまちづくり（＝人にやさしいまちづくり）をめざす。
- 人にやさしいまちづくりを基軸にした新しいライフスタイル、新しい街のあり方を発信し、ジェントルな地域の創造を追求する。

多様な団体、個人が集まるネットワーク型、協働型の団体



## ■横浜市協働事業提案制度モデル事業による 新たな活動の展開

- ・H17～19年度の3か年。
- ・触る地図の作成 ～コンセプトは共用～
- ・触る地図の活用(まち歩き、魅力スポットのデータ化等)



### ■様々な触る地図作成 —行政・企業等との協働



### ■研修・福祉教育 —行政・学校・企業等との協働





## ■ 商店街でのイベント — 商店街との協働



## ■ バリアフリー散策・観光 — 行政・NPO等との協働



## ■ 障害当事者の参画

- ・すべての活動に、障害当事者が参画
- ・当事者にしかわからない気付き、視点が、新しい発見につながる  
→まちづくりをリードする障害者・高齢者
- ・当事者が積極的にまちに出ていくこと  
→それにより、出会う人々の意識が変わり、まちが変わる。

## ■ 一緒に楽しむことが大切

- ・要求型でなく共に考える。支援する・されるはお互い様。
- ・あら探しでなく、よいところ探し。 +  $\alpha$  でもうちよつと。
- ・良いところ、魅力的なことを、みんなで共有し楽しむ。
- ・飲みニケーションも重要。

# 小さな拠点・(活動)

## 横浜市港北区大倉山の事例を通して

NPO法人街カフェ大倉山ミエル  
鈴木智香子

### 目次

- 1 大倉山ミエル立ち上げの経緯と地域性
- 2 小地域に散らばる小さな拠点の事例
- 3 縦割りを自由に横刺しする活動
- 4 市域、県域ネットワークとの連携  
横浜コミュニティカフェネットワーク  
横浜プランナーズネットワーク等の
- 5 まとめ  
小さな拠点が、小地域で連携し地域内外の活動と緩く繋がることで始まる新たな可能性



## 1. ミエル立ち上げの経緯と地域性

### ■ 横浜市港北区大倉山の周辺状況

神奈川県民、マンション銀座、核家族化による課題も多く、専業主婦層による市民活動の歴史も長い。  
生活クラブ活動、NPO法人びーのびーの子育て支援など

### ■ 2010年大倉山文化村

5人の主婦によるサークル的な集まりに、「商店会養蜂事業のアンテナショップをやってみないか？」と持ち掛けられる。  
3か月で開店。

➡ もともとの市民活動の地盤  
+ 主婦のコミュニティビジネス指向

現在：コミュニティカフェ運営  
地域情報発信  
活動をつなぐ活動





**1. だろっぶ**

地域子育て支援拠点  
公設民営



**2. 大倉山おへそ**

商店会活性化と地域住民  
の交流拠点



**3. 社会福祉法人かれん  
(5拠点の運営)**



**4. 菊名お出かけバス**

移動困難者への地域交通  
の住民による提供



**5. みんなの食堂**

地域の有志による  
子ども食堂の実施



**6. すきま食堂**

MOGU店休日のカフェ  
を活用した地域食堂



**3. 縦割りを自由に横刺しする地域の活動**

**ヨコハマ街普請事業・港北区地域のチカラ応援事業**

**1) 商店会活性化 × 子育てママの地域デビュー**



「大倉山おへそ」



**2) 環境 × 少子高齢化 × 耕作放棄地**



熊野の森もろおかスタイル  
「畑の中のエコステーション」



### 3) 菊名お出かけバス×コミュニティカフェ ×介護保険総合事業 サービスB



あらたな「多世代交流拠点」立ち上げに向けて  
様々な団体、個人、地域包括センター、社協、区役所、が  
連携しながら進めている。



## 4. 市域、県域のネットワークとの連携

横浜コミュニティカフェネットワーク  
横浜プランナーズネットワーク等

### ■横浜コミュニティカフェネットワーク

横浜市市民局との協働事業  
カフェ型中間支援機能の創出・強化・普及

市域のコミュニティカフェの事例研究と伴走支援  
カフェ型中間支援の見える化 → 水平展開と連携が生まれた

### ■横浜プランナーズネットワーク

空き家活用による地域の魅力アップ事業

県域の様々な活動・拠点の事例研究



・小さな拠点でも、外との繋がりを持ちながら、  
「井の中の蛙」にならない活動の拡げ方を学ぶ機会  
に恵まれている。

## ■ 横浜コミュニティカフェネットワーク「事例研究と伴走支援」

→ 『大倉山おへそ』



## ■ 横プラ 「神奈川県ボランティア基金21」 「空き家活用による地域の魅力アップ事業」 港北区の拠点の見える化作業



## 5.まとめ

**「小さな拠点」が、小地域で連携し地域内外の活動とも緩くつながることで始まる新たな可能性**

- ・ 多様な世代、多様な暮らしが混在する地域の課題は、縦割りの組織（行政や、テーマ型NPO単体）では解決困難な状況にある
- ・ 地域にある物的、人的な資源をマネジメントしていく地道な実践が必要
- ・ 小地域の活動や人の見える化により、街の人が必要な時に誰でもそこにアプローチできる敷居の低い拠点運営を「ともに」考えていきたい。

# 横決の市民力に目を向けたら

横決は自治体レベルの自治  
 ・市民が主体となる  
 ・市民の集まりが主体

→ 女性の活躍促進

三代住みは地元の人

東京、世田谷、中野、三鷹

今の世代

→ 自治体の活性化

→ 市民の参加

平政の潮流 - NPOの市民力

1. 市民力

2. 市民力

3. 市民力

4. 市民力

5. 市民力

6. 市民力

7. 市民力

8. 市民力

9. 市民力

10. 市民力

横決の市民力  
 ・ 市民の特長  
 ・ 一般市民は市民力

よと者と受け入れる

横決の市民活動は大人の関係

反対運動には逃げずに

市民活動は市民力

トヨタと三菱の横決運動

横決の市民力

横決の市民力

横決の市民力

横決の市民力

横決の市民力

横決の市民力

横決の市民力

横決の市民力

よと者

元々の市民力 = 自力

市民力の特長

市民力の特長

市民力の特長

よと者

市民力の特長

よと者

市民力の特長

よと者

市民力の特長

よと者

市民力の特長

よと者

市民力の特長

よと者

市民力の特長

よと者

市民力の特長

よと者

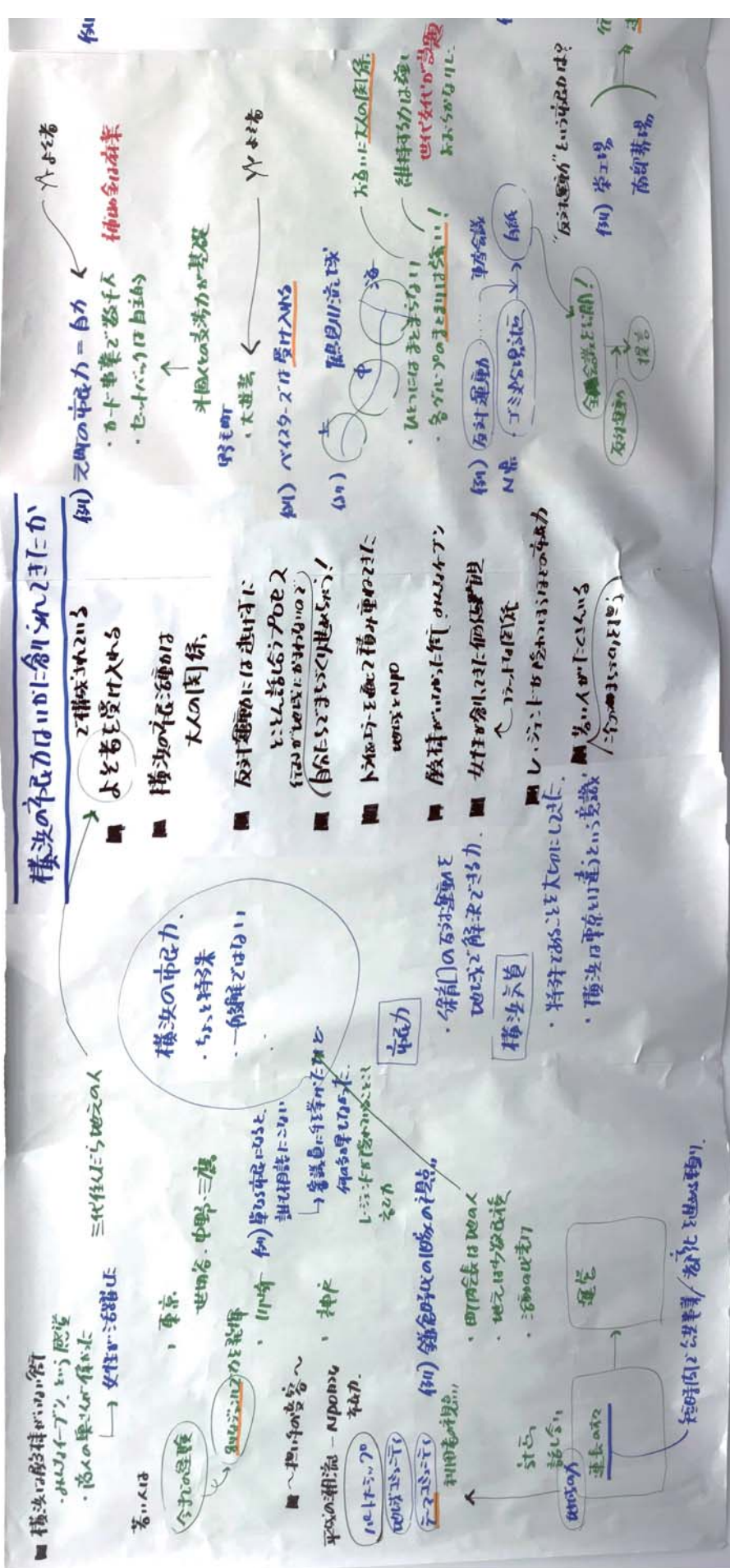
市民力の特長

よと者

市民力の特長

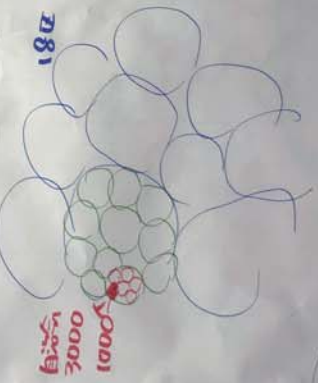
よと者

市民力の特長



議論の着眼点

- 表の割合にだけじゃなく、支える活動 (居場所は横丁がよい)
- 110のフォーマと横串でつなぐ"取組み" (赤い線) (行政の枠組みに納まらないこと)
- 小さな単位でコミュニティが力を発揮する "ほま子" (ほま子) 気算、2何? 必要?



- 例) 空想活用と周辺住の対応を止める
  - ・ 運営側が丁寧な説明を求めた
  - ・ 変更意味の (ボウ) が稀薄
- 例) 議論が成り立つ社会的責任があるのか??
  - ・ 自民と保守系が保守系!!
  - ・ 市民の日付の印刷が見えない!!

例) 昔の更地と建設 → 事業者を支援 (元) 港灣で労働者の組合幹部 → 労働者を支援

- 例) 村田台
  - ・ 話し合い重視
  - ・ 特権の活用は避ける
- 例) 学工場 高層市場
  - ・ 行政主導の趣向に
  - ・ 非行政に選定理由の説明は、必要

例) 元々の中核力 = 自力 (元) 元々
 

- ・ 中核事業が数千
- ・ 中核事業は自主的

↑ 中核事業の支力が基礎 (元) 元々
 

- ・ 大進出

例) ペイオフを学ばせ入札



例) 反対運動 (元) 元々
 

- ・ 中核事業
- ・ 中核事業
- ・ 中核事業



例) 学工場 高層市場
 

- ・ "反対運動" といふのは?

例) 中核事業
 

- ・ 中核事業は強い
- ・ 中核事業が中核事業

例) 中核事業
 

- ・ 中核事業



とーく&トーク 地域まちづくりを語る会 2017全まち会議特別編

横プラが総力戦でお届けする横浜・おもてなし講座

～地域から見えてくるハマのまちづくりクルーズ～

記 録 集

2017年12月

編集・発行 特定非営利活動法人 横浜プランナーズネットワーク

〒231-0023 横浜市中区山下町25 インペリアルビル201

本事業は「まちづくり支援事業助成金」（都市整備局）の交付を受けて実施しました。

